

柳荒美談後編卷之十三

荒木櫻井伊勢參宮の事并津の宿にて荒木をはづす事

夫より荒木又右衛門は櫻井兄弟に向ひて申けるはまづ櫻井氏は是よりいづれへ御こし候やとたづねられて兄弟目と目を見合せ三州片濱の事はおくびにも出しがたくさん候われは數年のねがひにて候得ば伊勢參宮せんとぞんじ候ふと云へば荒木は手をうつてさても奇妙の事にて候それがしも伊勢へ參宮せんとおもひしが調度よきをやりなり御とも仕り候はんとよろこびけるゆゑに兄弟は南無三寶と面色をかへしが今さらいなとも云ひがたく仰のとほり御供申さんと酒をのみかはすといへども酒も味ひなくしてまた肴も同やうなりし爰にまたすみの方に竹内玄丹息をころして桑原桑原と荒木めはやくかへれかすと大汗に成てくるしむのつらきこといかゞはせんとおもふをりふし風氣にて咳が出かかりまことに是にはこまりきる所に荒木も最はや深更におよばんといとま乞してもとの勝手へ行てうち臥けるあとにて玄丹夜着の内より頭を出しあゝおそろしき荒木が形相むねはどき／＼からだはふる／＼いたせしなり時に明日から伊勢同道はちと氣のなき咄しなりといへば兄弟もされば此手段には途方にくれしがいかゞすべしといへば玄丹もさればとよ荒木と同道する時は三州の片濱へ行事かなふべからずよつて參宮といつはりて伊勢の津の町へ入る時分それめしつれて荒木と咄しながら少し跡へ下り津の町へ入たる時分よき茶屋へやすみてはづし給へといふ又右衛門は一圖に參宮と心得て山田のかたへ行は必定期なり其内にわれ／＼道をいそぎ三州片濱へゆく道吉田の宿へだに入るならば片濱の横道へ入り申べし是こそ屈竟なりとよく日甚助玄丹は少し甚左衛門より先へ荷物を出すゆゑに荒木はしめたりと

内々渡邊數馬山住伊兵衛片山武兵衛へしめし合せなんぢらは先へ行べしとかく櫻井に見付られぬやうにして何所までもあとをしたふべしだめて河合又五郎のかくれし所へ行かまたは江戸へおもむきて御はた本衆の内へ行か何にもせよかれら兄弟の跡へさへ付行ば萬が萬河合に出合んと申あはせて渡邊主従は荒木より先へ行ける又甚左衛門は荒木と同道しはなしながら出立せしが道々もなにとなくまむしをふところへ入れし心地して生たる心地もなくこは／＼行ほどなく伊勢の津の宿へ入る此をりかねて甚助玄丹は荷物のさし引してよほど先へ行津のまちよりすぐに江戸海道へ引はづしそれいそげと／＼追立る又甚左衛門は荒木とはなしながら津へ入るゆゑ此時なりと荒木氏少し御まぢあれそれが少し腹痛の氣味用所をからんとある家へ入り用場の無心を申てうらのかたへ行ゆゑに荒木は用たしと心得て門口にたゞずみて相まつ然るに渡邊山住片山の三人はすこし先へ行しゆゑ津の町より宮川の方へぶら／＼とれざるやうに行ける荒木はまてども／＼出ざるゆゑこは不審なりとその家のうらへ入てせんさくするに櫻井甚左衛門は見えざるゆゑ扱こそとおどろき所々をたづぬるに見えざるゆゑ南無三とかけ廻り／＼まち家往來のものにたづぬるに一向さへ眼をくばり渡邊數馬片山武兵衛山住伊兵衛もそれは残念なりとかけ廻り／＼まち家往來のものにたづぬるに一向さやうの御方は見かけ申さずといふ何やうにも廿人あまりの人數といひ乗かけ馬二ひき鎧も二すぢもたせし事ゆゑしれべきはずなるに一かう左やうのものは通らずといづ方にも申ゆゑ荒木は工夫していかさま櫻井はそれがしをふりまかんとわざと伊勢參宮といひて江戸のかたへ行しも計りがたしと四人は取てかへし江戸海道のかたへかけ行茶屋または馬子の人數あるひは人足體のものにたづねかやうわれ／＼は旦那を見うしなひ候がもう先へ通り候や何とぞしらせ給へとたづぬるに馬子人足體のものども肝をつぶしそれは御氣のどくなりどうしておの／＼がたは旦那におくれ候や最はや三四里も御出ならんたしかに御鎧が二本のり懸二定にて立派な旦那がたにて候といふゆゑに荒木主従はそれこそ相違なきぞやれいそげ／＼と江戸海道へかけ出しやつさ／＼と其夜は寝ずに夜道を歩行つひに夜のあける間に桑名

の渡し場までこぎ付かやう／＼の人はいまだ來らざるやとたづぬるにまだ御通りは是なきと申ゆゑ扱こそしめたりとまづ三人は外へかくしおき荒木たゞ一人船場の大石にこしをかけ深あみ笠をかむり面體をばしれれども大の男といひ朱鞆のなが大小を横たへちやんと相まちしは鬼をあざむく荒木又右衛門に百萬の大敵にもおそれざるのありさまなり櫻井甚左衛門甚助玄丹とうは上下廿人あまり津のまちより引はづし今度はうまくふりまひたりとざんざめかして乗かけの上にていかに甚助伊勢參宮といつはり荒木のこはものをはづしけるはよしといへどももつたいなきは天照大神宮を出しにいたし參宮もせざるはちと云わけなくたゞしかさねて參宮をいたしあつく寄進をいたすべしと馬上にて伊勢の方をふしをがみ南無天照皇大神宮春日大明神入幡大菩薩何とぞ荒木に逢ぬやうにまもらせ給へと拜すといへども神は非禮を請たまはず何やらに金銀を出し金の鳥居を立て拜んこともころざしのあしき時は神佛どもに納受なしといふ

實に櫻井が荒木に逢ぬやう／＼とおもひても神佛の罰は何ぞ此難をまぬかるべきや何ほど金銀を遣ふとも又智恵が萬々と有とも善と惡計は天道の見通しのがれべきやうなしすべて神佛へ對して無理の願ひはせぬものなりと漢書にも見えし

荒木櫻井桑名にて再會の事并甚左衛門落馬の事

扱も櫻井の兄弟は荒木に逢ざるやうにまもらせ給へかさねて參宮の時分はあつく報謝せんと大神宮を祈りながら道をいそぐ扱その夜は勢州神戸の宿にとまり旅のつかれをやすめよく日上一統快然として悦びやれ／＼のふ／＼としたり荒木は昨夜は伊勢山田の近邊をまご／＼して今日などは參宮してたづねてあらふこれひとへに玄丹老の智慧なりとざんざめかして乘來るはや桑名のわたし場までおひこんで七里の船に乗りし上は大丈夫いかに荒木が勇ありともし

るべきやうなしありがたや天照皇大神宮日本の總社なりとふし拜みい／＼と來る竹内玄丹にて候に櫻井氏の仰せのとほり荒木をふりまさしゆゑ此入道も酒がのめるなりも／＼荒木の顔を見るとちゞみかへるこれにはいふに言れぬ譯有りてもう／＼いやな事とはなしながら渡し場へ來り是船頭共ふねをいそぎて出し候へといひながら船場を見ると石に腰をかけ深あみ笠におもみをかくし朱鞆の大小十文字に横たへて居けるゆゑ甚左衛門これ／＼甚助向ふの侍はどうか荒木又右衛門の恰好なりしかしよも又右衛門が是へ來るべからず何とやらむなさわぎがするといふにぞ竹内玄丹もやあ／＼物すごきさむらひなりまた大小の朱ぎやが少し氣にかゝるたゞしよもや今これに荒木が居るはず決してなしひとへに心おくする所ならんとつか／＼と船場へ行んとするにふかあみ笠をとりてやれ／＼櫻井氏でござるや又右衛門先刻より御まち申とぬつと立あがるを見ると竹内鬼玄丹はア、荒木／＼と兩袖をあたまへかぶりて大地へはつたりたふれたり櫻井甚左衛門もびつくり仰てんして荒木／＼とおろ／＼ゆゑにのりかけよりまつさかさまに落たり弟甚助も兄のおちたりしにはかまはずあつけに取られて大息ついて茫然たり其時又右衛門は是は／＼甚左衛門どの御落馬か御怪我はなきやと片手に引立る甚左衛門はからだをうち苦しみ兄弟はぶる／＼としながらさて又右衛門どのへ言わけなしかねて伊勢へ參けいのつもり所急に江戸おもての用事をおもひ出しつゝ御挨拶も仕らず津のまちから江戸海道へかゝりまことに面目をうしなひ候といへば又右衛門もイエ／＼それがしも同やう一體參宮をせんと思ひしが急に江戸おもてへ行たく成りふと出來心にて此道へ來り候かやうに又も出會申はふかき御縁のなす所御互ひに江戸まで御同道仕らんといふゆゑに櫻井もあきれはて所せん荒木又右衛門といへるごまのはひに付られせひなくしてこは／＼道中一所になりて段々日を経てのち三州へ入る岡崎のまちに入り大平川をわたり國府といふ所に兄弟みつ／＼相談するは此さきはよし田の宿なりよし田より南へ行と田原領の片瀨村へ行つもありなり片瀨むらの河合又五郎のかたへ行には中々かくのごとく荒木に付られては片瀨むらへは行れず眼前吉田のしゆくへ來りて

も河合の宿所はしれしといへどもいたし方なく心ならずと櫻井兄弟は江戸おもてまで来りける又荒木も櫻井に付て是も江戸おもてへ着たり櫻井は久々ゆゑまづ四番町の阿部四郎五郎どの、やしきにおち看荒木は赤坂一ツ木といふ所の數馬が母の里江守條右衛門のかたへおち着けり扱荒木は櫻井兄弟を見うしなうては相成ずとて片山武兵衛山住伊兵衛の兩人をかはるゝ四番町の阿部四郎五郎殿のやしき近所へ付置て櫻井が他行といふと跡より付る櫻井は阿部四郎五郎殿へ對面してこれまで又五郎を御厚情なし下さる段を一禮におよびて御仲間近藤登之助殿池田勘兵衛殿水野十郎左衛門殿安藤治右衛門殿その外御ひいきの御はた本衆へ御禮を申上又五郎は當時のは假のかくし場ゆゑよき所へ永住をさせんと相談するに天草じまか松前但かし肥後の國人吉ならんと評議におよぶ所に久永五兵衛殿すゝみ出ておのゝ方の仰せ十指のゆびさす所奇妙なり相良遠江守殿にはそれがし日頃入魂なり相頼み申べしと有りければ諸人ともに屈きやうなりとあつてすぐに評議はきはまりけり

柳荒美談後編 卷之十三終

柳荒美談後編 卷之十四

御旗本衆河合の安住評議の事并大久保彦左衛門智辯の事

斯て久永五兵衛殿に向ひこの上はさうく遠江守殿へ御たのみ下され候へと一日もはやく人吉へおくり長久を計らんと申合荒木渡邊に河合を討せては御はたもとのかきんなり但し又五郎には櫻井兄弟をながくつけ置く時は大丈夫もつとも年々に諸入用を遠江守殿へたのむ事は氣のどくゆゑ是は御はた本一同より生害見つぎ申べしと相談のきまりしゆゑ久永五兵衛殿はすぐにあたご下の相良遠江守殿へまかり越し御たのみある御入魂の事ゆゑおくへ通りひさびさなりと四方やまの物がたりにおよびよきをりを見て五兵衛殿遠江守殿にむかひさて今日参りし事は御はた本一同に御頼み申さんと存る事ありて參上せり何をかつゝみ申すべきかねゝ御聞およびも候はん松平宮内大輔殿家來河合又五郎の事にて御座候御はた本阿部四郎五郎の内縁につれて武士のいきぢと成てかくまひ置とてに御老中より御書付にて一同一日もかくまひ置く事叶はず當ぶん三州のほどりへさしおくといへどもながく隠しとげん場所候はずまづ貴公さま御領内は日本一の要害の地と承はり他所の往來する事を禁ずと承はりおよびける何とぞ御領内に又五郎をさし置れ候やう御たのみ申度と申されければ相良遠江守どの是を聞ておどろきそれは以ての外の事にて候おのゝ方一同に御たのみとあらばいづれとも仕るべく候へども河合又五郎事は武家の手まへに一宿もさせ申まじきとの御ふれなりもしかくまひ置においては同罪との御下知ゆゑなかく御たのみに應じがたしことわるゆゑ久永五兵衛殿げに仰は御もつとも候へばなりしかしわれゝ自分のやしきには置がたしゆゑに貴公さまの御國もとへさし置れ候位の事は何ぞかくまふと申にはあるべからず御はた本一統のたのみゆゑまげて御承知下さるべしとあるゆゑに遠江守殿は

此たのみにこまり家老用人中をよび出して御相だんありていかゞと評議するにいづれも此事ばかりは公儀へおそれありと申して断りけるゆゑ五兵衛どのもちからなくすごゝ立歸りて此事を仲間一同に咄されければ諸人いかゞはせんと遠江守殿承知のなくばたとへいづれの名にてもうかつにはあづかるべからずとあるゆゑに大久保彦左衛門殿のいはくよしゝ此儀それがしが行て遠江守殿をたのまんといふに五兵衛殿は御無用なりそれがしはもとより入魂の中といひ家老用人まであつまりての評議しての断りなり中へ承引はあるまじといふに彦左衛門殿何さゝぜひゝたのみて見すべきなりというゝと相良遠江守殿へ行て案内を乞うておきに書院へ通りて今日大久保彦左衛門まかりこし候事はまづ御家老中に御目に懸り申たしといひ入けるゆゑ家老今村丈右衛門加賀數馬の兩人まかり出る其時彦左衛門申けるは外の用事にも候はず昨日久永五兵衛よりして當家へ御内々御たのみ申入候河合又五郎の事にて候御ことわりの義は公儀を重んじての仰御尤とも千萬なり去ながら御はた本一同評議のうへ隠しとげんとするも武門のいきぢなり若又もだしがたき事さるにても日本のうち貴公御領内人吉は第一他國のものゝ往來せざる屈竟の地とうけ給はる何とぞ内へにて御領内にさし置れ候へかし尤とも年々の扶助入用とうは御はた本よりみつぎ申べくなり何とぞ御たのみ申たしといへば今村丈右衛門是は彦左衛門様の御頼み御口上にいたみ入り申候が此儀は先日久永様へ得と申上候通り公儀よりきびしく仰渡されたる河合又五郎の事ゆゑ領内にさし置て後日外よりあらはれ候はと忽ち主人越度と相ならん事眼前なりよつて是非なく其だんを御ことわり申上しなり此儀においては眞平御用捨下さるべく候といへば彦左衛門殿申さるやうおのゝ方は一向わからぬ断りなり左らば遠江守殿へちぎゝ御たのみ申べし御案内をなし給へと言れて今村丈右衛門加賀數馬もこまりはてしが其ころ評判の大久保彦左衛門の事なるゆゑやむ事を得ずして遠江守殿へ申上る所に遠江守殿も是非なく對面に及ばれける其とき彦左衛門申されけるは今日御家の重役衆まで河合又五郎を御領内にさし置れ候やうに御たのみ申といへども一向承引なくやむ事を得ず御手前さまへ直々に御頼申な

り彦左衛門にめんじて内々にてさし置れ候へとのたのみなるに遠江守殿にもこまり切り彦左衛門殿の御たのみといひ御はた本衆一同の事に候へば承知いたし度候へ共公儀の御ふれの是あるもの是におそれて御ことわり申すと申されければ彦左衛門殿はく其義は天下の大法と申ものなり此度一同貴公へ御たのみ申すもおもて向にてかくまひくれ給へと申にてはあらず内々にて御領分の内にさし置き下され候やうの御たのみなり何も貴殿よりして扶助を請るの又は御城内へ入置御家來のやうにしてくれ給へと申すにはあらず廣き御領分のうちにはいづかたにても少しの地面をかし下さらばそれに普請してながゝさし置ばかりなり貴殿の御ぞんじなき分にてさし置れ候ては事すむ事かと存じ候かやうに事をわけて御たのみ申を御承引なくばあまたの御儀本の内には貴殿をうらみいかなる身を捨て珍事とうも出来間敷事も計りがたく左候時はもつての外の儀なり是等の所をよく御分別あれと申さるにぞ遠江守殿ももし殿中等にて不法の事もやと心におそれ給ひていかにも彦左衛門の仰せのとほりそれがし知らざるぶんにてさし置申べしと有りけるゆゑ彦左衛門こはかたじけなしいづれにも御存じなき分にていつて夫より家老用人一同に大久保彦左衛門と相談して一かうしらするぶんにてさし置との約束なり

甚左衛門荒木に附られ難儀の事并星合團四郎の事

されば案内しやはやしきよりは出しがたくとさいはひなるかな相良領へ出入の町人江戸へ御用にて來り居合せけるゆゑ此町人を案内としてさし出さんと相談とゝのひけるゆゑ彦左衛門の悦び町人の案内者のつもりにて事を相定めけるゆゑ一同に悦びいさみけるこのをりに櫻井甚左衛門申けるはだんゝおぼしめし有がたし人吉へ參り候得ば安せん長久のはかり事但しこゝに難儀の事あり荒木又右衛門と申ものわたくしのあとを付て來り今もつて四ばん町の近邊を付まといひ申候といひけるなさま音に聞えし荒木にはこまり切ると三州白須賀の御代官たる松平五左衛門どのをたの

み三州よし田の宿よりぬけ道をこしらへる是荒木の難をみなく、おそれて劍術の達人をばまづ十人えらみて三州片瀨の内片瀨むらへ遣はし又五郎を警固させるかた濱は近藤登之助の知行といふまた松平喜兵衛殿曲淵庄九郎殿辻彌五右衛門殿入組ともいふいづれが本説か

又一説には御はた本衆櫻井の物がたりにて荒木又右衛門をおそれて種々評定し大久保彦左衛門の工夫を以て一同よりあつまりて荒木又右衛門に用事はある間彦左衛門宅まで罷り越候やうとよぶ是によつて大膽不敵の荒木なれば少しもおそれず大久保彦左衛門のやしきへ出るしかるに御はた本衆は武藝のすぐれし浪人を十八人よび寄一々荒木と立合せ其内に又右衛門と同格のものをえりいだし河合又五郎へ付るにおいては大丈夫なりとの内談にて一
一又右衛門と諸はたもと衆の列座の中にてたち合せけるに又右衛門は此ときなりと浪人十八人をかたはしより一人も残らずたゞきふせたりしかれば是におそれて一統に取まき又右衛門をきつてすてんとせしを彦左衛門かれがごとき武勇のものをうつは武門の冥加に盡るなりと一ツのはかり事をもつて助けかへすといふ是笑ふにたへたりける事なり中々かゝる時節に又右衛門をよぶとも敵をたづね出し討んといふ先なればうか／＼とあやふき所へ行べきはずなし又一説には彦左衛門は又右衛門が大勇をふかくかんじ河合又五郎を肥後の人吉へおとす事をもちく一に知らせ櫻井兄弟の江戸出立をも内々しらせしといふも是れあやしき事なり彦左衛門どの荒木と同腹ならば骨をらずに河合を討べし仔細は三州片瀨のかた瀨村に居る所を不意におしかけてうつはなんの仔細かあるべきこれいつはりのしるしなりまことにしらざると申すが本たうの事なり

扱河合へ付し浪人の随一といふはほし合團四郎といへる一刀流の達人なり此ものは九州柳川の城主立花右近將監殿の家にて高百五十石のさむらひなりしが幼年の時より十時金彌の弟子となり一刀流をまなび生れ得たる力量といひ無双の達人となりたる然るにかく劍術に身を入れし身分なれども壯年のまよひは色欲なり柳川の在に千代田といへる新

田の小むらあり此村へ城中より二十町計を隔てしが團四郎の父屋合五郎太夫の方にひざしくめし仕ひし小もの千代田の百姓なりその百姓至て實體のものにてむかしの御主人さまなりと度／＼機げん伺ひに来るゆゑ團四郎はかの百姓の内へ釣にゆきしかへりに立よりて休息しける所に此家にむすめ一人あり十七八にて田舎にはめづらしき器量なりこゝに主人の若旦那様と娘も共に御茶などをさし上げるゆゑ團四郎ふとこの娘へ手を付しがわけある主人すぢゆゑむすめも承知してふかき中となりける去ながら百五十石の侍の若だんななれば至て小廻りの百姓の娘ゆゑ女房にもいたしがたくよる／＼通ひける所に村中の若ものども此事を聞立腹しにくき星合團四郎とやらなり當むらのむすめをだまし地頭風にて毎ばん通ひ村の若ものに恥をあたへる段奇怪千萬と大いにいかり廿五人申合て相まち居る此事をば團四郎露しらずして例のとほりむすめのかたへしのび来る所を村の若いもの廿五人くる／＼と取り巻是御侍地頭のけんしきにて當むらの箱いりむすめへ疵を付しは何事ぞやおまへに疵を付られてあのむすめはかあいやよめ入聲とりも出来ずそのかはりに御祝ひ申といかさま竹の先に笹の茂りにどろを付てはら／＼と八方より打ければ星合團四郎惣身一めんにとろだらけと成るゆゑ團四郎もつての外いきどほりおのれ百姓の分ざいとして我々に無禮も法に過たりとをどりこみなげ捨んとせしに百姓大勢なれば石礫の類を手々になげ付棒を以てたゞき立／＼しけるさしもの團四郎大ぜいに叶ひ難く刀を抜て三四人きり倒しけるさしものやつらも是におそれて逃ちつたり團四郎もかゝる騒ぎゆゑ娘の方へ行く事ならず口をしながら立歸るとして僅二間計りの川へかゝる橋は竹や木を以てあみ渡したる百姓の渡したる橋は懸りてのぼるといつの間にか五六人この橋へ繩を付て小笹の中へかくれ居てゑいや／＼と引ける故に團四郎いかでたまるべきとんとぶと川の中へおち入たりその時百姓しめた／＼と廿五人また／＼かけ來りて石を投込／＼しけるを團四郎ぬれ鼠と成り刀をさげてをどりあがり追かけ／＼百姓を口をしさのあまり七八人を切りたふしけり

柳荒美談後編卷之十五

星合團四郎牢拔の事并白井峠にて窮女を救ふ事

斯て星合團四郎は百姓共を刃傷におよびし評判上へ知れしゆゑ團四郎ふとゞきものなり百姓を手負せおのれは川へおとされ武門の道にあるまじき事なりと吟味中揚り屋へ入れ置し所に團四郎はさてく口をしき事なり相手は數にもたらぬもの共なり何とぞして此所を逃出んとある大雨大風の晩に揚り屋の格子を二本おしやぶりて其所よりかけ出す所に番人此おとに目をさましそれを牢やぶりなりとかけ来るを團四郎力量すぐれし若ものゆゑ番人二人までなげ出しこゝに番人の刀をうばひ取て是を帶して柳川おもてをかけ落す左ればふたゞび立花家の家中のものに出合ふ事叶はずからふじて上がたまで來りけるが牢より出し計りゆゑ路金にはまことに困り道ならぬ事とおもひながら往來の旅人を一兩人討てきんすをうばひとつてだん／＼江戸おもてへ下らんと信州へ出て下りし所に輕井澤といふ所へ來り一宿せんとせしも此所に至てかたく宿屋にて獨り旅といひことに年若の浪人などはとめず團四郎にはほとんどこまりいろいる頼むといへども承引せず是より白井峠をこえ給へといふゆゑに團四郎今は是非なく只一人こゝろぼそくも峠へのぼるにこの山は信濃と上州の堺にて手を立しごとく大難所なり團四郎は大丈夫の若ものなれば旅のつかれありといへども事ともせずしてだん／＼と絶頂へのぼり詰ると茶屋の跡ありこゝに大ぜいの聲ありければ夜中といひ枯木を焚て火かけにすかし見れば一人の女をとらへ亂坊のありさまゆゑ團四郎はそつと峠へのぼりて伺ふに大勢のものは非人の體にて女をくるく／＼と取まきヤイ女めも叶はぬぞいくら泣いても供の男は谷合へうち込し今はなんぢ一人なりさあ得心していふ事を聞せひ／＼いやと言ても叶はぬことなり首は首手は手あしはあしとすん／＼引ぬくぞ命ありての物だ

ねなり死て何の悦びぞさあ返答次第と泣入女の手をととりあしをとりになくさまんとするゆゑに星合團四郎心さま悪人たりとも赤子の井戸へ落とすを見て助けざる人なしといふ是人の常なりしかれば不便や女を亂妨するを見るにしのびず助けんとおもひ女はもだへこがれてやれ人ごろし／＼と泣ど叫べと聞入ざる悪黨ばらこやつがうじやうの女なりとむりに強陰におよぼんとするを團四郎はさつと飛上りて大音あげてなんぢら此所を何方と心得候や大天狗小天狗の住家なり然るをけがれをなさんとする大罪人一人ものこらずけころしてくれんと右と左りへ二人を引とらへうんとさげびてはるか谷へなげ込ゆゑ大勢の非人どもそれ天狗さま／＼とおそれわな／＼きア、おそろしやたすけ給へと言ながらまだ亂妨ははじめませぬ今はじめやうとおもうた計りおそろしや桑原々々と雷の落かゝるやうにおもうてにげ迷ふを團四郎はおもしろし／＼と取てはなげ／＼又はけちらしするありさまは實に天狗とおもふも斷りなり夜の内の事なれば面體はしれずふるひおそれ居たりける女は夢の心地にて息をつきて居たりける團四郎は女にむかひこれ女中我も人なりさりながら此所を通りかゝりかゝる災難を見るにしのびずたすけたりなんぢは何ものなるとたづねられてかの女さてはあなた旅のお侍さまにて候やとふし拜みうれし涙にくれながら／＼申はわたくしは此ひがしにあたり松井田と申所の名主の娘にて候親類のかたへ法事ありて罷り越し下男一人めしつれて歸らんとせしをあまたの非人どもに付られて取まかれ下男は谷へ突落されすてにあやふき所を御助け下され候てありがたく候となくなく申ける松井田と申所はわづかに候間御おくり下さるべしと申けるゆゑ團四郎はさて／＼夫は不便の事なり下男は谷へ打込れて相果しとやにくきやつ原なりさればなで切にすべきものと何にもいたせ又候來るまじきにもあらず送りとゞけんといひて女をば團四郎同道して行にける又松井田の名主は娘のかへりおそきゆゑ案じて松明をもつて五六人むかひいでけるが途中にて出あひていかなる事にておそかりしとたづねけるにむすめはなく／＼申には今日非人に付られし事を逐一物がたりにおよびこのおさむらひさまにたすけられしと其次第はなしければ名ぬしは殊の外悦び團

四郎をつれかへりいろ／＼と馳走して是よりいづれへ御出候やとたづぬれば團四郎それがしは浪人ものにして行べきあてもなくといへば名主さては左やうに候やよき便をもとめてさし上申べし此娘はひさ／＼江戸表近藤登之助さまと申に奉公せしと申ゆゑ此縁につれて近藤登之助殿へ星合團四郎はすみ込けるのちに松井田の名主のむすめを女房にもちて一男を生ず兼松といふ今度近藤家より團四郎をもつて又五郎へ付けん仰あるゆゑに團四郎申けるはわたくし又五郎を守護し申べきが萬一の時はせがれ兼松を御取立下さるべしとねがひける間其義は少しもあんずる事なかれと天下の御旗本一同に引請るとの事ゆゑ團四郎うれしく一命は君に奉らんと欣然として御請申ける

劍術の達人十二人三州へ出立の事 櫻井兄弟片瀬村へ行く用意の事

まづ櫻井より先へ出立する者には星合團四郎竹内鬼支丹あじ川瀬平武藤小源太石川傳藏村上五兵衛神道多平高野伴藏柳島藤助矢鳥郷藏間淵藤十郎川瀬久馬等すぐりて劍術の達人十二人館もち若黨小ものかれ是二十六人にてにぎ／＼しく江戸を出立して三州田原領の脇片瀬村へ着す然るに河合又五郎は海手の絶景の場所へ風流に家作して所々の寺院名ぬしとうを相手として日をおくる然るに江戸おもてよりどろ／＼と大勢来るゆゑ小ぢどりして悦び出迎ひ諸人さゞめきわたり此たび御旗本衆のふかきおぼしめしにて肥後の國人吉の城主相良遠江守殿御領内へ生涯かくしとげんと相談きはまりそも／＼相良遠江守殿は高二萬二千石といへどもいたつて領内繩のび手びろにして世の所領とは十萬石にも向ふ江戸おもてより人吉まで三百五十一里半右の相良領へ入ると關所あつて他國のものは一人も領内へ入らず夫より一日路をへて又關所有て領内のものだに手形をもつてあらたむまして他國のものはかたく往來をとゞむそれより一日路を経て人吉の城下へ出づべく領分へ入て人吉の城下まで二十里あまりをへて大そう手廣の領分なり此領内へ入て永住させんと相良殿の御出入りの町人道案内として來りしといふ右見送りのため劍術の達人をえらみかやう／＼と申

けるゆゑ又五郎天を拜し地を拜し誠にありがたき御旗本衆のおぼしめし生々々々わすれ奉らずと悦ぶ事大方ならずまづ海邊において大一座をもよふし酒宴をはじめ近邊より琵琶法師をまねき女などを數十人あつめて大さわぎなりしがことをはり此のうへは江戸表よりさくら甚左衛門兄弟のきたり次第一所に九州へ行んと櫻井の來るを相まちける爰に櫻井兄弟はとかく荒木をおそれる事にて深あみ笠の浪人體のものかはる／＼に四番町近邊に徘徊して櫻井兄弟の出るを見ると何所までも跡を付けて晝夜わかちなく兎かく他出など仕がたく此儀いかゞして出立すべきやと御はた本衆一同評議におよぶ所に近藤登之助殿申されけるは此儀は何もうれふるにおよばずまづ品川のほんぜんじそれがしが心安く候間此寺へせう／＼づつ荷物をおくり置置事品川にて道中の荷こしらへをいたし櫻井兄弟も夜分人目に立ぬやうになりをこしらへ一人づつ忍び出若黨小ものもおなじく一人づつ町使にても出る風情にてやしきを出ば目にたつ事あるべからずそれより品川へ行てひんぜんじにて旅支度を致し近藤縫殿之助知行遠州氣賀迄の先觸にて行き給へ道中は縫殿之助家來と云立ちて通行すべしと申に付諸人は屈竟の事なりと是に相談きはまり夜に入て一人づつ四番町のやしきを入目に立ずさしもの荒木も忍びを付ると云へども是れ計りは夢にもしらすことわりなるかな櫻井は荒木におそれて阿部のやしきを出る時は顔へかう薬を所々に張紙し髪を亂し阿部のしるしの法皮を着しけるゆゑ荒木方の山住伊兵衛片山武兵衛も櫻井とは心付ず残念なる事ともなり櫻井兄弟は近藤登之助のはかり事て首尾よく番町を出て品川の品川寺に來りほつと大息をつきやれ／＼うれしやとて此寺にて道中の用意におよぶゆゑに御はた本衆にもしるのびに品川へ來り櫻井に遇て是より貴殿は三州片瀬村へ行河合を同道し肥後の人吉へ罷越候はゞてかやう／＼になし候へと道中にて萬々一の用心の爲に警固のさむらひをあまた先へつかはし置候間隨分と萬端に心を付ておくりとゞけ給へまづ此ぶんにては荒木とやらは夢にもしらすしてやはり阿部の近邊を伺ふかもしれずこれこそ又五郎が運のよき所の仕合なり貴殿の大幸またわれ／＼も一同のよろこびなりとて大勢御はた本酒宴をもよふして別れをしむ事大

そうなりかるがゆゑに甚左衛門甚助は其有さまにうれし涙をながしかやうに御心をそへられ下され候うへはたとへ荒木又右衛門に出あふとも今はおそろゝ事決してなし其うへに荒木は拙者を付て江戸表にうか／＼罷りあらん其うちにわれ／＼いそぎのほり候てみつぎ申べきなり三州よし田の茶屋のうらよりして御代官を頼みてぬけ道まで出べしといひさきぶれば遠州氣賀までからしり馬二疋馬一疋人足十二人のふれなり櫻井甚左衛門は若黨四人鎗もち一人草履取一人才領一人甚助は若黨三人鎗もち一人草履取一人才領一人甚助は弓の名人ゆゑのりかけに半弓をつけすわといふをりからは馬上においてすぐに射てとらんとの手あてなり

白矢 三尺のあなを射貫をいふ

三連 三本中途につゞくをいふ

眞鍮 中途にて廻つてあたるをいふ

定せき 星の上にあたるをいふ

井儀 井の字形にあたるをいふ

是を以てすなはち五射のはふといふなり五射のはふを仕かけて櫻井甚助はいう／＼として出立なす

柳 荒 美 談 後 編 卷之十五 終

柳 荒 美 談 後 編 卷之十六

吉田左太郎報恩の事井荒木櫻井の跡を追ふ事

爰にふしぎは藤堂大學頭殿の内に梶原源左衛門といふは高千貳百石の大祿なり此悴に梶原源之丞というて荒木又右衛門の門人なり柳生流を上達して印可を取て今は江戸屋敷にて梶原源之丞劍法の指南におよぶ是偏に荒木のお蔭なりと父子のよろび大方ならず然るに源之丞江戸表に罷在父源左衛門は國勝手なりすべて人は大切のものなり何事に寄らず少しの事をうらみ根にもつて人命にかゝはる事ありいさゝかたり共能事は其徳になづき善事來るは世のたとへにも情は人の爲ならずみなわがためになるといふも尤なり梶原源左衛門の方に子供の時分より召仕ひし若黨に左太郎といふものいたつて實體なりしが江戸詰の時分ふと友達に進められて吉原へゆき一度が二度となり三度とたびかさなり遊女にはまりて遣ひはたしわづかの給金なれば力およばずとやせんかくやと心をくるしめけるをりからゆゑに若氣のいたり主人の用向にてほかへまかりいで金子十兩うけとり來りしが此節ひと遊女にはまり金子にこまりしまふと悪心しやうじ主人の金を遣て旦那の前はうけとり來らずといつはりて申し置ける所に此事が翌日になつて梶原源左衛門の耳へいりしゆゑ不届のいたしかたなり諸人の見せしめに不便ながらも手討にするといふを源之丞いとをしき事なりと親父へかくして金子十兩こしらへ是をつぐのひて吉田左太郎の命をたすく其時左太郎は誠に若旦那の御恩わすれはせじとふしをがみ／＼うれし涙をながしける其後遊女がよひの事にて御門切となり又者の身分とは申せ共むづかしくなりて暇となりしゆゑ吉田左太郎は残念ながら身のうへをくやみて是より御簾本衆へ奉公にいてたり然るに此節は身を慎しみてより相勤むるゆゑに人を頼みて梶原源之丞方へ出いりをねがひけるは元より源之丞の目をかけし吉田

左太郎の事ゆゑ是をゆるしければをり／＼御機嫌よく入らせられるやと尋て来る然るに源之丞は此度先生の荒木氏櫻井を付るといふをき、師弟の中にてよく知るゆゑかの左太郎をまねき其方今はどなたに勤むるやと尋ねけるに左太郎申けるは私は當時大久保彦左衛門の内にて中小姓となりて罷在と申ゆゑそれは幸ひなりもし阿部四郎五郎どのの屋敷にまかりある櫻井甚左衛門といふ者遠方へでもゆくならばいそぎ知らせくれよと是一大事の頼なりと申ければ則ち左太郎承知仕り候と難く請あひし所に主人の彦左衛門殿の供をして忍びにて品川の品川寺より櫻井の出立を見立せしゆゑさてはと左太郎は早く源之丞殿へしらせたくおもへども旦那の供ゆゑ心せきて彦左衛門殿御歸りあると同役を頼みてちうを飛が如く梶原源之丞の方へ来り大息になりて申けるは今朝未明より櫻井甚左衛門品川にて支度し出立せしといふにつきて源之丞は仰天しよくこそ知らせけりというて赤坂の一ツ木まで早馬にてひたひたと乗付荒木に對面して櫻井は今朝かやう／＼と申けるゆゑ又右衛門はおどろき扱は東海道を登りけるか夫おつかけると梶原源之丞へ一禮しながらかたはらに居る渡邊數馬に向ひ其元は番町に伺がふ所の片山山住を同道して跡より来れといひすて、又右衛門さつと駈いだす只一人なり渡邊數馬もかけいだして番町へ行て片山武兵衛山住伊兵衛の兩人を同道していざや来れ／＼と若手の三人いきをもつが品川の方へとかけいだす其早きこと矢のごとく早朝に出立ありし櫻井を荒木は其日の七ツ過のころ江戸を立て追懸ける兄弟は今度こそ大丈夫なり又右衛門を江戸へ殘してうまい／＼と兄弟乗懸にて悦び／＼登るその夜は十里あまりにて戸塚の宿へ泊りける又荒木は片山に向ひて汝は數馬に付添て来れとて道を急ぎ只一人六郷の渡し場まで片息になつてきたりければ日は西山に暮しゆゑ一夜の内も寢ず道に急ぎてやうやく戸塚の宿へいと夜はほの／＼と明渡る櫻井は是をば夢にもしらず翌朝未明に戸塚をたつて其日は小田原へ泊るつもりなり又右衛門は大體櫻井まだけうは小田原あたりの泊りならんとて道々問屋々々にて聞合せけるに近藤縫殿助様御家来上下廿五六人にて御通りなりといふゆゑ又右衛門是に違ひなしと悦び翌日はゆる／＼と道をゆき酒匂川の渡りに

て渡邊片山山住の三人に出合しゆゑ又右衛門三人たがひに悦び其日の夕方に小田原宿へいつて伺がふに正しく近藤縫殿助どの、家来の泊りあるゆゑ又右衛門是に違ひなしと大いに悦びて夜に入り其宿を伺がふにまがひもなき櫻井兄弟なりしゆゑ荒木は三人をまねき先は安心なり是よりは四人の者ども今宵は當小田原へ泊り明朝櫻井より先にたゞんと問屋場を聞合せけるに近藤様の御家来は明け六ツ時の御立と傳馬人足を仰せつけられたりと申ゆゑ又右衛門はしめたしめたと主従四人は別宿へ泊り其夜は四人安心して休みける翌朝七ツ半時に荒木は宿をたつて御關所を四ツ前に通り櫻井より二里ばかりも先に立て程なく三島明神へ來るとして是なる明神へ櫻井參詣すべしと此所にて相待ん汝ら三人は深く身をかくすべしと外の宿へ留置て荒木只一人明神の大鳥居の蔭に相待居ける然るに是を夢にもしらず櫻井兄弟は小田原の宿にて酒宴を催しまづ／＼目出たし／＼荒木のごまのはひにはなれて悦びたえずよくじつ六ツ半時分宿を立てのり掛にてい／＼と御關所へ來り近藤縫殿助家来と名乗て御關所を通りぬけ其日の七ツ時分三島の宿へいりていかに甚助われ／＼九州人吉へゆくともはや此明神を見る事も相成らずゆゑに參詣して武運をいのらん實にもつともとて馬よりひらりと飛おり兄弟若黨三四人召抱しを連てあとは殘す前の茶屋へ差置てい／＼ぜんと神前へぞ來りける

櫻井兄弟三島明神へ參詣の事并荒木に逢ひ再び恐怖の事

抑々此三島明神の宮は公儀御普請にして東海道に隨一の大神なり御朱印は五百三拾石ありて神主は矢田部式部といひて大地なり櫻井兄弟は神前にて伏拜み南無奇妙頂禮われ／＼首尾よく河合又五郎を肥後の人吉まで見送り候まで何事もなきやうに守らせ給へ別しては荒木又右衛門には一生も二生もあはざるやうに第一の禁物何とぞ明神さま御願ひ申ますと必らず御わすれ候事又右衛門と申はこはものゝ事にて御座候と人に物いふごとくにあひ願ひける甚助はこれ

兄上さまもはや箱根越て當明神まで來り候へば荒木のあの字も有べからずなんと今夜は荒木をふりまひたる祝ひに名高き三島女郎をあけて名残りの樂しみはいかゞ世の人の歌にも

雪になりたや箱根の雪にとけて流れて三島へ落て三島女郎衆のけせう水

斯いふからわれも雪にはあらねど今宵はとけてくれん物をとたはむれはや大鳥居の前へ來ると鳥居の蔭より大音に珍らしや櫻井甚左衛門殿もはやお出もあらんかと先刻より此所に相待候まづ御堅勝て御無事で御息才ていやはいづれも御すこやかて甚助殿も相替らずにこゝと人相よし三島女郎衆の化粧の水となりたやとけてしまひたいとはよい御樂しみいざ御供いたさんと出し候荒木又右衛門なり二王立につゝたつて居けるゆゑ甚左衛門是を見ておやとて荒木とて又々々々いでたはこは夢かゆめならはやくさめろさめないどとせうと顔色土くれのごとくなりあつとあきれて大鳥居へあたまをこつきり打付てあいたとてあ痛い荒木又右衛門に肩間を打れたと騒ぐ甚助も荒木を見るとやあとてましたははははとてあ痛いはあ雪になりたひ早く此場とけてしまひたいと途方にくれてた夢を見し心地にてあいさつもいばこそ顔色青くなり赤くなり白くなり黒くなり五色になりて土のごとく又黄色になりいろいろ替るはめづらしき面體なり江戸兩國へ見せ物にいだしたならば大金になるべしと又右衛門はをかしく是は櫻井氏そのやうにうろたへ給ふなこんな事と思ひしゆゑ今度は某もせう江戸表にて路金も借てきました貴殿の御厄介ばかりにはなるべからず今晚はけつにて御一所に泊りちと爰ておごり申べしといふに櫻井兄弟はへえとためいきをつきななさく私しがちとおごりて荒木さまへ御馳走申べし兎角御たがひに浪人の事ゆゑむかしの事はいちがさかへたとおもひきり給へ難波の事も夢のまたゆめとおぼしめせといへば又右衛門おほせにやおよぶ貴殿は御内福此又右衛門は困窮ものとかく御目をかけてくだし給へるときに此度は櫻井氏どちらへ御通りに候やとたづねければ櫻井さん候わたく

しはせうしらべあつて攝州までまゐりますといへば又右衛門さては攝州までいやはわしが仕合なり此又右衛門も攝州まで登るつもりなりさらば御供いたさんと悦ぶゆゑ櫻井はさては迷惑當わくなりこんな御供は狼に跡を送らるゝの心地也といへども今は所詮かなはずと其夜は三島の宿へぞ泊りしが兎角荒木がおそろしくていぬれども席を安んぜずくらへども食をあまんぜずとは此時なりといきばかり詰て是よりはづす事もならず毎日同道して日敷をへて三州吉田宿へ來りひそかに甚助と相談してかやうの時の手當にかの白須賀の御代官より拔道をこしらへてくだされしは有難き事なりとて此拔道にてふりまかんまづ汝ぢは荷物に付てゆけ某しは一人にて荒木又右衛門をふりまかんとて吉田の宿にて眞砂屋權八といふ脇本陣へ休みて中食をつかひけるがつひに此所にてさすがの此荒木も甚左衛門の謀計にいつぱいくひてふりまかれしは是非もなき事なりける

柳荒美談後編 卷之十七

荒木櫻井吉田旅宿の事并甚左衛門再三身を隠す事

扱も櫻井甚左衛門と荒木又右衛門の兩人は權八方にて酒をのみあひて居ける其内に甚助は大勢馬ともいつのまにか拔道より南へいつて片濱の片瀬村へゆきにけるさすがの荒木も是には一向心付ずしてありけるももつともなり此の邊にはほかへゆくべき往來も見えざるゆゑに心をゆるすも尤もなり扱甚左衛門は又右衛門と酒を吞て居ける内甚左衛門はひそかに勝手に懸り御亭主ちと御目に懸りたしといふゆゑ亭主權八はいとづる甚左衛門は小聲にてさて御亭主其元へ内々に頼度ことの候あれへ同道せし朱鞘の大小を帶せし大兵の男は江戸から一所に付られしごまのはひといふ盜賊にて候天下に名を得し熊坂長範にひとしきわるものにていろ／＼道中にてふりまかんとせしがとう／＼付添ひ來たりて途方にくれたりさるに依て其元の奥座敷にて小用にゆくといひてひそかに内庭より裏へにげ候まゝ何卒しらざるふりにとりなしくれ給へしかし刀はあれにわざとすて置て小用所よりにげいだすべしとなきときはごまのはひが付て來らんと誠に心配いたすゆゑなにとぞ是を頼むなりあとにて刀は所の御代官へ捨物になりとうつたへくれ給へ兼て御代官は我らの縁者ゆゑなにも仔細はなし是ぞさせうながら右の御禮なりとて懷中より金子五百疋をいだしてあたへけるゆゑ亭主もあきれはて、扱はあの朱鞘の大小はごまのはひにて付られ候や恐ろしき大兵なりつよさうだ／＼とて随分御頼のおもむきはしようち／＼と内々示し合せて櫻井は又右衛門と座敷にてそしらぬ風情に酒のみ替して居たりけるにやがて甚左衛門は是亭主小用にまゐりたし案内せよといつていかに荒木氏刀を是にさし置ける間すこし御頼み申なりとて奥へづか／＼と立てゆく荒木も櫻井に目を付るといへども刀が是にあるゆゑよもやと油斷をする

ももつともなり甚左衛門は悦び小用所へゆくふりをして亭主と示し合せし事なれば同庭よりひそかに裏の方へといてしが兼て白須賀の御代官よりこしらへ置し拔道をいづると待て居りしは弟甚助顔とかほ見合せて悦び奇妙々々かやうの拔道はひとへに御代官の御蔭なりとてわらひをふくみて櫻井兄弟一手となりそれいそげ／＼と人の知らざる所を飛こえはね越え急ぎてやう／＼三州田原領の内片瀬村へぞ行にける又荒木は甚左衛門の小用所より歸らざるこそ不審なりとて亭主をよび是やいなちちは我らの同道せし侍ひ小用所へ案内をしていづれへ落せしや正直に申せといへどもかの亭主は五百疋の目録をもらひし事ゆゑ荒木をば誠のごまのはひとおもひて知らず顔ゆゑあの御侍らひはまがひもなき所の御小用に御入ける御用所がなにもいたせ餘りにながし然し旅の御草臥にて御用所に御晝寝でもなされしか荒木はいよ／＼ふしんにおもひ何さま合點のゆかぬことなりと追とり刀にて亭主と所々をさがすにかけも形ちも見えず扱はと荒木も途方にくれてさて／＼めいわくなり甚左衛門刀をおいていづれへか落たるやとて血眼になつてつゝ立あがるをていしゆはわざと荒木の袖をとらへ御侍ひさまあなたがたはよくも申合せ今日私内の酒看をば吞たふし喰たふしてにげんとて一人は小用所よりいづれへか化しや今又あなたもふしぎのふりをして立さらんとかさううまきは喰にがしはさせぬ／＼と吉田の宿にて雀／＼とあだ名を取てよく口をきく眞砂や權八代錢は残らずいざ拂ひ給へといへば荒木は酒看の代所か大切の櫻井をとりにながせしとら／＼してかけいださんとせしに眞砂屋の亭しゆは得たり得たりと荒木の袂に取すがり酒看の代はいかゞでござる酒は壹升蛸のにつけまぐろのきじやき玉子のふわ／＼鯛のうしほに一番直の高いは吸物を合せて十八匁八分入りなりとなが口上にわざと荒木をとどめるは首尾よく櫻井を落さんとて工夫なり荒木も今は狂氣のごとくつきとばしてかけいでんと思ひしがいや／＼茶屋なんぞを喰にげするといはれては末代までの恥なりとて心せはしき其うちにも亭主尤ともなり／＼とて懷中より小判壹枚なげ出し酒看茶代まで取らすぞはやくうけとれと刀をひきさげ駈いだすを眞砂やの亭主はやれ御待あれ壹兩とは餘り大そう／＼さし引

勘定仕つらんといふに荒木は心せき勘定いらぬのこりは茶代とあとを見ずしてかけ出したづぬるに一向見えざるは不審なりとて大平川までいつさんにかけて見て見るといへどもなにしておふ往來しげき東海道いかさま御侍ひが御通りなりと申すもあり鎗をもたせて乗掛もいくらも通る道中なれば兎かく實正わからずしていかゞはせんとおもふうち渡邊數馬といつしよになり岡崎の町をこえ矢矧の橋のうへに來りて前後を見合するといへども兎角あひしれずまた先へゆきはせまじかと此うへは宮と桑名の渡しか佐谷廻り此邊に心を付よと桑名へゆきて八方へ眼をくばりかけ廻りかけ廻りあひまつこと二日におよぶといへども櫻井のかけも形ちも見えざればいよ／＼取逃したると此無念は死でもわすれ難しと評議して傳へきく所は河合又五郎をば九州肥後の人吉へ遣はすとの事はかね／＼きよおよぶ然るに此上は櫻井兄弟河合の當時居る所へゆきそれより九州へ渡らんとするは必定なり肥後へ渡るには善惡ともに大坂へいづべし此上は大坂へゆき黒船の忠右衛門をあひ頼み出船の用意をする所を討取んと相談していざや大坂へいそげ／＼と四人は大坂へ來りて黒船忠右衛門を頼みもとより門人の事なれば承知して萬一ふしみより大坂へ懸らず伊丹海道を通りて播州へいづばいかゞと又候伏見へ來りて尋ねける又は大坂と兩様に心をくばりて晝夜に寢食をわすれて尋ねける荒木は大坂の男達どもやれ先生々々と尊敬するゆゑ此度大坂にて御本望をとげせんとて所々へ手分をして櫻井の來るか／＼と相待ける河合又五郎の事は知らずとも櫻井をばよく知るゆゑしよ／＼の船宿々々に心をつけるに櫻井兄弟は荒木に付られいたる心地はなかりしにやう／＼吉田の宿にて眞砂屋權八を頼み拔道どほりをしのびて片瀬村へ來りしかは河合又五郎の嬉しさは天へものぼる心地にてこは有難し／＼伯父うへ様の御着なりとていて向ひにぞおよぶ兼て又先達てより來りて相待し浪人竹内星合ともやう／＼安心して座敷へ残らず居ながれ是まで心遣ひして來るおもむきかつは荒木に三島より一所になつて付れて辛勞せし物語り等をいたしければ此咄しに竹内鬼玄丹はあ／＼とばかり驚くよく／＼荒木には恐れたりけんかくのごとし又五郎は悦びの餘り用意の酒肴を多くいだして是よりずつと大勢居ら

び酒宴をこそは催しける甚左衛門はひといきついで休みける

河合又五郎三州田原領を出立の事并警固の勇士供連の事

時に櫻井の申けるは此度の事は阿郎四郎五郎殿の御蔭也われ／＼の身に取ては忝けなし天下の御簾本衆一統して河合又五郎を一生涯無難にかくしとげんとは死しても御禮の盡し難しいづれも天下に名を残し劍術の達人がたかく大勢付添ひ給ふ上は嬉し涙のこぼれて候いざ一日もはやく九州へ出立申べしと相談すれば又五郎は快然として大いに悦びおの／＼がたかく大勢來るうへはたとへ荒木又右衛門天魔鬼神にもせよおそろ／＼にたらず此人數にて東海道をおしゆかんといへば星合團四郎座を進みい／＼夫はよろしからず又右衛門といふものは中／＼容易のものにあらずなるべきだけはかくれるにしかじいよ／＼叶はざる時は是非におよばずといへば鬼玄丹さやう／＼星合の申さるゝ所至極せり皆々御存あるまじきが仔細あつて此鬼玄丹一兩度出合てちと御咄しはできにくいが大いなる目に合出はせぬが又あつたでもなし又右衛門めは中々常體の人間とおもはれず世の人の申には荒木小天狗といふはいかゞ大天狗のまぢがひならんと舌をまくゆゑ諸人竹内は荒木の手なみを知りて恐れける程の又右衛門なれば用心に然じと評議きはまりて東海道はおそろしとて裏道を通行するに第一番は櫻井甚左衛門并に若黨四人鎗持草履取物持ともに都合十一人二番は弟の甚助是も若黨三人中間小者九人三番に河合又五郎光興は御簾本衆より下されし所の乗物にてい／＼／＼ぜんとしてすゝむ乗物の左右には御簾本衆よりおもひ／＼に若者劍術の達人を付給ふ其面々には荒川瀬平武藤小源太石川傳藏村川五兵衛神道多市高野伴藏柳島藤助矢島郷藏間淵藤九郎川瀬久馬以上十人なり中間小者鎗持六尺ども廿人計りくるり／＼と八方をとりかこみ出立す次に星合團四郎も乗掛にて若黨三人小者合せて九人跡のおさへ萬事の世話役として竹内玄丹上下八人眞先に相良家の案内として町人先に立すべて帶刀をするもの三十七人中間小者雜人合せて五十七人

馬に打乗ていう／＼かん／＼として押ゆく此内に櫻井甚助ばかりは弓の名人ゆゑ二番に乘しが馬上に半弓を付て用心堅固に通行する道中は懸る大勢たりといへども荒木又右衛門は一向心付ずたゞ／＼大坂にて待んとて大坂へゆき又は伏見の邊をはいくわいして相待ことなり扱も櫻井主従五十七人九月十七日の晩にやうやく伏見の宿より着たりける其時伏見の油屋嘉七といふ一番のはたごやは手廣なりとて此油屋へ泊りける尤とも公儀御簾本衆の歴々方なりと申立にて宿をとる然るに馬子の三吉といふもの油屋へ心安く出入するに此者は生國伊賀の名張といふ所にていたつて困窮の百姓の子なりそれゆゑに馬子の三々とよぶとなり

柳 荒 美 談 後 編 卷 之 十 七 終

柳 荒 美 談 後 編 卷 之 十 八

河 合 又 五 郎 伏 見 旅 宿 の 事 并 馬 子 の 三 吉 敵 を 手 引 す る 事

然るに今度荒木又右衛門は櫻井を見うしなひ途方にくれて伏見へ來ると風と馬子の三吉に出合ひけるゆゑ三は扱々荒木さま久々なりとてむかしの物語りにおよび涙を流しければ又右衛門もさて汝等は今もつて當地にまかりあり候や然らば頼みたき事あり某しは河合又五郎櫻井甚左衛門といふものを尋ぬるなり但し大坂を通るべきやと伏見大坂のあひだを心懸るなりもし此伏見えかやう／＼の者來り候はゞ早々知らせくれよ是一世の頼みなりとて是はさせうながら酒代なりとて金子一兩を遣はすゆゑ馬子の三は有難き事なり私の御恩は山のごとくうけし身分なり身命をしまし御知らせ申上べしと堅くやくそくしけるが是より馬子の三は往來の人に心をつける所へ油屋嘉七の方はにぎ／＼しく見えしゆゑ馬子の三は油屋へ來り且那御客さまにて候か御用も候はゞ頼み申あげますといへば嘉七は悦び幸ひ其方に頼み度事あり御簾本様の御歴々がた五六十人の御泊りなりあすは伊賀の上野を御通りあつて伊勢まで御入との事に則案内を御頼みなされる其方は毎度往來たび／＼いたすよし伊賀越の道をくはしく存ずれば頼むなりとあれば馬子心中に悦び是は／＼あり難く候然らば私し御案内申あぐべし幸ひ馬も丈夫なり兩持にいたし申べしと相談きはまるゆゑ嘉七はやくそくして此おもむきを申いて案内の馬子をたのみ申候間百疋を遣はされ下さるべしといへば甚左衛門是は奇妙／＼明日早朝にあんないを頼むなりといふ甚左衛門兄弟は伏見まで來りてきふに伊勢へ出るといふはいかゞ大坂表の體を伏見にて内々伺ふ處に荒木又右衛門の計りごとにて流言をせしは大坂の男達どもの荒木の弟子なれば大勢を催し大坂にて討て取らんと町口にてあひまつとの風聞ゆゑ櫻井兄弟此風聞におそれ竹内屋合と評議して大

坂の男達ども申合せてあひまつ所へうろ／＼と通り懸らばゆゝしき一大事なりされば大坂より船に乗て九州へおもむきける所をやめて直に伊賀の上野を通り伊勢の津へ出て船にのり熊野の浦を船にて乗廻しそれより九州肥後人吉へゆかんといへば諸人はこそ屈竟の事なりとて俄かに伊勢參宮と號して上野通りの案内を頼むゆゑ馬子の三は扱てあやしきなり伏見より伊賀路を通るより勢州關宿より行くが順道なり然るをわざ／＼此伏見へ来て伊賀の難所を通らんとするは多分荒木さまのおん頼みの櫻井河合の人々かとおもひて其夜は大坂へ駈行んとせしが折よく山住伊兵衛の來りしに出合ふたり馬子の三は荒木様御頼みの櫻井河合とやらか御覽あそばし候へとてをしへけるゆゑ山住飛立ばかりに悦びて馬子の三に案内させ油やの内庭へ忍び入り木立の内より伺がふにまがひもなき櫻井甚左衛門なりしかば山住伊兵衛は悦ぶ事限りなく奇妙／＼と中を飛て大坂へ駈ゆくにぞ荒木渡邊にかやう／＼と注進する故又右衛門時こそ來れいざ上野の城下近邊にて本望をとげんものと主従四人伏見へきたり馬子の三に一禮しかつ汝ちは案内者なれば泊りの事まで一々相談すべしとて荒木又右衛門渡邊數馬片山武兵衛山住伊兵衛の四人は櫻井よりは少しはやく伏見を立んとす頃は寛永十一年戊戌九月十八日の早朝七ツ時のころにふしみをたつて勇みすゝんで是まで千辛萬苦せし敵河合又五郎はいよ／＼大坂の風聞におそれ伏見より引返して伊賀路へ懸り上野の城下を通るとは天のあたへとにつこと打笑ひて出しが豊後橋を渡らんと此橋へ懸る此豊後ばしをば長さ百三間餘にして幅四間は所の大橋なり其次に瀬田の流れ宇治ばしは長さ八十三間五尺幅四間はありさるにより荒木主従四人は心細くも豊後橋宇治のさとを見渡せば右に見ゆるは淀の芋あらひ牧方八幡の山をがむにも我々ども諸願成就まし／＼とおもふ敵を討すべし世にもほまれを岩清水見なせの里や玉水の高名の山をはやくこえて駒の在所もこゝとかや木津の浦々泉川いづみきとてか戀しかるらんとよまれしも此川の事なるか其いにしへをおもひやり市坂こえて春さめや名もおそろしきはんにや坂名にしあふ奈良の都のにぎはしく手塚の里をこえしかばはやくれ／＼に笠置の宿にぞ着きにけるとなり

荒木又右衛門梶原を頼む事并渡邊高久侯より拜領物の事

斯て荒木主従四人は笠置のとある茶屋へいつてやうすを伺がふうち櫻井兄弟河合又五郎とうの五六十人どろ／＼と勇み／＼て此宿へ來り泊りける此をり又右衛門工夫しける我この宿に泊るは無益なり夜通しに上野の城下へゆきて梶原源左衛門を相頼み明朝櫻井河合の上野へ懸る所を討取んと俄かに四人は笠置の宿を立出んとて道を急ぎ伊賀の上野藤堂大學頭高久侯の御城下へ着しける又右衛門は町口の茶屋を頼み渡邊數馬片山武兵衛山住伊兵衛三人を残り置き直に梶原源左衛門かたへ尋ねゆきけるが此梶原は高千二百石の大祿なりしゆゑ夜中の事なれば次へ廻り通用門より案内しけるに取次のもの大きにおどろきさう／＼に源左衛門へかくと申けるゆゑ源左衛門さつそく立出て扱々珍らしき荒木氏に候や夜中といひ只一人の御出はいかに候やとて相尋ねけるに又右衛門さればなりいづれ人拂ひにて御咄しも申度といふに源左衛門近所の人を拂ひてのち荒木申けるは兼ておん聞およびも候べし某しは舅渡邊頼負と申ものゝ仇を報ぜんと松平宮内大輔忠雄卿に相勤むる所の同家中にて河合又五郎と云者に討れて天下の御評定共あひなり候程の義ゆゑ小舅渡邊數馬の後見の爲にいてたる所に運よくも明朝敵の河合又五郎當御城下を通行仕る間なにとぞ御城下にて本望をとげたく候と申ければ源左衛門手をうつて悦びさて／＼武勇兼備の荒木氏よくこそ小舅の助太刀なされ候ぞや我らの倅が師匠といひ一方ならぬ大恩の貴殿の御頼みいさひに心得候さあらば數馬殿御門人も御同道候へどあるゆゑ夫は添けなしと主従四人を殘らず源左衛門が方へ呼寄けると直に梶原は御家老の藤堂采女殿へ申達すに此采女といふは元和元年大坂御陣に討死せし人の子にて當采女は高五千石にて内室は梶原源左衛門の娘なり但し此夫婦の腹に一人の男子出生す是を藤堂小金吾といひていたつて發明にして器量は諸人に勝れしゆゑ采女はいふにおよばず此梶原も孫の事ゆゑ秘藏なりしが采女の近臣七八人にて小金吾五歳になるを連れて山遊山に出るとこわいかに一天俄に

かきくもりどろくと大雷なり響きて其上雨は篠をつくごとくなりしかば近臣おどろき恐れて小金吾を供して歸らんとするに餘り大雨ゆゑ兎角して岩屋のがん窟へ入て雨を凌ぐ所に近邊の小笹をみりくとおしたふして牛のごとき狼一疋駈來りてにらみしかば諸士膽をひやし刀を抜いてきりはらふに惣身の毛針の如くなれば踊りあがりて一寸もきれずさしもの供方あきれはて皆々若旦那小金吾殿を捨てにげちるうちに彼おふかめ小金吾のかひなをくはへて飛ゆくゆゑ諸人あれよくと騒ぐばかりなり此時荒木又右衛門は大和の國柳生宗玄の弟子となつて専ら劍術に骨ををる時分に父荒木彦左衛門大病を申來るゆゑ古郷の荒木村へ歸りし所父は死して死後三年の内古郷に有しに鐵砲をもつて山へゆき猪鹿を討取て渡世する所に折よく又右衛門の來る所へ向ふの方より牛のごとき狼小兒をくはへて飛來るゆゑ又右衛門鐵砲にて討んとせしが彼小兒のなくを見れば未だ存命なり萬一玉が小兒に當らば不便なりとおもふゆゑ山刀を引抜てかの狼にきつて懸る所に狼もいかりをなし小兒を捨て又右衛門へ飛懸るを又右衛門かひくどりて狼と引組んでねじふせ終にさし殺すやれ嬉しやとかの小兒を見ればいたつて美童なりしかばいかなる人の子ならんかとおもふ内に采女の近臣かけ來りけるゆゑ又右衛門は近臣の人々へ只今かやうくの事なりと申ゆゑ大いに悦び立歸りて采女と梶原に申けるは今日荒木又右衛門と申人に助けられし趣きを申ければ源左衛門悦び厚く又右衛門へ禮謝におよぶといへども一向に受ず其後源左衛門江戸へいでし時荒木又右衛門劍術の指南をして大繁昌ゆゑわざく尋ね行て久々に對面してせん年孫の命を助け給ひし一禮をのべて又今度悴を御弟子となし下されと頼む源左衛門の一男梶原之丞を荒木の門人として上達す然るにこのごろは源之丞江戸屋敷にて家中へ指南するは此大恩の荒木なりしかば是によつて藤堂采女梶原源左衛門の兩人又右衛門の大恩ある人ゆゑ此度の敵討の事一々御取持申べしと直に大守大學頭高久侯へ申あげけるをりもよく大學頭殿は伊州の山中にて狩にいで給ひ伊勢の安の津より一昨日上野へいらせられ近邊の百姓をあつめて勢子人足として山々を狩立んとて弓鐵砲を用意のしきりなり然る所に采女は主人高久侯へ申あげけるは此

度江戸表にて御評定と相なり候松平宮内大輔忠雄殿の家來に渡邊靱負と申者同家中の河合又五郎といふ者に討れ候に付敵討に出候然るに又五郎は御簾本衆阿部四郎五郎殿の御内縁について天下の御簾本一同にうしろだてとなつてかくまひける所明朝當上野御城下を通行いたし候右に付渡邊靱負の悴數馬并に數馬の姉孿の荒木又右衛門と申者御城下を拜借仕り御上の御勢をかりて本望をとげべしと願ひ出候と申上れば大守大學頭殿は武勇の御大將ゆゑ荒木渡邊のねがひをことの外感じ給ひしゆゑ直ちに又右衛門數馬の兩人夜中ながら御前にめすゆゑ荒木渡邊兩人誠にあり難き事なりと御前へ采女と源左衛門同道にてまかり出る時に大學頭殿の仰せに因州の浪人渡邊數馬郡山の浪人荒木又右衛門汝ら兩人本望を達せんとて天下の御簾本をうしろだてとなしたる大敵を付わらふ志は感じてもなほ餘りあるゆゑに願ひの通り當城下にて心の儘に本望をとげ申べしとあつて又右衛門へは伯耆守安綱の刀數馬へは波の平行安の刀を下されしゆゑ兩人は嬉し涙に悦びける采女に向ひてこは勿體なき大守様の御意私どもの身分にとりていかばかりか嬉しく存じ奉り候とて平伏し誠に御城下にての敵討に候へば敵を取にがす事あるべからず最早敵討たるも同やうの心地こそ仕り候と申上ければ大學頭殿いよ御悦びあつてこれ又右衛門汝らの武勇感じ入又候引出物をとらすると一ツの書付を下さる又右衛門あり難くをしいたゞきひらき見れば明日敵討のせつ河合又五郎の人數上野御城下へ入と跡を立切て四方へ御堅めの御人數を出し給ひ一人もにげざるやうに御手配りの人數わりなり是を見て又右衛門飛立計りに悦びてこの御引出物は百萬の強みにて候と數刻の落涙におよびける

柳荒美談後編卷之十九

七里鎌倉兵衛の事并又五郎死脈うつ事

扱も伊賀の國上野藤堂大學頭高久侯の御城下にて所々町々の堅めの内第一の堅めは西海道口にて河合又五郎とて笠置の宿より城下へ入ると跡を立切る所かんやうなりとて此堅めは藤堂家にて七里鎌倉兵衛吉次といふて大力無双の侍足輕雜兵を加へて五百人を以て相ひ堅む抑々此者は生國相州鎌倉の出生にて召抱へとなりし侍武勇は一二をあらそふ足輕大將にてありしが只今申上るは此の度の堅めは私し一手にて事足り候河合又五郎櫻井甚左衛門ぐらゐの者五百人來るとも某一人にてみぢんになさんとの高慢なり七里といふは鎌倉の七里の濱より名付といふ六十一里の積りなり上總に九十九里といふ所は百里と書て九十九里となふなり百里のうち一をのぞくゆゑなり前年越前さうら三八といふ大力あり兼て七里の鎌倉兵衛を聞および力くらべをせんとてわざ／＼越前よりたづね來り始めて對面す三八は身のたけ六尺三寸たがひに力をくらべ勝し方を日本一日の下關山と定めんと申ゆる七里鎌倉兵衛は大きに悦びよくこそ御尋ねありしぞまづ茶を一ツあげんと薄茶を出しちやぐわしなりとて八寸の上へくるみをのせて出すさうら三八はよい御菓子と二本のゆびにてちやり／＼とひしいでくらふまた七里はからごとがり／＼と喰ふ夫より栗石を出し二本指にて粉になす又長さ八尺五寸廻りの鐵の棒をいだして兩人ねじりあひてふつと眞中より是は同格の力量なり越前の硫黃峠の山中にて痘瘡神をとらへてきびしくいましめ以來我名をかどぐちにはれば來るまじとのやくそくをしてはなちけるゆる越前の硫黃峠の孫じや／＼さうら三八と書てはると痘瘡神の來らずといふ斯のごとくの七里鎌倉兵衛五百人にて西海道の口をあひ堅め又五郎を逃さじとの手當なり扱またかやうの事とは夢にも知らず河合又五郎櫻井甚左

衛門同甚助屋合團四郎竹内玄丹を始め惣人數五十七人寛永十一年未九月十八日の曉に笠置の宿へ泊りける本陣は松坂屋九助とて手廣の普請なり是へ案内せしは馬子の三吉なり亭主の九助はいて迎ひにおよびいろ／＼と御馳走申上る櫻井等はもはや安心なりとさゝめき渡る然るに馬子の三は早くも此おもむきを荒木へ知らせんと見廻りける所へ片山武兵衛出て合ふまよくも御出あるものかな御頼の櫻井さま方は松坂屋へ御泊りなり私御手引を申べし同々に御覽あれと本陣のうち庭より忍ぶやうにと申すゆゑ片山はひそかに忍びて見るに相違もなき河合又五郎櫻井がた五十七人の者は本陣へ泊りし所又五郎頭痛がせう／＼せしといひける是れは昨晩伏見を早朝に出立して駕籠の内にてとろ／＼とせしゆゑ風邪ならんといひてわづかの風とはいへども大切のからだなれば腹薬あるべしとて所の醫師をよびに遣はすに村井壽庵といひて七十餘りの醫者がさつそくに來り又五郎の脈を伺がひて仰天しけるは是は御大病なり御命あやふし然し罷出し事なれば一腹はさしあげ申さんとて煎薬一貼をあたるに甚左衛門立腹して亭主をまねきて町醫師の過言不届なりとしかり付るゆゑていしゆはおどろき御詫申ける然し壽庵には近國にて醫師名高く一りとして違ひし事なし時に壽庵老殿様がたの御歴々へいかゞの事を申して御立腹なり見損じはあらずやといへば村井打わらひ我々いかなぞ人をおどし申さん全く死脈があらはれしうへは明日を過ぎじと申ける

昔し今大路道三駿州の沖津の宿を通行の時は夜に入て自分の脈を見ておどろく又家來の脈を見て又驚く死脈がうつゆゑ宿の亭主をよんで見るに死脈ゆゑさては當宿に異變あらんとおもふに今の内に立のき申べしと立ち出ければその夜つなみにて沖津の宿は悉くおし流しける是れ名醫は別段の事といへり河合又五郎が自然と脈に顯はれいづるを見るは村井壽庵の大切なりとて諸人おそれをなすくらゐなり先年若者三四人あつまり鯉をにて食せし所にいづれも大熱となつてあゝ苦しや／＼と七轉八倒してくるしみ三四人の者なんとかう苦しくてはたまらぬ脈を見やうと手を取て見るに脈が少しもなしはあ悲しやもうあがつたと少しもなきはもう／＼死ぬ／＼とわめく夫

はいぶかしとてかはるゝに脈を見るにいぶかしと残り脈がなくて心ほそくなつて泣いたす是をよく見ればとんと脈をうつなれどもあひたがひにのぼせ上りて一向にわからざるゆゑなり

又右衛門梶原藤堂平田へ恩義の事并依田佐橋の兩人大江山入りの事

扱も馬子三吉のしらせにより上野の町屋にて討んといつて荒木主従四人はいそぎゆくに御目付平田三之丞といふは深切のものなり尤荒木には恩義あり又右衛門は梶原源左衛門藤堂采女平田三之丞の三人ばかりはわけて恩をきせおく事なり但し平田は先年荒木に助けられし仔細は伊賀の上野詰のせつ若侍ひ一同あつまり種々の物語りに一人の申す世の中に一番恐しきものはなにならんといへば平田のいふには一番おそろしきものは主人なり仔細は思召に叶はざる時は切腹をも仰せ付らるゝとも御暇になるとも主人の勝手になるものなれば主人が一番に恐ろしきといふに又一人の申はいやゝ恐ろしきものは火事なりひとたび災難にあへば忽ち手と身ばかりとなつていかんともせんすべなしといへば又一人の申は御尤なりといへども地震もこはい強き時は家作はいふに及ばず山もくづれて大地もさける一番恐ろしいものなりといへば又一人すゝみいでていはく親父もこはいまいど眼のいづるほどしかられる世にいふ通りに地震雷火事風親父是らがこはいものなりといふ其外にも水もこはい毒もこはい悪人はまた剛しと打わらふに又一人の申は我々つくゞ考へ見るに妖怪ほど恐ろしいものはなし妖怪をなす家は多分狐狸のたぐひならんか是ほどこはいきものはなしかさま妖家は人をたぶらかし民の災ひをなすにくき物なり今日本にいづくにか妖家があるべきやといへば平田三之丞のいはく某しが下男は丹波の國の者なり常々に咄しをきく大江山といふはむかし酒吞童子の住し所にして山深く谷深くして深林おひしげり人の行ざるところにて是日本一の妖怪の居る所ならんといふゆゑ依田半平佐橋一角はこはおもしろしゝわれらは有馬へ入湯を願ひ出し置たれば幸ひ丹波の界なる大江山へゆきて見届んといへば三之丞

堅く止めて申けるは某し發言せし大江山へ行て萬々一妖怪の爲に一命を捨ては貴公方の御一門へ對して氣の報なりといへば依田半平佐橋一角は藤堂家にて武藝も勝れし我慢の侍ゆゑに平田の異見を用ひず是非のゆかんといひて強じやうをはる其内入湯願ひも相濟けるゆゑ兩人は大江山の妖怪をせんさくせんと供をも通ず只二人道を急ぎ丹波の山家とゆふ所に來たりて宿を取りて泊り夜に入て亭主佐助に向ひ我々は藤堂家の藩中なり當國に妖家が是れあると何方なりや太儀ながら案内をして給はれといへば亭主佐助はへえゝ妖家と申は當所にてはたしかに見えませんが、あ養家と申はあの養子にまゐりました先の家の事にてござりますかと答へけるゆゑ半平一角は打わらひは汝らは極邊土の者なり養子にゆきし家はきくに及ばず妖家とは人間の事にてはなしと佐助はあさやうゝそれまでおもひ出しました當夏いかいこと田畑へ付て困りましたいやゝさう申はえうかではござらぬうんかと申虫が八日はたしか人間ではないとおほせたから薬師さまの事か八日ゝで十六日わたしの裏には多くをります藪蚊の事ではござらぬかといへば兩人是ていしゆ汝は愚鈍なり妖家とは狐狸などが妖怪をなす事なりといへば亭主はへえゝさやうでござりますならなぞ早く妖怪と仰せ候へばよろしうござりますのに此丹波の國大江山と申は化物のすにて候といへばさればゝ其化物が入用なり居る所へゆきたし案内を頼むなりといへば亭主こたへて大江山の中段に谷合の所に石橋がござる此橋まで御案内申上べきが夫より先はおそろしくてまゐられませんかといふさあらば石橋までも案内せよといひて依田佐橋の兩人は案内者を先に立てぞ難山さして行懸る道もなき野原へいでて又は谷合へおり苔なめらかにして岩石をばたし樹木森々として物すくいかにも妖怪の住家と見え恐ろしき場所なりしが谷をゆき又ある時は岩角に取付て山へ登り岸を通り山坂を登りくだりて難行苦行してゆく程に山と山とのあひだに岩角出て向ふへ渡る所に石橋ありしたは少しの流れありて深き谷合なりしが其時案内の者申けるはおよそ此石橋まではなにごとも是なきが先へはゆき難しと申傳へければ御案内申上げる是迄なり向ふへ渡ると一ツの原ありそれより木出生繁りし内に妖怪の化物が多くをると申傳

へしゆゑに御免下さるべしといひて逃さりけるが大膽不敵の一角半平につことわらひておもしろしくいざ化物の住家を見届け退治せんというくとして彼石橋をわたると廣々たる野原ありなさま廣き原なりとて向ふへ無體につまきりゆけば森々たる木立松栢枝をならし風さつと樹木にへうくくと鳴渡るは物すさまじく相見えたり去ながら大膽不敵の兩人なればことゝもせず八方へ眼をくばり伺がふ所にざわくと木立小笹の中よりいて来る者あり一角半平それ化物がと刀の柄に手をかけて相待所に身の丈五尺七八寸にして木綿の半天わらんち股引にて鐵砲をかつぎ山刀を帯して左のたり手に白き猿を引さげて来るを見てこはふしぎなり人の來らざる山中へ狩人と見えけるよとてよりく見ればこはいかに彼狩人は勢州安の津二の丸の番頭増山正平といへる歴々なり是によつて一角半平の兩人はきもをつぶしにかに貴殿は増山正平殿にて候やと尋ねければ増山打わらひさん候貴様かたは依田半平佐橋一角どの何ゆゑ此所へは來り候や某しは御存の通り一人の娘久々大病にていろく醫師良薬を盡すといへども全快なくある人の申には白猿を打取このきもを用ゆる時は全快すると申ゆゑ娘を助けんと父子の恩愛にひかされて大江山へわけ入て難山をやうく御覽の通り白猿を打て立歸る所なり貴殿方はいらざる男達して此の山へいる事無用なり昔より申傳への通りに種々の怪ありて早々立ち歸り候へといへば依田半平佐橋一角あざわらひ我々兩人は大江山の妖怪を見届んと有馬入湯と申立てわざく來り候へば此所より歸るべき法やある是非く行んと申けるを増山正平は無用くと止めける袖をふりきつて兩人は行んとしけるをなほもやらじとあらそひしが兩人は立腹していろくといひつりければ増山正平せんかたなく勝手にせよとゆきすぎけるとなり

柳 荒 美 談 後 編 卷 之 十 九 終

柳 荒 美 談 後 編 卷 之 二 十

一角半平大江山にて妖怪に逢ふ事并兩人穴へ落て即死の事

此時安の津二の丸の番頭増山正平申けるは此兩人某しを誰とかおもひ候やといへば依田半平佐橋一角兩人申けるは貴殿は二の丸の番頭増山正平殿ならんとふり返り正平を見るとこはふしぎなり段々身の丈大きくなる事およそ一丈ばかりなり兩人は仰天してこはいかに増山どのくとよぶ内に忽ち一丈餘りの大男となりて髪をさつとふり亂し眼は百連の鏡の朱をそゞぎしがごとく耳の下まで口はさけ眞白き齒をむきいだしはつたとにらみし其ありさま身の毛もぞつとするばかりなり其内に鐵砲に討れし白猿むくくとおきあがりて目を見ひらき口中より火焰を吹出しける事の大そうなり依田佐橋も恐ろしき事とおもひしが藤堂家名代の侍ゆゑ夫こそ化物が番頭増山正平にばけたるぞのがすなと左右より抜討にはつしとつとふしぎや増山のからだを二ツにきりはなしけれどもさらたふれずして口中よりしきりに火焰を吹出す白猿も左の通り誠に兩人の總身火氣にてあつき事たえ難く然りと云ども平田三之丞の咄して見届んと是まで來りしものこのくらゐの化物に恐るべきやと兩人は東西に飛ちがひ南北にあひ働らく所へなまぐさき毒風さつと吹來る其風身にしみること言語にのべがたししもの兩人毒風にあたりて大地へどうとたふれ正氣をうばはれしと見えて夢見し心地にてありけるが見れば化物は一向に見えず是はふしぎなりとてうろくせしが總身つかれ一町も歩行ならず死になんくとする此時勢州より伊賀の上野城内にて物語りせし平田三之丞は佐橋依田の兩人入湯願ひと號して大江山へゆきしを傳へきく扱こそ不便なり多分妖怪の爲に一命を捨る事は必定なり助けずんば發言せし侍の本意にあらずとおもふゆゑ其身只一人にて丹波の大江山へ案内を頼みてわけいり是も石橋よりは只一人にて長

大小を横たへくわうくたる野原へいで八方へ廻りて尋ねければとある木立のもとに半平一角まつさをになりてうろくして居けるゆゑ平田悦びてあれこそ半平一角なりとかけ來りいかに各々がた是に居り給ふや某は貴殿を助けんと勢州よりはるくの所を來るなり一念届きて出合しは神佛の加護なりと悦びければ一角半平腹を立おのれ又化物め平田にばけたりと其手はくはなのはまぐりと勢州もの、口ぐせに刀をもつて切て懸る故平田おどろきやればやまらな化物ではない誠の平田三之丞なりとなほ断りをいひても一途に妖怪なりとおもひいや、いつはりはいふな先刻は増山正平にばけ今又平田にばけたるは憎きやつなりときつて懸るゆゑ平田是非なく刀を抜て兩人をむね打にたき伏せ顔を見せん我は誠の平田なりよく見よといへば兩人はじめて心付て扱々一圖に化物と心得しは眞平御免下さるべしなに、もいたせかやうの山中にうか／＼として一命をうしなはんこそ主人へ對して不忠なりいざ來れよとてよわりきつたる兩人を連てもとの石橋のかたへ出んとせしに向道もしれずして困りきる所に向ふより年のころ十、一二ぐらゐの小僧が草籠をかつぎて鎌をもつてきたるゆゑ是は能所へ草薙小僧は々時に我々は小案内にて道をうしなひこまりきつて居るどうぞさとへ歸るべき道ををしへよといふに小僧は一向口をきかずしていきすぎんとするを平田三之丞こらへかねておのれは禮儀をしらざる不届もの侍が言葉懸るに一言の答へもせざるは何事ぞや今は是までと小僧のえり髪かい握み引倒さんとするにこはふしぎなり磐石のごとくにして少しも動かさず扱は化物ならんと一刀をぬいてやう／＼十一二の小僧をさつと切付るにばつたりとおとして岩石へきり付しごとくにて壺すもきれず依田佐橋平田の三人は口をしき化物と扱つれ／＼三方よりきり付るにびくりともせず小僧はやがて毛だらけの手をのぼして三人の刀をむんずと握るにぞ腰もよわりてひよろつくゆゑやうやく取て切付るに少しもきれずこは無念なりとて刀をひけとも／＼一寸も引ず今は三人あきれはてて刀を捨てまた三方より引組けるのをり小僧の顔がむく／＼と大きくなること大そうにて四斗樽のごとくなりさしもの三人途方にくれ忙然たるを化物は大口をひらきてつゝと火焰を吹かけ

る其勢ひのはげしくていきのくさき事たへがたく毒氣にあたりあつと計りにそり返りて暫らくいきはたえたりしがやや有て平田は正氣づき依田佐橋をつれて歸らんとするに臘月夜のごとくにてもう／＼として道もしれずたゞうろく／＼とする内に見渡しのできざる廣野なり是はとびつくりするとどつさりおとし穴へ落し穴へ落しいるにぞ半平一角は是までのつかれかた／＼にて穴へ落入ると其儘息はたえたりける平田一人正氣になつて穴より上へはひあがらんとするにず／＼とすべりてあがりかねたるゆゑよべどもさけべど一向に聞えざるゆゑ三之丞も天を仰て歎息しあゝら口をしや我々は藤堂家にて五百石を領して關ヶ原合戦にも出し平田造酒助の一男にして斯る山中へいつて妖怪の爲めに一命を失ふはよく／＼武運に盡はてたりと八幡宮へ一心にねんじ何卒此所の難を凌がせ給へといのりける

荒木平田三之丞を助る事并上野城下口々固めの事

此時荒木又右衛門は所々へ武者修行して丹波の國山家といふ所へ泊りけるが其夜に亭主佐助の申せしは此間藤堂様の御家中大江山へ入て今もつて御歸りなきは化物の爲に迷ひ給ふや又は喰れしやあゝ是非もなき事なりと咄しけるゆゑ又右衛門是をきいてそれは不便の事かな其姓名は何とか申と尋ねければ則ち佐助申けるはさん候たしかに依田半平佐橋一角平田三之丞と申して三人のよしうけ給はるといふに又右衛門その平田氏とは兼て藤堂家にてきよおよびし侍なりあゝ不便の事なり我らは今より大江山へいつて助け得せんと云に亭主佐助は頭をふりて御無用／＼むかしより人のゆかざる山中へいり給ひしゆゑに今以て御歸りのなきは定めて一命のきはならんあなたも御身あやふからんといふに又右衛門打笑ひそれは人にこそ寄るべしとて焔燧を用意して道すがら火にて燒立々々深入すげに火といふものは大の陽物にして災ひをのぞく物なり化物といふものは陰火をば用ゆるといへども正火にはおそる物なり爰においてかの正火を用ひて山深くいつて見れば一ツの穴の内にて人聲のあるはふしぎなりと又右衛門うへより伺かひ見て

平田をひきあげ助くるは大功なり此時三之丞は全く荒木のかけにて一命を助かりける事なりしゆゑに是より別して交り深くせし所に此度はわけて骨折力とあひなりけるは是舊恩のあるゆゑなりさても荒木又右衛門吉村は十王堂にて御目付の平田へ對面して昔しの物語りをなし主君より仰せ付られて城のつまりくをきびしく明け七ツ半時よりあひ固め候様にと仰せいだされしよしを平田物語りせしゆゑ又右衛門の悦び大方ならず誠に御恩のほどはわすれ申さず某し一命をさし出すうへはあへて相手は何十人うちかさなるともそれにおそれ申さずといへども取逃さん事のみを案じけるに町口々々を厳しく御固め出されける事の有難さにもはや敵討たるの心地こそ任るなり但し夜明けて戦かひにのぞんではせつなのひまさへ有べからず今のうち平田氏固めの御人數は誰々に候やくはしく御聞せ給はれと申ければ三之丞もげにもつともの事なりとさらば語りてきかせ申さんまづ一番に本町口四方辻を取きつて相固めしはいにしへ關ヶ原合戦に上方武勇といはれし隨一たる島左近友之の一男新吉郎友吉と戦ひ死し藤堂玄蕃吉重とて四十三歳にて名を天下にかゞやかす其子藤堂帶刀は十六歳にて其場を去らず父の敵島新吉郎友吉を討取しかば藤堂佐渡守高虎侯御悦び有て父の通り玄蕃と名をくだされしが時に十六歳ゆゑ人よんで十六玄蕃といふ其玄蕃今年四十九歳にて本町口のかための大將を仰せ付られ其身は南蠻鐵のくさり帷子うへには飛立ばかりの飛龍のついたる萌黃の陣羽織白綾のしころ鉢巻をしめて金にて輪の内に桔梗のついたる纏をたて床机に腰をかけて金の日の丸の軍扇をとつて八方をにらみしは實に關ヶ原より大坂兩陣へ出し屈竟の侍大將組下郎等を箕の手にならべて控へしは暗がましくぞ見えにける又本町口の續き相町といふ所に控へしは桑名彌次兵衛と名付て長曾我部の舊臣にて代々武功の名家なりゆゑあつて藤堂家へ奉仕する大坂陣に討死したる彌次兵衛の一男にて今年二十三歳の若盛り緋羅紗の陣羽織に銀の九曜の星のまとひを立て床机にこしをかけ穂先一尺三寸に八尺柄の犬身の鎧をかたへに引付てすはといはゞ河合の一類を芋さしにせんと勇氣をふくみ惣人數二百人を引率して堅固にかためける又小田喜峰は西海道の口なれば河合櫻井の從兵多く此口へに

げんかと七里鎌倉兵衛吉次その身は小具足に金の千羽鳥の名たる所賣羅紗陣羽織に赤白のだんだらすぢ狸と緋のばれんの付たる馬印しを立て三尺八寸の刀二尺五寸の長脇差を十文字に横たへ此口へにげ來る奴原はこぶしをもつて打ひしがんと眼をひらきて四方を見廻し今やくとあひ待けるかたはらには鎌倉兵衛の秘藏たる八尺五寸の黒鐵の棒を持せ屈竟の侍足輕共五百人を三段に組ならべて相待ける石川町といふが藤堂式部の持場にて銀の七枚芭蕉の馬印し是は福島左衛門正則の移しなりと是をおし立亂髪に上へ白き前鉢巻組下郎等三百人を率して入口を取切てぞ固めけるは勇々しき事どもなり

柳荒美談後編卷之二十一

上野城下警固役人出立の事并渡邊荒木主従出立の事

然るに大手の堅めは第一番の大切なれば御矢倉にて大守大學頭殿敵討の勝負を御覽あるべしとの義に付て藤堂新七金の七曜に猩々緋の吹貫の付たる馬印を立その身は小具足のうへに花色羅紗に金のさしへり金の七曜の付たる陣羽織を着し組下郎等合して五百人うち二百人は足輕にていちやうの朱丸くちぬり陣笠六尺棒を銘々に持て大手の橋前をづらりと棒をくみ合せて押ゆ同じく橋づめの所に藤堂仁右衛門赤地に黒くだんくすちの大吹ぬきをたて騎馬の兵五十騎歩行の侍百二十人いづれも鎗太刀を横たへてひかへける是はもし河合櫻井のめんく逆上して無體に大手のうちへ切入らんも計りがたし其節は取て押へ生捕申べしもし手に餘らばきつて捨んの用意なりまた伏見ぐちといふは河合櫻井の者ども入來る口なれば堅めの人數はいださずして閻魔堂の右に隠れをり遠見雁番をいだして何がはせける河合櫻井の同勢は残らず町へ入たると見聞けばひたくと押出し跡をべつたりと取切り一人も出すまじとの堅めに藤堂采女へ此所を仰付られ采女は内縁も是ある事故ひとしほ勇氣百倍しせうん緋に千鳥の付たる陣羽織にて白練のうしろはち巻をしめ紺地に大四半を金をもつて死生命ありと書たる馬印をたてたり先年松平周防守殿の御先祖松平右近といふ御方は數度の合戦に武功をあらはし差物に地水火風空と記すといふ又松平勘四郎信一侯の差物は運は天にありと朱をもつてかいたるを用ゆ然れば色々の品々ありと見えて藤堂采女は死生命有とかいたる馬印のもとに床机に腰をかけて屈竟の從兵五百人ちやんと跡を立切る又二の丸の大手は藤堂將監三百人袋町は藤堂勘解由の手勢二百人然るに町奉行加納藤右衛門其身黒羅紗に金を以て五三の桐の紋付たる陣羽織にて組下歩行のもの二百人を隨がへ月毛の黒鞍

置たる馬に打乗て町中をのり廻し非當をいましめ町家の者にさわがざるやう下知を傳へ浦々つまりく河合櫻井の者ども入ざるやうに申付ける御目付平田三之丞は柿いろの陣羽織板金入の頭巾くさり帷子純子のふん込青の大馬にしる鞍置てゆらりとうち乗徒歩目付下目付横目付などを引連く所々の堅めの人數行義作法を見届のため乗り立て乗り立て下知を傳へける役目なりすべて城中城外町ぐちとも都合八ヶ所弓鐵砲をうしろにもたせ前へは足輕六尺棒をあじろに組て相堅めたりされば河合又五郎つばさありて空を飛ばいざしらず中々一人ものがる事なかるべからず此敵討は偏に藤堂家の御蔭にてうち取といふ事なり今以て伊賀の國残らず伊勢の津の城とも兩城の太守三拾七萬六千九百五十石なり此内五萬三千石を分知する事なりさて荒木渡邊山住片山の四人は梶原源左衛門の情にて早朝に用意して人顔の見えざる時分おとぎ峠を下りて見れば十王堂ありこの閻魔大王は雲溪の作にて堂も至つて古く舊跡なり是にて用意せんとて兼て持參の衣類を包みより取出し荒木は葛の紋付し黒羽二重の小袖下には兵庫ぐさりの着込を着しかてんどんすの野袴に不動國行の二尺七寸の刀此度藤堂高久侯より拜領せし伯耆安綱の二尺一寸の刀を十文字によこたへ亂ばつに白綾の鉢巻をしつかとメ一貫子忠綱のきたえたる五寸の手裏劍七本鉢巻のあひだにさしつゝ立上りしはあつばれ天下無双の英雄荒木小天狗と呼れしも斷りなり又右衛門今年卅四歳なり渡邊數馬は三ツ一文字の付し黒羽二重の小袖下には南蠻鐵にてきたえたるくさり帷子花色純子の野袴に貞宗の二尺三寸の刀に長光のさし添縁の黒髪をさつとふり亂し白布にてうしろ鉢巻をなし手甲の内には兵庫ぐさりの小手をさし白きたすきを懸て行年十八歳玉をあざむく美壯年顔色快然と勇は百萬の大敵も恐れぬはいにしへの木村長門守重成にもひとしき數馬のありさまなり片山武兵衛山住伊兵衛の兩人は木綿のわた入に紺の股引いづれも下にはくさり帷子を着しまへ鉢巻いちく用意をととのへて十王堂に腰をかけ暫し見合せ居たりける

渡邊荒木等主從四人敵河合又五郎櫻井等を待つ事

斯くて荒木又右衛門渡邊數馬の主從四人は、いまだ夜もあけざれば敵の來るも少しはまも有べし其内幸ひ向ふに杉の葉門口につるしてあれば正しく酒屋の印ならんと是へ入りて酒をのんで咽をうるほさんものと堂よりおり立ちて酒屋の戸をどん／＼とた／＼に酒屋の亭主は餘りに早朝にきみわるく思ひどなた／＼といふにぞ又右衛門いつはりて某しは梶原源左衛門の家來なり早く戸を明け給へといふに亭主も梶原様と申に少しは安心して是はおはやい御出なに御用なりと表の戸をあけると四人は悦びどろ／＼と内へいるゆゑ亭主は驚く事大方ならず四人の形相はちまきにて大の男が太刀を横たへ物すごく見えし體なるゆゑあなおそろしやと震ふを四人はこりや／＼ていしゆなにもこはい事はないぞ我々は酒がのみたひはやくさけを出されよといふに亭主は眞青になつて是れは叶はぬ多分おし込みおどろのたくひならん大變々々／＼とまご／＼なしはい酒は／＼居酒はきつい御法度どうぞ御免あれ早々ほかへゆいて給はれとぶるぶるふるふて申ければ四人はなに居酒は法度だ居酒がならずば立酒にしようはやういませといふに亭主いよいよぎやうてんしあい／＼私方では酒の小賣は致しませんみな／＼樽うりゆゑ早ういんでくだされといふんだ小賣はせぬそんなら樽でかほうたるで出せといふに酒屋のていしゆはうろ／＼して叶はぬけさはまのわるい夢かしらん盜賊おし込の爲に樽で損をしようとぶつ／＼／＼とごとをいひながら／＼と樽でいだすみな／＼悦びたるを見れば千秋とかきつけあり是は大の吉事そのめや／＼と茶わんにて四人の者ひきうけ／＼のむこりやから酒だからなんぞ肴をいませいませはい／＼肴はなにもなし爰に鹽いわしがござるとさし出すに又右衛門悦び手裏劍にていわしの胴中をつきとほし是數馬數馬斯のごとくおもふ敵をいもざしにせんといへば數馬につことわらひ扱も／＼心地よしとかのいわしをひきとり首をちぎりて大地へなげいざ本望をとげたりとみぢんにふみこはす是を見て酒屋のていしゆはあつけにとられこはこ

わけしからぬ此人々はいわしの首をきりて本望とげしなどは、亂心ものかなに／＼もせよ物すごき人々とあきれはてかたへにぶる／＼として控へしが又右衛門數馬に向ひむかふに竹藪ありよき竹のしげりしぞや早々腕だめしをいたせと數馬心得たりと向ふのかたへ馳せ行くよと見えしが拔よりはやく一尺廻りの大竹をさつくと二ツに切割てあ／＼心地よし／＼おのれ今に此ごとくきつて捨んとつゝ立あがりしを亭主なほ／＼ふるひ何れにも此人々は本心にては有べからずと裏口よりにげんとせしを荒木はこゑかけいかにていしゆにげる事無用なりそれ酒代を遣はずと小判三枚をなげ出すゆゑに是は／＼三兩とは大そうなり差引勘定仕らんといふに荒木はいや／＼苦しからず残らず酒代に取らすといふ所にはるか向ふよりもしやん／＼と乗掛馬にうち乗て河合又五郎櫻井甚左衛門等が見えしかば荒木渡邊のうれしさ限りなくそれきたとかけいだす扱も櫻井兄弟河合又五郎とうは十八日の夜は笠置の宿にとまり十九日のあさ七ツ時分に宿を立て一刻も早く勢州へいでそれより船に打乗て紀州熊野の浦をとほりておしまはし九州肥後の人吉相良遠江どの、御城下へゆかんとていづれも勇み進んで笠置より一里半來ると大河原といふ所へいで又候一里半行て島河原といふ所へいで此所にて夜はほの／＼と明にける夫より一里計も來ると直に伊賀の上野の御城下なり然る時は笠置より上野まで四里なり夜の七ツに立つて道を急ぐゆゑに十九日の六ツ半時分に上野の町口へ乗付たり一番先は櫻井甚左衛門黒羽二重の小袖黒ちりめんの羽織もえぎ純子の野袴にてのり掛に乘て朱鞘の長大小を横たへかね／＼心得の十文字鎗を馬の脇に引付て持せ若黨小もの上下十一人左右をはなれずさんざめかして乘來る二番に弟櫻井甚助も黒ちりめんの羽織を着てどんすの野袴乗り掛馬に用意の半弓鳩の霜ふりの羽をもつてはいだるとかり矢十八本を腰につけ鎗持若黨小者合せて上下九人其つぎは河合又五郎是は御簾本衆より仰付られ長棒の乗物なり中には鳥毛の打拂ひ銀こしらへの多葉粉ぼん正宗の刀を駕籠の内にかへ鎗も駕籠わきへ引付て持せ鷹の羽のついたる黒ちりめんの小袖に萌黄むくの袖を下に着し紺どんすの野袴にてい／＼然として乘來るに駕籠の左右には江戸表にて劍術の上達せし若侍

をえらみしもの十人左りには武藤小平太石川傳藏村上五兵衛あし川瀬平神道多市右は高野伴藏柳島藤助矢島郷藏間淵藤十郎川瀬久馬五人づ、十人左右に添しかば中々より付事叶はず是よりはるか下りて星合團四郎これも乗掛にて鎗持若黨ども上下十人あと押へとして竹内鬼支丹是も乗掛にて上下七人なりすべて河合方侍中間合せて五十七人の内刀を帶せしもの三十七人五段に分れて乘來る八幡の社の前へ來りいづれも馬乘にて伏拜み南無八幡宮首尾よく伊勢路より船中滞りなく九州へ着船仕る中風波の難なく殊に荒木又右衛門と申こはものに知られざるやうに守らせ給へとふしをかみけるといへども神は非禮を受させ給はず只今町口に荒木主從四人相待事は神ならぬ身なれば夢にも知ず打詠めあゝ日の出のけしき一しほ絶景なりと勇み立て乘來るつゞいて跡より同勢列を正して押來るはいかさまよしある御方の道中か又は倍臣にても大家の重役三四千石の往來とは見えにける疵もたぬ身ならば一世のはれとも思はれける

柳荒美談後編卷之二十一終

柳荒美談後編卷之二十二

荒木吉村櫻井兄弟を討つ事并櫻井の若黨中間寸忠の事

此時十王堂の前なる酒屋の内より荒木又右衛門渡邊數馬并山住伊兵衛片山武兵衛の四人は飛んで出て第一番に荒木又右衛門吉村大音あげいかに、松平宮内大輔忠雄卿の家臣渡邊靱負を討て立退たる河合又五郎をうち取んが爲に此所に相待事久し櫻井甚左衛門其方も敵の一門につらなりといひ殊に本多家に勤仕の折からこの又右衛門と眞劍の勝負をいたし度とかけながら悪口に及び今日こそは日本無双の又右衛門眞劍の働らきを見せ申さん幸ひなるかな十王堂閻魔大王の大帳に付候へいざ來れかしと云より早く右の手に不動國行の二尺七寸の刀左りの手に伯耆守安綱の二尺一寸の刀を右と左に拔はなしばらくとかけ出すに宮本武藏正明は兩刀の名人十の字の構へと申此又右衛門も兩刀の名人もろこしにては蜀の支德なり唐と日本に只三人の名人なり扱山住伊兵衛村直行年二拾七歳渡邊數馬則安十八歳片山武兵衛村重二十九歳三人一同に拔つれ、さつと駈いだす荒木又右衛門吉村は渡邊數馬に向ひあれ、三番目の駕籠こそ敵の河合又五郎なりのがすな早く、數馬のそばを離れるな山住伊兵衛片山武兵衛油斷するなと下知すれば心得候とかけ出す渡邊數馬大音をあげ珍らしや河合又五郎其方の父河合又左衛門は我らの父祖に大恩をうけながら其恩をわすれ父靱負を討て立のひたる人非人の大惡人たとへ日本はおるか唐天竺南蠻四夷島々までのがるとも退すべきや今は天命のつくる所なり立あがりて勝負せよとおもてもふらず二尺五寸の刀をずばと引拔て韋駄天のごとく三番目の駕籠を目あてに駈來る是にはなれじと片山山住拔つれ、こゑに荒木又右衛門の大恩うけし我々日頃の手練柳生流の手なみを見よと左右に付添はら、と駈出す眞先に櫻井甚左衛門乗掛に打乗り月の輪十文字の二間一尺の鎗を小荷駄

のかたはらに持せうか／＼と乗來る跡勢は是を夢にも知らざるはもつともなり然るに又右衛門飛鳥のごとくかけ來るを見てびつくり仰天してこは／＼いかに夢か／＼いや／＼夢ではない荒木なり又右衛門なりとはつと思ひしが所詮天命の盡る所か是非もなしと小荷駄の馬上にて鎗よ／＼と呼はりければ鎗持の半介二間一尺の十文字の鎗の鞘をかなかり捨てさし出す甚左衛門得たりと其鎗を取てひらりととび下んとするを荒木又右衛門きつと見て櫻井は鎗を取て打合すると負はせずとも餘ほど手間どつてはいかゞと工夫をなしてさつと駈來りけるを甚左衛門は鎗を杖となして下んとするを又右衛門まゐつたどはらりと横にはらへば櫻井の左りの片股をさづくりときつて落すゆゑ甚左衛門かばと落てうごく事叶はず目ばかりひか／＼として居たりける又右衛門は血祭りよしと心の内に悦び櫻井を切すてんと思ひしがいや／＼こゝが勘辨なりとおもひ直し是甚左衛門日頃又右衛門の眞劍の太刀すぢ御望みのとほりに思ひのまゝに此所にて見給へとて其まゝ捨て置き二番目の乗掛櫻井甚助のかたへわい／＼と駈出す其時甚助は懸ることゝはさらに知らず馬のうへにて四方の氣色を打眺めあゝよい氣色なり稍ゑのみみぢ紅葉は一しほ興にいりて來りしが昨夜ろく／＼寢ざりし故心地よくこくり／＼と居ねむりながら來る所へ櫻井甚左衛門は若黨中間わい／＼と駈來り狼藉ものが出ました／＼荒木とやら唐木とやらそれきましたおそろしや／＼とわめくゆゑ櫻井甚助此騒ぎに目をさましたんだ唐木だそれは渡り木の事か荒木といふはけづらぬ木の事ならんこの木がいかゞいたしたいえ／＼材木の事ではござりません敵討なり旦那櫻井さまが首尾よく狼藉をきつたと思ふたがきつたてはなくきれいにきられましたと思をきつていふ故に甚助は仰天して夫は大變なりと向ふを見れば荒木又右衛門血刀を引さげ來るゆゑこわゆゑしき一大事と馬より飛び下りんとするに火急なれば間に合はず直に小荷駄に付たる半弓に鶯の羽を持てはいだるかぶら矢をつがひへうときつて放すに其矢つんと飛來るを又右衛門右の手にてさつと中天へきり上る甚助は弓の名人ゆゑ二の矢續いて放しけるに其矢は又右衛門の左りに持たる刀にてさつくと地上へきり落す其内三の矢はや飛來るを荒木の早業三の矢はかいく

ぐつて跡へうけながし甚助へはつしと切付る其太刀早き事かげろふのごとくさすがの甚助矢をつがへるまもなく今は詮方盡て刀引き抜き小荷駄馬よりとびおりんとする所を又右衛門うんと一聲さけび鐵壁も通れと打こむ一刀櫻井甚助の右の腰よりあけにまでさつくりと切付るゆゑに馬よりしたへ眞逆さま落る所を二の太刀にて甚助の眞向より横筋かへに兩端に斬伏たり然るに今時の小者の若黨とは違ひ其頃の人氣は中々一寸もにげる者なく主人の敵なりとて櫻井兄弟の若黨中間小者まで抜つれ／＼十二三人荒木をぐる／＼と追とりかこみのがすなもらすなと鐵湯のごとく取りまいたり其時荒木は獅子の怒りをなしおのれ推參なり又右衛門の手なみをしらすやと右と左へ兩刀をもつてうちふり／＼爰に引かけかしこにさゝへ飛違へはねあがり弓手へだらり馬手へさつくと切かへす其はやく事前かと思へば忽然としてうしろにあり右かと思へば左りに討いかさま其働らきはさらに目にさへきらずと何分にも當りがたく向ふものは眞向き／＼うて腰ぐるま竹割胸切大げさに切放しばらりずんどきつて落すなにさま勢ひ烈風のごとくさしもの大勢其太刀風におそれ左右にきりふせられ又はにげちり／＼はもつともなりそが下郎のことなればばら／＼と相成りけり

甚左衛門が鎗持戦死の事 井山住片山勇戦の事

爰に櫻井甚左衛門の鎗持の半介は下郎にはめづらしく旦那の討れしを見て情なや旦那は鎗の鞘をはづしたる計り一打も合せざるの無念さよと月の輪十文字の二間一尺の鎗をりう／＼としごき荒木へうつて懸かるゆゑ又右衛門驚きこわふしぎなり汝ぢは鎗持の下郎なりかた脇へ引込てをれ命計りは助けんいらざるうて立無用／＼年寄のひや水を呑と病人のむりに大食をすると同様なりとしかり付れば鎗持半介眼をきむ出しおのれいかなれば人を悔り候や主人より御扶持を戴く所は上下のへだてあるべからず鎗持なればとて主人の討れしを見て逃しりぞく法やあるそこ引なと十文字鎗にてさつとくりいだす荒木はほとんど感心しななぢはけなげの振廻なり命を助けんと思へどもせんかたなし今は主

人とともに冥途へ供をいたせとくり出す鎗を右の刀をもつてちやうとうけ留左りの刀にてはばらりと半介の右より左りのあばらをきり返すにあはれむべし其儘いきはたえにける

世にたとへのごとく鎗持鎗を遣はず辨當持先へくはせず醫者の不養生彌宜神主の不信心酒屋の亭主生酔とならずとたとへのごとくに鎗持の半介は終に切りころされたり

扱も渡邊數馬は三番目の駕籠を目當に父の敵おぼえたるかときつてかゝれば駕籠脇にひかへし武藤小源太こわ大事の時こそきたれりと二尺八寸の刀をぬくよりはやく渡邊數馬の眞向より切付るを數馬はつねく父靱負の指南といひ荒木の流義を深く學びし達人なれば心得たりと身をかはし武藤小源太えいや聲と諸ともに左りの脇腹のあたりを切込たりしかばさしもの小源太も急所の痛手ゆゑ其所へ倒れたり然るに又かたはらにひかへし石川傳藏手早く刀引拔て數馬の右について横合より馳懸る此時數馬のかたはらに控へし片山武兵衛得たりと飛び入り傳藏とかつきくと二打三たち合すると見えしが石川の切込む所を弓手へはづし馬手より付入てさつと小げさに切りすゑたり其時續いて駕籠わきの侍ひ村上兵五郎かけ來り數馬の左りより付入て山住伊兵衛のかたを引受て丁々はつしと討合すると見えしが山住片山の兩人は荒木の門人にして無双のものなれば受つ流しつする内にすきを伺ひ一聲さけぶと村上五兵衛を只一刀に切て落す同じく續いて上野伴藏はせ懸るを片山武兵衛是に有と丁々はつしとやゝ暫らく切結ぶと見えし武兵衛の打込一刀を高野伴藏受そんじ眞向よりすぢかへに切下られ右の二のうてまで切割たり是によつて駕籠脇の侍または若黨中間あつとときをあげて一面に白刃をたづさへ四方より切て懸るを山住伊兵衛片山武兵衛の兩人は飛鳥のごとく弓手馬手に引受々々かつきくと打合ふ音は稻妻のごとく血鹽飛ちり泣さけぶ恐ろしくいかなる修羅の苦しみも是には過じと思はれる此戦ひのうち河合又五郎は扱は天運のつきる所ならんと駕籠の中よりひらりと踊りいて自から二間半の素鎗を引下げ其の身は黒羽二重の小袖紺純子の野袴にて紫きのちりめん腰帶をはづしてたすきとなし正宗の二尺五寸

を帯しつゝ立あがりしは萬夫ふたうの勇士なり渡邊數馬は是を見ると一文字に駈來り父のかたき勝負くと血刀打振かけ向ふに河合又五郎はにつこと打笑ひ一別以來珍らしや渡邊數馬其方の父靱負をば武士の意氣地にて止事を得ず討取しは相違なし今は天運の盡る所なり心よく立合申さんさあ來れと大島流の十六角にしごきし二間半の鎗をひらりとしごき打て懸るを渡邊數馬の眼中には血をうかべおのれ又五郎日頃の恩義をわすれ父の靱負を討て立さりし人非人恨みの双受けとれと突こむをば又五郎心得たりと鎗と太刀かつきくと打合す所へ柳島武助といへるは水野十郎左衛門より附られたる神刀流の達人なり大音あげて河合どのには早く西國海道へおちゆき給へ此敵は引受申べしと數馬の横合より切て入る同じく間瀬藤十郎も又五郎に打向ひはやゝ西國海道へ落給へ大切の御身のうへなり御簾本業より格別のおぼし召をもつて我々をつけ給へるは偏に君を助けん爲なりとむりに又五郎を進むるにぞ又五郎は實に此うへはひかれんだけは引取んと鎗を引さげ西國海道へかけ出すを見て數馬は口をしやゝ大事の敵をにがしては生てかひなき此身なりと追かけんとするに柳島藤助神刀流の手なみを見よと切込を數馬は無念なりと柳島と渡り合二打三うち合すると見えしが一聲さけびて飛違ひさまに横にはらふと柳島の胴腹をばさぶりと二ツに切はなす其内に若黨中間八方より取巻くをはるかに荒木又右衛門是を見て南無三寶と血に染し刀を打ふりゝかけ來り渡邊數馬あれを見よ向ふに引取るは正しく河合又五郎なりいづれまでも追駈てうち取れ外の敵に目をかけるなはやくといふまゝに數馬も心得候とて左右の敵をさつと一方打破りて河合のあとをおつかけてこそ行すぎし其働きげに勇ましくこそ見えたりけるもつとも數馬も一心こつたる仇敵なれども大敵ゆゑ餘ほど危き事なりしが荒木にはげまされ勇氣一しほいやまして終に本望とげしとなり

柳荒美談後編卷之二十三

片山山住討死の事并上野城下町々用心の事

斯て渡邊數馬は怒りにたへずきたなき又五郎なり懸る大勢にて恐れにげるは末代までの恥ならずや汝は松平忠雄卿の内にて名高き河合の末孫ならずや返せ〜と呼はれば又五郎もげに今は引取るまじと二間半の鎧を取直しくり出す稻妻のごとくなれども數馬は一心にこつたる父の仇なれば一寸もひかじとわたりおふ然る所に又五郎が駕籠脇のめん又は若黨二三十人一統に八方より追來る山住伊兵衛片山武兵衛の兩人かけ隔りて通さず又荒木は飛遠へし爰に打おほせかしこに切りたふしけるが河合又五郎は西國海道へ引取んとせしに七里鎌倉兵衛五百人をしたるがへ弓鐵砲を以ており敷て備へ先に足輕百人計り六尺棒を組合せて備へけるゆゑ河合又五郎是におそれ止事を得ずして渡邊數馬は只今かつき〜と打合する事のはげしく數馬常々荒木の申付を心にとめて計り事を廻らしわざと人なきかたへ又五郎をおびき出すの計ごとにと戰ひては走り且戰ふ孫子の謀計にてありけるが又五郎はおのれの勇氣にまかせ小うでの數馬を突伏んと追立て々々突懸るを數馬の工夫に河合の鎧は實に妙を得たる達人ゆゑ手せまの場所へ引入て太刀打の勝負をなし討んとしたる簡なりしが又五郎は此所に心付ず次第々々に數馬を追立て々々はるか隔りたる袋町といふ寺の門前へひきゆきける又片山武兵衛は此大勢を數馬のかたへやるまじと駈廻り〜相働らく所へ間淵藤十郎うしろより駈來り片山の七九のあたりを五六寸さつくりと切付るゆゑ血の流るゝ事瀧のごとく武兵衛はふり返りおのれといひざま間淵藤十郎を左りより右へ大げさにきり倒す其所へ跡勢の星合團四郎はせ來りて三尺五寸の九尺柄大身の鎧を打ふり〜飛鳥の有様なり此團四郎は鎧の隨一の達人なりしが只今片山が間淵藤十郎を大げさにきり落すを團四郎是に

ありと眞向より肩へかけて横筋かへに切落すさしもの武兵衛うんと大地へひれ伏たり然るに竹内鬼玄丹もおふ太刀を引抜かけ來り團四郎と目と目を見合せ扱こそゆゝしき大變なりいかゞすべしといふに玄丹のいはく我つく〜やうすを伺がふに河合又五郎と數馬と戰かひ西のかたへ戰ひながらゆきあへり多分は又五郎數馬を討つはひつぢやうなり此上は荒木をにしの方へやり立ざるの工夫こそかんじんなり何さま荒木の働らき人間とは見えざるといへば鬼玄丹おほせの通り某しは荒木を見ると身の毛もよだちて恐ろしく思ふなりといふ増田久左衛門といふもの種が鳥の名人ゆゑ其方は向ふの木戸の内に控へたる荒木の來る所をうちとり申べしといひ付る又あら川瀬平は手裏劍の上手ゆゑ是も袋町の方へゆきよき場所を見て荒木の來る所を手裏劍にて討べしといふに兩人心得たりと用意して相待ける扱此時に竹内鬼玄丹太刀を引抜いていかゞして荒木を討んと八方を伺がふ所へ山住伊兵衛爰へ駈來り相働らくゆゑおのれ冥途へゆけと打懸る玄丹は身のたけ六尺二寸いがぐりのごとき大入道力あくまでつよくいかさまに天狗厄神の荒たるごとく山住に渡り合ふ伊兵衛は是まで敵を討事六人惣身に淺手深手七ヶ所を蒙り一面に血鹽とあひなりしが勇氣は少しもたゆまず竹内と兩人くらひを取りてえひ〜聲を出ししのぎを削り戰かふ所に山住伊兵衛いらつて打込一刀に竹内のむないたへきたる名譽の玄丹どつこいと顔をうしろへひく所を伊兵衛の打たる刀をば玄丹の股を五六寸堅にざつくと切付るといへども玄丹事ともせず三尺八寸の太刀をもろ手討に鐵壁も通れと討ければあはれむべし山住伊兵衛の肩間よりあごのしたまで切付られて相果ける然るに荒木又右衛門は若黨小者または鎧持などを相手としてはつし〜と左右へきりすてなきすて落火みぢんに切通す世に荒木小天狗とあだ名をとりし又右衛門めんてい血けふりにて眞赤と相成り名のり懸け〜東西に乗込南北へ馳廻りあたるを幸ひ横堅十文字にきり通す事およそ二十二人然れどもつかるゝ氣しきさらになく勢ひふんぜんとして古へのあんじん張飛の猛勇も是には及ぶまじと見えたり何さまにも軍のごとく爰に切伏せかしこに首を落され血は流れて大地を染め恐ろしきありさまなり爰に藤堂大學頭高久侯は大手まへの御矢

倉の上より此働らきを御覽あるに眼下に見おろし天晴の荒木なりと小踊してお悦びある御矢倉下には足輕五百人六尺棒をくんで黒塗りに朱丸の陣笠の升の内にこくもちを付たるを一統の目印にして着し股引わらんちをはきすわといふ時は打ひしがんと待懸ける次に徒士二百人下には着込をつけ白きうしろ鉢巻にて得道具をもつてひかへ箕の手に居ながら堅めける其外石川口西國口袋町本町口小田喜峠の下所々城内外十八ヶ所を鐵湯のごとくに取まきしゆ河合方は町奉行加納藤右衛門の組子百人を引つれて一人も洩すまじと乘廻り下知を傳へて町々表の戸を厳しくめて一人も表へ出る者なし屋敷々々の間は御目付衆平田三之丞石田三郎右衛門徒目付下目付を引連て乘廻り下知を傳ふゆゑに物の見事にして偏に軍のごとくなり

梶原源左衛門恩義を謝する事并又右衛門鬼玄丹を討つ事

然るに荒木又右衛門は諸人の知る所ゆゑ大音あげて荒木又右衛門吉村是にあり來れ〜と名乗かけ〜と相働らく河合方は又右衛門を討んとて神道多市村上五兵衛矢島江藏川瀬久馬をはじめとして彼又右衛門をおつとりまきけるが流石の荒木鏝元まで血鹽にそみたる兩刀をもつて中天へ飛上りあるひはくどりて其早きことかげろふのごとく稻妻のごとく前にあるかと思へば忽然として尻へにあり右かと思れば左りに顯はれ虚々實々萬字巴のごとく馳廻り弓手馬手にさつく〜と兩端に切捨る事鬼神のごとく此折城中より梶原源左衛門くさり帷子の上に萌黃羅紗金にて矢筈の付たる陣羽織を着し白髪のうちへに白鉢巻して五寸の河原毛馬に朱の鞍を置出雲くつわに紫ぞめわけの手綱かひくり右の手に十文字鎗を引さげ一角踏込んで乗出せば御目付の石田三郎左衛門きもをひやしやれまたれよ今日の敵討は天下の御評定となりし大切の戦ひなり然るをいらざる場所へ乗り込てそこつ千萬なりとおし留めるを梶原打笑ひ其目付衆とどめ給ふな某しは仔細あつて荒木又右衛門には厚き恩義あり悴源之丞の師匠といひかた〜見すて難し後見の爲に罷

出候此儀御止め候は〜某し腹切て申譯せんと申捨て乗出す此梶原源左衛門の跡目今以て藤原家に連綿として是有といふ扱是より梶原源左衛門は馬を飛してひた〜と荒木又右衛門のうしろへ來りて大音あげ荒木殿今日の御働らき日本無双なり誰か是に及ぶべきや但しうしろには源左衛門がひかへ候間跡に心遣ひなく十分に働らき給へ悴源之丞の厚恩某しの孫の命を御助けくだされし御恩の旁寸志の御禮と申けるゆゑ荒木悦びけるされば大勢の敵方源左衛門が馬の上にて十文字の鎗をりう〜と打ふり〜とそれ見ろ〜と聲をかける源左衛門の働らきは百萬のつよみなり此梶原といふは八幡太郎義家公の勇臣鎌倉の權五郎景政の後胤なりといひ傳へ頼朝公の時代關平氏の梶原平三景時の末なり今日は萌黃羅紗に金にて矢筈の紋を付られたるは梶原源左衛門景重なり此紋所は頼朝公治承四年八月廿三日石橋山合戦に大敗軍にて杉山の奥に大木の伏たる所へ木の葉しげり下には穴のやうに相成て是有る所へかくれ給ふ大場三郎股野の五郎大軍にて此伏木の上に來りて申やうは此穴は是あやしきなりとて穴へ入らんと側によれば梶原平三進み出で某し見届んといひて其穴へ入るに頼朝卿わづか七騎にて穴の内へかくれ給ふゆゑ梶原と目と目を見合せ持たる矢を二本ほくりと折て誓ひを替し助けける此時は頼朝公三十五歳の御時なり此後御運をひらき給ひ梶原が是までの定紋は三ツ大なりしを吉例なりとて矢筈を定紋となし給ふ扱も又右衛門は八方へ相働らきける此折から神道多市は荒木に眞向みぢんと切付るを荒木は得たりと左りに持し伯耆安綱の貳尺壹寸の長脇ざしを持って丁と受るとこはいかに貳尺一寸の刀は鏝元よりほつきと二ツにをれたり神道多市はしめたも打込を又右衛門右にもつたる國行の刀にて横なぐりにせしかば多市の腰のつがひより兩端となす續いて右より村上五兵衛左りよりは矢島郷藏一度にまいつたとき懸る又右衛門心得たりと三尺許りあとへ引ながら村上を右より左りへかけてざつくりと大げさにきり付る矢島郷藏此すきに鐵壁も通れとをどり込を又右衛門其手にてはいかぬと中をはらへば郷藏の首はころりと地上へ落たり此をり竹内支丹今こそ天命の然らしむる所なりとて眼をむき出し荒木なればとて鬼神にはよもあらじと三尺八寸

の刀をざつくと切て懸るを荒木はちよつと見て又おのれ悪業つきざるや先年日向の國佛たけ山にて教訓しその後
 又候大坂にて出會しよく／＼異見をくはへしに今又此所へ來りしは天命しらず佛の顔も三度なれば腹をたつといふ
 に憎ひやつとにらみ付れば玄丹は打笑ひいかさま御もつともなり去ながら命は義の爲にする我久しく阿部家の扶助
 をうけし上は右の御恩を報ぜんと貴殿とさし違んとて二打三打ち合ふ所に荒木の打こむ一刀が玄丹の肩先五寸計り
 切付るとふしぎや玄丹は大地へかばと伏してうん／＼とうなる聲はつりがねのごとくなれども荒木は其儘切伏て向ふ
 へかけ抜ければ玄丹こゑをかけていかに荒木殿なさけなき事なり某し深手にて存命も叶ひがたし此儘苦痛をさせるは
 恨みなり早くとゞめをさして給はれといへば又右衛門ふり返り大音あぐ汝は憎きやつなり其方は此又右衛門を計ら
 んとするも天眼を得たる又右衛門先年佐々木眼龍が宮本武藏と立合しをりわざときりふせられたる風情をなしうか
 うかと止めをさふんと近くそばへ來るを起あがり討んとす汝は左の通りいつはりて某しを討んの工夫なりしや比興
 なりみれんなりいざ立上りて勝負あれとはつたとにらみければ鬼玄丹ちゑひ口をしや我が計事を知りたるや今は百年
 目なりとつゝ立あがり又右衛門と兩人暫らく受つ流しつ戦かふ所へ玄丹の若黨一人はせ來り又右衛門のうしろより飛
 懸る二尺三寸の刀をもつてつかもをれよと脇腹のあてを見て突立る既に又右衛門の危き所を梶原源左衛門十文字の
 鎌鎧にてはたりと若黨の刀をはらひのける是によつて又右衛門心付あやふき事なり跡へ二間ほどさつとしさり彼若黨
 を二ツにきり返す其時玄丹此處に付入荒木を上段よりひりとわりつけるに又右衛門おのれ人非人再び命を助けし其恩
 をわすれしやと踊入て玄丹の右のかひなをきり落すゆゑに玄丹が刀も腕も地上へ打落され今は叶はずとにげ出すをう
 しろより背すぢの通りをまつすぐに龜の尾までざつくりと切割たりしかば玄丹はあゝ口をしやとく脈を立わられいか
 でか助かるべきや是こそとく脈にあらず損脈なりと一聲さけびて死したりける

柳荒美談後編卷之二十三終

柳荒美談後編卷之二十四

梶原渡邊へ詞の助太刀の事并又右衛門増田星合を討つ事

扱も荒木又右衛門吉村は梶原へ向ひて今日御言葉をかけ下され有がたくこそ候へ此上は數馬の身の上いかゞ案事ら
 れ候間だ仰ぎ願はくは數馬を尋ねて御見續くださるべし某しも跡より駈付んと申ければ源左衛門承知／＼と八方へ乗
 廻し／＼渡邊數馬を尋ねしに一向に知れずこは一大事としの方へ乗付しに數馬と河合と鎗と太刀を合する所へ乗付
 て聲をかけ力と相成りさて荒木又右衛門はたゞちに數十人を殺害し今は手むかう者も見えざれば數馬はいづれへ行し
 やと見廻すにぞ大道の眞中に馬子一人しやんとすわりて眼をひからせ所々を見て居るゆゑ又右衛門もほとんど感心し
 懸るはげしき戦ひに逃もせずして眺め居るはあつばれなりと又右衛門聲をかけ汝は下郎にはめづらしき心さま剛のも
 のなりはやく逃ろ／＼命は助けんといふに彼馬士答へてわしはにげたくて／＼なりませんが腰がぬけてうごかれませ
 んといふゆゑ又右衛門も尤の事なりとわらひを催して向ふへかけ行かんとせしに町の用所がある所に何か戸がうご
 くやうなりしかば又右衛門ふしんに思ひ立止りて見る此内には相良の案内町人今日の仕合せにふるひ恐れてあゝおそ
 ろしや／＼と逃まよひしが町の口々残らず藤堂家の堅めにて出べき所もなく誠にこまり切て用所の中へ入ていきを込
 む居たるががた／＼ふるうゆゑ戸が鳴わたるもうよいかしらん靜かになると戸口よりつゝと首をいだしゆゑ又右衛門
 はさて此内にもかくれしは河合の送りの者ならんとて町人とは知らず駈來り彼町人こわ叶はぬと戸をめて居ると又右
 衛門は戸の外よりざつくりと突けば彼町人左りの脇腹をづぶ／＼と突ぬかれあつといひて糞だめの中へどつさりと落
 入り下ごへと討死するといふは此町人の事なりさて又右衛門是より數馬のゆきし方はいづれとかけ出すに木戸のこな

たより増田久左衛門五匁の種ヶ島をもつて荒木の来るを相待ける是を又右衛門きつと見て扱は飛道具なるやと驚きしが鬼神のごとき一面に血鹽に相成て矢より早く駈來り増田久左衛門餘りに荒木の駈來る面相の恐ろしく是こそ手元へ引つけて一打に討取らんといま火ぶたをきらんかとする其内にはや荒木は三尺二寸の太刀を上段に構へ飛來り横すぢかへに打おろすと種ヶ島の筒先にあたる筒先二寸ばかりはすに切落すひやうしに火はさみ落てどんと玉は空天へ飛上るゆゑ増田久左衛門これは人間にはあらじと刀を抜んとするを又右衛門二の太刀にて増田の眞向より陰莖まで切割たりとぞ

此働らきあつばれ鐵砲の筒をきりしとは虚談のやうなれども永祿四年信州川中島の合戦に上杉謙信小豆長光の名刀にて小幡の討んとする鐵砲の筒先をきり落したりといふ小石川飛坂の堀内某しが方に此刀今にこれあるといふ

さすれば切ぬともいひがたし切れるものと見えしなり

爰にまたあじ川瀬平は手裏劍の上手にてあなたこなたを見廻す所に紺屋の竹のものがりの是あるゆゑ是をさら／＼と登り伺がふ所へ又右衛門飛鳥のごとく此もがりの下を駈通る所をあじ川瀬平上よりさつと七寸の手裏劍をうちおろすといへども又右衛門は忠孝の二字を頭にいたゞく高運にや右の小鬘をかすりて飛來るに又右衛門びつくりして早く左りへよけしゆゑ手裏劍ははるかうしろへ飛行て大地へのぶかにたつたりける其時又右衛門不審して此手裏劍は横よりうつにあらざいづれよりたつたるならんと上を見れば竹のものがりの上に登り居るものあるゆゑおのれ憎きやつともがりの元へゆく所をまたも瀬平が手裏劍はつしと打をば又右衛門心得たりと身をかはし受流して自から鬘の毛の内に用意せし手裏けん長さ五寸の劍を高さ所へはつしと打に瀬平は見て居ながら身をかはす事も叶はず荒木の打たる手裏けんが眉間へずんとたつゆゑにあじ川瀬平あつといひて竹のものがりより眞逆さまに落たりしかば又右衛門は踊り入て只一刀にきつて捨たりされば又右衛門／＼とさけびて死したり是より今は手向ふ者もなしといつさんに駈行所へ木戸のか

げに控へ居し星合團四郎といへる一刀流の達人自身の鎧をもつてさつとくり出すを又右衛門大の眼を見ひらきておのれは送りの侍か覺えよと丁々はつし／＼と暫し打あふに星合は隨一の達人なれば荒木と入違ひ飛あがり右を討んとすれば左りへかはし前を突ぼうしろへひきて頭を討んとすればかひくゞり裾をはらひし時は飛あがりいづれも無双の達人なり木戸ぎはのせり合なりしが星合いらつてくり出す鎧をば又右衛門左りへ引はづすといかゞしけん大身の鎧が木戸の柱へ突込ゆゑこわ叶はぬと團四郎手早く腰の刀を抜て切て懸り荒木と兩人互ひにこんずを流して相働らく所を團四郎はさつとはらへば又右衛門右のふと股五寸計りきり付る此時に又右衛門はじめて手を負しは只今なり然れども大丈夫の又右衛門手早く用意の手裏劍をさつと打ば的をはずさず團四郎の目と鼻のあひだへ打たりしかばさしもの星合だち／＼と只一打に漂よふ所を又右衛門ふみこんで小げさにばらりとときり捨ける渡邊數馬は袋町にて又五郎と戦ひ最中なるが又右衛門數馬の行衛を尋ねんと數馬よ／＼と呼はり／＼尋ぬるに左右の屋根の上に武家町人一同に見物して口々にあれ／＼袋町の門前なり西へゆき給へしと大勢口々に呼はりけれども一向に耳へも入らず北のかたへ行んとかけ出けるゆゑ屋根にては皆々氣をもみて居たりしとなり

渡邊數馬父の敵又五郎を討つ事并切捨の者ども止めをさす事

然るに荒木又右衛門吉村は數馬の行衛をたづねんと北のかたへ行しかば老人屋根の上にて土をとつて又右衛門へ打つけければ荒木の小鬘へあたりけるゆゑあふのきて見れば彼老人指をさして西のかたへ行給へ袋町の門前なりとをしへあり難しと一禮して又とつて返し袋町の方へ走り行此時に河合又五郎は大島流の十六角二間半の鎧をもつて戦かふ數馬は貳尺五寸の刀にて上段下段と戦かひながら段々と引入れ／＼袋町の脇は道いたつてせまく小溝などは有る所へ來る然るに數馬は五六ヶ所鎧にて突かれ血だらけなり跡にて梶原源左衛門馬にておさへ鎧をもつてそれ下をはらへ上

をうてと助言をなす折々は十文字の鎗にて又五郎の顔先へひらめかす此をり荒木はいきをきつてやれうれしやと數馬の側まで駈來りこゑをかけいかに數馬よ荒木又右衛門が駈來りたりもはや送りの備は一人も残らず某しが討取たり今は當の敵河合又五郎一人也心づよく討取れと助言をなす助太刀するは安けれ共父靱負殿へ對して孝道立まじと思ふあひだ其方一人にて討留よあれ／＼鎗下へ付込と下知するゆゑ數馬は此詞にはげまされて強みとなり勢ひこんで戦ひける河合又五郎は南無三味方は悉く討れしやと力を落す事大かたならずことに河合は段々と手を盡し戦かひしが狭き小路へ二間半の鎗が突あたるゆゑ詮方なく鎗をなげすて正宗の刀を引ぬき相戦ふにぞ今は數馬大いに悦び刀と刀と丁々はつしと渡り合ふ然るにいかゞしたりけん數馬は貳尺計りの溝へ足をふみ込あふのけさまにたふれければ又五郎得たりときりこむ一刀に數馬の運やつよかりけんかたはらにある竹を貳本はすに切るあまり刀のきつ先が數馬の腰にあたり五寸計りきり付られしが父の仇と一心にこりし數馬の一念もつたる刀にて横にはらひ河合のもろ腰二本ともばらりと切るにさしもの又五郎大地へどうと伏す其時數馬おきあがりながみ打にむな先をきりわつたり荒木も此時勇の敵と一太刀きつて恨みを報ず數馬は悦び直さま首を切落し懷中より半紙を出し其上に首をのせ父尊靈の戒名を出して拜禮をなす其時御目付衆來りて各々申されけるは扱々見事の御働きなりさぞ／＼御本望に候はんと有りければ又右衛門涙を流し御蔭を以て本望を達し候なり此上のおんねがひには私討捨候者の残らず止めをさし申度候と相願ひければ御目付衆もつともなりとて御免を蒙り是より元の場所へ立歸りて切捨たる者一々改ため見るに事きれざるもあり中にはびく／＼として居るも有しゆゑ一々咽へぐさ／＼と突立て段々と來るに一番はじめにきり落せし櫻井甚左衛門片もより切落されて總身の血残らずいでしゆゑ目ばかりひか／＼として居けるゆゑ又右衛門近くより怒りて申けるはいかに櫻井殿平日又右衛門をそねみて眞劍の勝負をしたきのよしきゝ及ぶ今日某しの手なみを御覽あらんいかゞにて候といへども甚左衛門今は口をきく事あたはず目計りうごきふる／＼と震るへる計りなり又右衛門もさぞ／＼見苦しき體なりと不便によつてはやく八大地獄へゆき給へと止をさし是より數馬又右衛門の兩人は残らず見廻りけるに山住伊兵衛片山武兵衛の兩人の討死を深くなげきて夫より又右衛門は數馬に向ひ是迄千辛萬苦せし敵の首尾よく討取うへは名乗り申べしといふ數馬は實にもとて大音あげて因州鳥取の城主松平相摸守源光仲の家臣渡邊數馬良峯の則安父の敵河合又五郎を討とり候かくれをり候又五郎隨身の者はいであへ／＼と大音に呼はりける是より武家町人どもあつばれ／＼渡邊數馬荒木又右衛門殿とほめる聲近隣へなりひゞきこだまに通る計りなり斷りなるや屋根のうへにては見物の諸人幾千人といふ數をしらす只とう／＼と地響のごとくなりや半時計りもやまざりける扱今日又右衛門の手に討取もの貳拾七人山住片山の討取し者兩人にて十三人數馬の手に三人合せて死人四十三人に及ぶ誠に珍らしき敵討なりとて近國近在にひゞき渡り夥しき事どもなり

柳荒美談後編 卷之二十五

高久侯渡邊荒木を抱んとする事并藤堂因州兩家御届の事

扱も勢州の大守藤堂大學頭高久侯より荒木又右衛門渡邊數馬の兩人へ手當仰せ付られける又山住片山の兩人は不便なりとて藤堂家より上野の御城下淨土寺へ葬り今もつて石塔是有事なり程なく町奉行加納藤左衛門の前へ兩人を呼出して相尋ねられるは則荒木又右衛門兩手をつき私共儀は因州鳥取の城主松平相摸守内にて渡邊靱負と申者なりしが同家中に河合又五郎に右靱負儀討れ天下の御評定とも相成候依て私共兩人仇を報せん爲めに所々を相尋ね候所に當城下において本望を達し候段有難く存じ奉り候然しながら御城下をさわがせ數人を殺害仕事止むことを得ず恐入奉り候此上はいかやうとも其國法を相守り申べきあいだ此段宜しく願ひ奉ると申上ければ加納藤左衛門是を承り神妙なる御事ども感じ入り候此上は速かに主人大學頭へ申達し候あひだ先々休息あるべしとて湯漬などを給はりもてなしける此段御家老中へ相達し大守へ申上ければ則大學頭殿にも殊の外御悦び有て先々兩人は家老藤堂支番同役同じく式部の兩家へ御預け申渡すと仰せ出されけるゆゑ兩家より人數を出して又右衛門と數馬を引取ける其後大學頭殿兩人へ御對面あつて此度當城下にて本望を達し候うへは此世に思ひ残す事あるべからず是によつて高千石づつ兩人へ下され召抱へ申べしと有ければ又右衛門數馬兩人は有難く存じ奉り候得ども何卒因州に是有所の渡邊靱負の墓所へ佛參も仕りたく候に付歸國いたしたき願ひを出しける然るに大守大學頭殿何分ゆるされずして是非くめし抱んとあつて因州鳥取へ使者として野崎茂右衛門平田三之丞を遣はし給ふ口上のおもむきには此度その御地の浪人渡邊數馬并本多大内記殿浪人荒木又右衛門の兩人亡父の敵をうち領分にて本望をとげ候に付大學頭義兩人ともに召抱へ申べしと存じ候に付一

たん浪人いたし候者に候得ども念の爲め御知らせ申し候といひ入れければ松平相摸守殿きもをつぶし給ひこは心得ざる藤堂家の使者なり直ぐに數馬又右衛門の兩人は此方へ引取るべしと有て高須善兵衛福井源太夫に騎馬五十騎足輕雑兵ども三百人を差添へて迎ひとして伊賀の上野へ遣はしけるゆゑ兩人は藤堂采女の方へ行き松平相摸守家來渡邊數馬荒木又右衛門義は此方へ御渡しくだされ候へと申し入れば大學頭殿怒り給ひいやく夫は相成らず其仔細は松平相摸守殿家來にあらず浪人者をめし抱へるになんぞ相摸守の差圖を受くべきや弓矢八幡相渡す事まかりならずと申されければ高須善兵衛福井源太夫今は詮方なくはうくの體にて立歸り此段を申し上げれば相摸守殿なほ御怒りあつて此上は伊州上野へおし寄て是非く請取んいなといはゞ一戦に大學頭を討取んと御怒りつよく是あり然るに老臣伯州米子の城主二萬石荒尾但馬はたつて御諫言申上此儀御老中まで申上るにしかじと申に付又々福井源太夫を以て御老中まで願ひいでける口上にいはく

今度拙者家來渡邊數馬荒木又右衛門義伊賀の國上野において父の仇河合又五郎を討て本望を達し候に付早速本國へ引取申べきの所に藤堂大學頭義理不盡に留置候て相渡さず元來公儀にも御存じのわけにて亡父宮内大輔末期まで申置候へば相渡し候様御下知願ひ奉り候左も御座なく候はゞ大學頭と相對に及ぶべく候哉此段兼て伺ひ奉り候以上

寛永十一年十二月

松平相摸守家來

福井源太夫

右のごとく認めて差出しければ御老中方も是は大變なりこれ一通りに濟べからずとなり此風聞について藤堂大學頭殿此上は萬一相摸守と合戦に及ぶとも渠等兩人は渡すまじ然る時は公儀へ恐れありてはいかゞなり御届け申べしと急に江戸表へ使者として堀傳助原田利兵衛の兩人を以て口上にて申上ける

松平相摸守元家來浪人渡邊數馬本多大内記元家來浪人荒木又右衛門伊賀の國上野において首尾よく父の敵を討留候に付大學頭領分の事にも候へば扶持いたすべくと存候所に相摸守より請取に越し候彼家は一旦浪人いたし候者の儀は公儀にも御存じの譯に御座候間此上はあひ構へあるべからざる儀と存じ候に付少しも大學頭不調法に是れなくと存じ奉候此段申達置候以上

寛永十二年正月十八日

藤堂大學頭家來

堀 傳 助
原 田 利 兵 衛

右のごとく認めて御用番へ差出しければ公儀にも實に御心配有ていよく大亂の基のなりとて御心遣ひ大方ならず藤堂家へ出入の御先手衆よりいろ／＼と取あつかひ是れ有るといへども中々以て承知なく今にも因州より大軍をもつて伊州上野へおし寄るといふ評判有けるゆゑ藤堂家にも武門の意氣地なりとて弓矢入幡へかけて渡すまじと人馬の訓練して相待けるゆゑ近國の大小名より此段を江戸表へ注進なす依て御老中諸役人御三家方にも毎日／＼の御登城ありて御寄合にて評議まぢ／＼なりしとかや此節兩家には何角手配りの用意内々是有となり

因州荒尾但馬智計の事并渡邊荒木高祿になり落着の事

此時伯州米子の城主二萬石荒尾但馬は智仁勇兼備の人にてありけるゆゑ江戸表へまかりいて此事ををんびんに治めんと翌寛永十二年正月下旬江戸御老中御用番松平伊豆守殿御役宅へまかりいて申上度儀御座候と申入れれば則伊豆守殿さつそく但馬へ御對面遊ばされければ但馬申上るやうは私主人相摸守と藤堂大學頭殿と相争の事はわづか少事より起るといへども事大變に及ばん事も計り難し何卒此上の御願ひには數馬又右衛門の兩人は公儀より大坂御城代へ御預

け仰付られくだされ候やうに相願ひ申上左候得ば私共御城代より兩人を受取候て歸國仕りたく候と申上ければ伊豆守殿何さまにも是はもつともなりとて御評議有に各々此義屈竟なりとて公儀より大坂御城代へ預けよとの御下知是あるにおいては大學頭いなと申べからずとて早速藤堂家へ御奉書にて此度伊賀の上野にて仇討候渡邊荒木兩人儀は公儀にも思召はあるにつき大坂御城代阿部備中守へ御預け申べきとの御差圖なり藤堂大學頭殿にも是には大きにこまり給ひ是は多分預けと申て相摸守へ引渡すの計り事ならんとおもひ藤堂より據なくかしこまり奉ると御請に及び則藤堂支蕃藤堂采女に人數一千人にて渡邊數馬荒木又右衛門を警固して大坂御城代へ引渡しける其節に兩人申置しは大學頭義武門の意氣地にて渡邊數馬荒木又右衛門を召抱んと存じ候得とも公儀の御下知によつて據なく貴殿へ御預け申なり然し此者兩人は松平相摸守殿へ御渡し是有においては大學頭一身相立ず候あひだ左様思召もし御渡しに相成候はゞ三十萬石を差上候ても松平相摸守殿領内へ亂入いたし取返し申候此段急度御斷置申候なりと口上をのべけるゆゑ阿部備中守殿にもぎやうてんし給ひ廿四時の早打にて此段江戸表へ申上ける故松平伊豆守殿又々因州荒尾但馬をめして仰せられけるは藤堂大學頭かくのごとくの體にては中々一通りにあるべからずいかゞすべしと仰せあれば但馬は恐れながら私まかり越て大學頭殿を計り候て受取申たしと申上ければ伊豆守殿にも御承知あつて左あらば汝まかりこしよく／＼掛合受取申べしと仰せ渡されけるゆゑ荒尾但馬は道をいそぎ藤堂采女の方へ申込むおもむきは某しは松平相摸守家臣荒尾但馬と申者にて候が何卒太守様への御目通りを願ひ申なりといひ入れければ則大學頭殿にも荒尾は萬石以上の老臣ことに米子の城主なり大學頭殿早速對面におよび給ふ所に四方山の御咄し濟て後に荒尾但馬は藤堂支蕃同式部に向ひ此度御城下にて荒木又右衛門渡邊數馬亡父の敵を討候段はひとへに當太守様の御仁恵と申す事は世間一統の評判私においてもいか計り有難く存じ奉り候兼々各々方御存の通り私ども主人の家は池田三左衛門輝政卒去のち三家にわかれ候得ば家來も夫々に相分れて仕へ候ゆる／＼武勇の士も是なくやう／＼侍のまねを仕るは私計に

て甚だもつて無人に候萬一に軍立とも申さば武勇勝れし者はなく公儀へ對し不忠かと日夜是をうれひ申すなり當御家は天下に名を得し仁右衛門玄蕃式部新士采女其外主殿監物將監彌五右衛門勘解由内記主膳桑名彌次兵衛佐伯權之助福井惣右衛門等は關ヶ原大坂兩度の御陣に高名し以來武勇の備へあまた是あり然れば渡邊數馬荒木又右衛門ごときの者はいくらも御座候べし是によつて私方へ此兩人はくだしおかれ候やうに願ひ奉ると理非をわけてねがひければ大學頭殿も笑ひを含み給ひ何さまにも荒尾の申通り此方には勝れし侍あまた是あれば數馬又右衛門なくて叶はぬには候はず然し武門の意地ゆゑ是非〳〵召抱へんと申なりと仰せあれば但馬は頭をさげて御意のおもむき恐入奉る只今申上る通り相摸守儀は三家にわかれし事ゆゑ士是なくあひだまげて此兩人はくだしおかれ候へせめては荒木渡邊の兩人にても侍がましく差置申度候と申上ければ大學頭殿にも然らば但馬の申分ももつともなりとて此上は其方の心にまかせんと仰せありけるゆゑ早速藤堂家より大坂御城代へ御斷かへしに及ぶゆゑに荒尾但馬は安心して大坂へまかりいで御城代阿部備中守殿より兩人を受取て立出んとする所へ本多大内記殿より又右衛門事は元此方の家來なり首尾よく仇討の後見相濟候上は受取申べしと申來るゆゑ荒尾但馬工夫をなし委細承知いたし候然し又右衛門事は舅の仇にも是れ有あひだひとまづ因州へ同道して渡邊鞆負の墓所へ手向いたさせしかうして後に御渡し申べしと返答して兩人は是より荒尾と因州へ歸國し諸事滞なく相濟てのちに渡邊數馬則安へは舊地合せて三千石を給はり荒木又右衛門吉村へは新知二千石を給はりて兩家目出度さかへます〳〵忠勤をはげみしなり子孫今に相續して當時は荒木又之進と號して代々柳生一流の一家として諸人敬まひけるとなり又本多家へは使者をもつて又右衛門儀は病死のよしを申遣はしことすみける古來稀なる仇討なりとぞ

柳荒美談後編卷之二十五終

敵討高田馬場

敵討高田馬場總目錄

- 松平左京大夫殿責馬の事并牧野新五右衛門不覺の事
- 牧野鹽瀨長谷寺前刃傷の事并園田安兵衛當座仇討の事
- 松平左京大夫殿取捌の事并園田安兵衛賞祿辭退の事
- 將軍家御具足開御儀式の事并遠山三郎四郎不受不施の事
- 遠山三郎四郎遠島の事并寺田與右衛門横死の事
- 寺田藤十郎が讐を尋る事并林平治右衛門臆病の事
- 堀部彌兵衛由緒の事并淺野家笠間入城の事
- 堀部彌次郎蛇蝮退治の事并彌治郎立身の事
- 堀部彌次郎酒井家にて無骨の事并淺野采女正殿廉智の事
- 堀部彌次郎誠忠の事并酒井殿思慮相違の事
- 黒田權左衛門不行跡の事并堀部彌太郎異見の事
- 黒田權左衛門悪心増長の事并堀部彌太郎横死の事
- 堀部彌兵衛老練勇氣の事并黒田權左衛門最期の事
- 堀部彌兵衛江戸出府の事并寺田藤十郎孝心の事
- 寺田藤十郎敵に出逢事并林平治右衛門場所約束の事

高田馬場敵討評判の事并林平治右衛門返り討を巧む事
 寺田藤十郎難戦の事并堀部彌兵衛義勇の事
 園田安兵衛義勇の事并林が悪黨滅亡の事
 寺田藤十郎父の敵を討止る事并堀部彌兵衛浪人安兵衛を養子とする事

敵討高田馬場 總目錄終

敵討高田馬場

松平左京太夫殿責馬の事并牧野新五右衛門不覺の事

爰に説出す一話は元祿の初年武藏國江戸高田の馬場に於て俱不戴天の讐を討ち孝子の名を東都の街に顯し松平左京太夫殿へ召抱られたる寺田藤十郎と云者あり此人孝心深しと雖も生質虚弱にして返り討にも逢べかりしを園田安兵衛が義に進んで藤十郎を助け武勇を江城の下に轟かし其後堀部氏の養子となりて大石内藏助始めの忠黨に加はり吉良家の邸へ討入の夜は四十餘人の中にも拔群の働きをなし再び勇名を天下に現し末代へ忠勇の名を残したり此人舊園田氏にして父は越後新發田の城主溝口主膳正殿に仕へし處故有て浪々の身と成り程なく父は死去せしにより幼少より母の養育にて成長し安兵衛十五歳の時母も又重病に罹りて醫藥の驗しもなく遂に身死りし故是非なく家内の雜具を取片付父母が菩提を弔ひ我が身は江戸青山なる松平左京太夫殿家中に鹽瀬嘉左衛門と云者は母方の叔父に付爰に寓居なし當時有名なる堀内治左衛門の門弟と成て武藝を磨き宜敷方も有ば仕官せんと心得てぞ居たりける尤も故主溝口主膳正殿より歸參の儀申來りしと雖も父は勘氣を受て浪々の身に相果たるからは心能からず其上溝口家に戻らば父の本高小身故安兵衛は勿論叔父嘉左衛門不承知なるに依て暫く見合居たりけり此嘉左衛門は篤實の生れにて左京太夫殿の深く御意に適ひ使番を相勤め聊か私しなく叮嚀に交際ければ家中の評判も能一入殿も目を懸られし者なるゆゑ嘉左衛門が一人の甥なりとて安兵衛をも奉公に差出せとの内命もありしかば嘉左衛門は彼是と世話をなして我が方に差置機好をこそ待ち居たり然るに或日左京太夫殿家中の馬術を見物成るべしとて屋敷の馬場へ床几を出させ御覽有けるに近習の面々御前にての曠なる責馬故我先にと術を盡して乗けるが中にも牧野新五右衛門と云馬術の師ありて左京太夫殿

へ御師範申上知行百石を頂戴なし若殿門へ教示して居たりしが今日圖らずも殿には馬場へ出られて見物ありければ諸士何れも手を盡し乗馬をなしたるゆゑ新五右衛門尋常にては我が馬術の妙を現し難しと藝に誇て殿より仰せもなきに自分より曲馬一鞍御覽に入候はんと近習迄申陳し所殿御機嫌斜ならず曲馬は一入宜ろしかるべしとの仰せに依て新五右衛門大に悦び今日こそ我習ひ得たる馬術を顯し諸士の面々へ肝を潰さすべしと暫く地乗なし頓て馬場元より乗出せしかば殿を始め近習の面々固唾を呑んで見物せり牧野は馬上に扇を開き一かくかくを入て一趁に立駈を追出し是より敵隠れにならんとする處に鹽瀬嘉左衛門が長屋は馬場の隣りにて柴垣一重隔てし計なりしが折柄嘉左衛門が下女は月代の湯を取んと鉄先に掛たる銅盥を飛石の上へ取落し釣鐘の如く響きけるに牧野が馬は是に驚屏風の如く掉立に立て反り返りしかば牧野は耐らず忽地馬より動と落小石にて肩間を打破り血は流れて衣服を傳ふ體裁甚だ見苦敷により殿を始め近習の面々惘れ果て見えにける左京大夫殿は斯血を出し過ちある上は今日の責馬は是迄にて置可と甚だ景色を損じ床几を放れて庭口へ入れければ近習の面々何れも供して立去ける故跡に牧野は大事の場所にて不覺をとり面目を失ひしより無念ながらも詮方なく凄々我が宅へ歸り情々思ふに今日銅盥を落したる鹽瀬方成由我適々殿を慰め進らせんと心を籠し曲馬を妨げらるゝのみならず面を損じ衣服を汚し意外の不覺を取し事殿へは申すに及ばす諸士の手前も云譯なし直様嘉左衛門が宅へ推掛面談せんと血眼に成て刀引提げ鹽瀬が宅へぞ赴きけるが斯とは知らず鹽瀬嘉左衛門は下女の兇想を叱り衣服を改め今他行せんとする所に牧野新五右衛門急遽しく來たり嘉左衛門殿在宿ならば御意得たしと言體面色變じ見えけるゆゑ嘉左衛門は何事やらと思へども先座鋪へ通し様子を問ふに牧野聲を荒らげ貴殿は何の遺恨あつて某しに不覺をとらせしや返答次第存する旨あり所存を極めて答へられよと罵りながら詰め寄るにぞ嘉左衛門大いに驚き是は怪しからぬ御立腹拙者貴殿へ對し遺恨を含む覺えなし先氣を鎮められて篤と様子を申聞られよと宥める詞も聞えず牧野は彌々怒覺えなしとは近來以て卑怯なり某し今日殿の御前に於て曲馬を御覽に入んと既に

馬場元より乗出し駈足になるや否や貴殿の宅にて銅盥を投出し我が馬を驚かせしにより某し面體へ疵を蒙る而已ならず御前伺候の面々へ對し面目を失ふたり不肖ながら新五右衛門馬術を以て知行頂戴仕つる上は此儘に濟し難しと膝立直し席を打て怒りけるを嘉左衛門は少しも動ぜず扱は其事にて御立腹に候か何様不慮の御怪我御迷惑の段一應御道理には候へども其儀拙者に於て宿意之有致せし事に非ず其盥を落せしは召仕ひの下女が過つて致せし儀なれば不調法は偏へに御了簡下さるべしと溫和く事を分て詫けるを新五右衛門は一向に得心せず其辯解一通りは聞えし様なれ共假令貴殿が御存なきとて貴殿の住居内の儀なれば其主人たる者の過ちなり夫が爲武士たる者の面にて疵を付下女の過ちなりと而已の詫にては何分濟し難し貴殿覺えなき事相違なくば不調法の次第を一札に認め其下女共に渡さるべしと然も權柄に述けるに鹽瀬も勃然せしが是を咎めなば主君へ不忠と胸を摩り貴殿の詞一々理に當るとは申ながら一札の儀は御用捨下さるべし及び下女事も男子ならば品に依て御渡しも申べけれど取に足ぬ女の儀畢竟申さば時の過ち嘉左衛門手を下て御詫び申上る何卒御了簡下さるべしと折入つて頼みけるを新五右衛門彌々圖に乗仰聞らるゝ段甚だ以て相違也女なりとて斯る無禮に及びし者其分に濟しなば後日の批判も如何なり貴殿覺えなくば其下女を是非く拙者へ御渡し有べし強て渡されぬとならば刀の手前御相手に罷りならんと威猛高になつて罵りたり嘉左衛門は只事故無濟さんと思ひ溫和く挨拶して居たりしが餘りと云ば新五右衛門が無法の惡口最早宥るにも力及ばずと詞を改め身不肖なれ共鹽瀬嘉左衛門先刻より手を下て御詫申を御承知なく女ながらも某しが家來を其許の詞に隨ひ御渡し申し自然御手討にもならば後日某しの武士道も相立難し又御邊御承知なく刃傷に及ばん事主君へ對し御互ひに不忠の至り也只一旦の怒りより原因は些細の儀に身を果さんも本意に非ず今一應篤と御思慮を運らされよと恐るゝ色なく述べたれども新五右衛門猶々怒り慮外者を手討にするは武士の常況や今日の無禮了簡すべきに非ず貴殿達て女をかばひ相手とは面白し此處にては妨げ有て無益なり幸ひ長谷寺門前は往來なくて場處も宜し率や同道仕つらんと勢ひ込で申けるゆゑ嘉左衛門も云

掛りとなり貴殿善惡の論なく無體に勝負を望まるゝ上は力なし然らば御相手に罷りならんと是非なく鹽瀨は同道して長谷寺門前へぞ赴きける

牧野鹽瀨長谷寺前刃傷の事并園田安兵衛當座仇討の事

然ば牧野新五右衛門は己が藝が未熟を知らず偏に嘉左衛門がなせし事と心得我意に募りて雜言に及びしかば堪忍強き鹽瀨も終に牧野が無法の詞を聞兼武道の意氣地に是非無も果し合べしと兩人打連立て青山の屋敷を立出彼所は程近くして究竟の場所なり澁谷長谷寺の門前に到り勝負せんと道すがらも兩側に立てぞ急ぎける新五右衛門は言掛りと成しを今更跡へも引れず又嘉左衛門は手強き相手なり所詮松原に到らば欺し打にせんと工夫を廻らし道々も窺ひしが鹽瀨更に油斷せず左右に別れて道を急ぎし程に頓て長谷寺の松原に來りければ鹽瀨は聲を掛貴殿下女が鹿相を手を下て御託申と雖も聞入なく無體に勝負を望まるゝにより是非なく此所まで來りたり率や尋常に勝負あれと鯉口寛げ詰寄たり新五右衛門爰ぞと思先お待あれ一言申し度仔細ありと云も終らざるに鹽瀨大に怒り未練なり牧野氏某し再三詞を盡して詫りしを聞入なく此期に到り仔細有とは近來武士に似合ぬ振舞辯舌を以て某しを欺らんとは事可笑其方より手を出さずば此方より討んか覺悟あれ牧野氏と早拔放さん勢ひに牧野は兩刀を取て其所へ投出し逸まり給ふな鹽瀨氏全く某し未練の爲に止むるに非ず成程一旦は武道の意地にて爰までは參りたれ共先刻貴殿の仰の如く私しの意趣にて一命を亡ふは主君へ對して不忠は言までも無後にて諸人の笑ひを受ん事御互ひに死後の恥辱却て武士の本意に非らずと心付今更面目なけれど此上は改めて此方より手を下て御託申なり折節邊りに人もなく他見有ては相濟難し何卒貴殿御了簡有て穩便になし下されよと手の裏を返したる如き牧野が體裁にさしも勇氣に逸りし鹽瀨も打て懸らん様も無拍手拔して茫然とイみ居たりしが猶も首を振り如何に血迷ひしか牧野氏理非を分ざる貴殿が悪口此上此所迄足手を運

ばせ此期に至りて忠義呼はり聞苦し勝負は貴殿が望む處早く立上りて運を天に任されよと勇氣凜々として詰寄けるに新五右衛門は見苦しくも大地に手を着き御道理なる仰せなり斯有んとは思へども忠義の道には恥辱なし斯の如く某し兩腰を投出し恥辱を捨たる拙者が詫言刀を帶さねば童も同様偏に御用捨下されよと邪智を隠して大地へ平伏如何にも後悔の體に詫けるにぞ嘉左衛門も勇氣緩み暫く躊躇居たりしが汝人非人能々命は惜きものかな斯る不覺人を相手にせん事武士たるものゝ恥辱主君への不忠なりと思しかば言葉を和らげはは見苦し牧野氏武士たるものが一旦云出せし約を變じ這屈むはなにごとぞ貴殿のごとき臆病ものうちはたさんも刀の汚れ如何にも用捨いたすべし勝手次第に歸へられよと嘉左衛門は興をば覺し無益な論に隙取りたり率立ち歸へらんと二足三足行過る油斷を見すまし新五右衛門は拔手も見せず後より右の肩先大袈裟に四五寸餘まり切下たり切れながら嘉左衛門欺られしか残念やと強氣撫まず抜合せ必死と成て戦ふに新五右衛門は仕たりと喜び汝嘉左衛門腰拔の手並覚えしかと廣言吐つゝ切込太刀を此方は心得受流し踏込ゝ、難立たり嘉左衛門深手に屈せず憤怒の切先電光の如く隙も有せず切立れば新五右衛門は對戰兼既に危く見えたる所へ牧野の若黨甚内は主人の歸り遅きを待兼今此所へ迎ひに來掛りしが此様子を見るより主人の大事と馳寄て嘉左衛門が後より弓手の高股切下るに南無三助太刀心得たりと鹽瀨は振向隙間を付入新五右衛門は上段より右の腕を切落せば流石強氣の嘉左衛門も前後の敵に數ヶ所の重手眼暗んで踵く處牧野主從疊掛踏込ゝ切付れば鹽瀨は堂と倒れ伏其儘息は絶たりけり嗚呼哀むべし平生心懸厚かりし嘉左衛門聊かの爭論より牧野が奸計に陥入て空しく一命を亡びし事無慚なりける次第なり因て牧野は首尾能鹽瀨を討取しかば篤と止めを刺夫より主從屋敷へ立歸らん思ひしかども斯成果し上は後日の咎めも如何有んか乃至是より立退んと主從爰に相談を極め身拵へして去んとせし折柄嘉左衛門が甥の園田安兵衛は今日鹽町より築地邊へ用達に行しが今立歸りて此様子を聞や否や南無三寶と宙を飛が如くに走り來り夫と見るより新五右衛門殿先待れよと聲を懸け近付中に死骸を見付是は遅かりし残念さよと言乍ら一刀引拔飛懸

るに牧野も最早週ぬ處と主従左右に立別れ目配せなして切懸たり安兵衛閃りと身を翻し躍り入よと見えたりしが家來の太刀を打落し汝も敵の片別ながら下郎の命は助け呉ん邪魔仕をるなと叱り付其儘牧野に附入を彼方も茲ぞ一生懸命力を極めて戦かへど争て園田に及ぶべき烈しき太刀先受兼て十四五間も遼る間に若黨甚内は落たる刀を取より早く肩先目掛て切付るを安兵衛斜めに發止と受止汝下郎め命を助けしを又手向はゞ用捨はせじと返す刀に甚内が膝口横に切付れば尻込するを安兵衛は見向も遣ず牧野に付入上段下段と火花を散らして戦ふに新五右衛門は一世の大事と死もの狂ひ喚き叫んで切結べば家來も同く主人の大事と手負も厭はず踏込く打掛るを園田は血氣の若者等二人を相手に息をも吐せず勢ひ込て切捲る其早き事電光の如く前に在かと思へば後に顯はれ眼前叔父の仇敵争か一步も遁すべきと孝心節義の切先鋭とく牧野主従手を碎き精心限り働らけども終に安兵衛が切込む太刀を受損じ新五右衛門肩先深く切下られ太刀筋亂れて四度路になるを安兵衛得たりと飛鳥の如く寄ぞと見えしが忽地に新五右衛門は眞向より二ツになつて倒れたり是を見るより若黨甚内ヤ、叶はじと逃出すを安兵衛追かけ後より是も同じく眞二ツ穀竹割にぞ討とめたり安兵衛は新五右衛門の側に立寄叔父の敵き思ひ知れと首打落して莞爾と笑らひ徐々刀を拭ひしは天晴勇々しく見えにけり然れば近所の者ども此の騒動を聞付け八方より武士町人見物に馳集まり區々評議する中松平左京太夫殿より役人中走り來り目附役桑島幸右衛門徒目附野崎庄兵衛の兩人篤と見届け荒増の様子を書記し理非は兎も角も安兵衛儀早速甞着當座に敵き二人迄討取し事天晴の働きなりと讚美有て近所の辻番所へ斷り何れも死骸と俱に青山なる松平左京太夫殿の屋敷へ引取ぬ

松平左京太夫殿取捌の事并園田安兵衛賞祿辭退の事

斯て松平左京太夫殿は三人の死骸を引取安兵衛始め親戚共を呼出し先渠等が趣意を委しく吟味あるに元來嘉左衛門

は意恨なしと雖ども下女が過ちより事おこり新五右衛門無體の難言に及び達て打果さんと立腹したるによつて斯く傷に相成し事ども明細相分りしかば聊かの儀を争論に及び大切の身を輕々しく相果せし條武士の本意にあらずと新五右衛門は家名改易申付られ家内は門前拂ひと成りたりける又嘉左衛門儀は年功と云ひ勸辨も有べきの處日來の氣質に似合ず目附中へ一應の訴へもなく私の刃傷に及びし愈忽の段不忠の至なり併し平生勤方宜しきに依て知行は召上らるゝと雖も幼少の悴卯之助へ四人扶持下し置かれ成長の後召出さるべき由申付られ次に園田安兵衛儀は寄宿の身を以て早速刃傷の場へ甞着當座に敵兩人まで討取り薄手をも負ざる事天晴の働らき神妙なりと御賞美有て新知三百石にて召抱らるべき旨家老速水内記より申し達る處依て左京太夫殿家中にては園田が手柄天晴無双の者なりと一同に評判なしたりけり然ども安兵衛は豫て藝術を勵み大諸侯の祿を得て故主主膳正殿へ立身の程を見せ父祖の家名を起さんと心懸居けるに思ひの外左京太夫殿へ召抱へらるべき段申渡され辭退も成り難く如何せんと思惑せしが先一通り御請け申上翌日早々家老速水内記方へ到り私し儀武運に叶ひ聊かの働き仕り候事殿様御聞に達し御召抱下され候段有難く存奉候へ共嘉左衛門不屈きの筋に付悴卯之助幼少たるを以て知行召上られし段是非なしとは雖共是れまで嘉左衛門が多年の勤功空しく相成候事嘆かは敷存奉つり候へば今度私へ下し置れ候知行を以て嘉左衛門が家名前々の如く御取立下され候様宜敷御披露願ひ上るなりとの書付を出せしに速水も安兵衛が若輩なれども仁義を重じ功に矜らず神妙の願なりと感じたりしが内記安兵衛に向其許此度の働き拔群たるを以て新たに召抱へあるべき旨仰付らるゝの處叔父の家を大切に思ひし願の段天晴感心致すなり此段御前へ披露致すべきに付暫く差控へ申すべしとの儀にて安兵衛は一先鹽瀬方へ歸し置き速水は急ぎ殿の御前へ罷出安兵衛が願ひの趣き委細に申陳ける處左京太夫殿にも園田が願ひ若輩に似合す誠實の致し方なりと彌々感賞ありて先例には無しと雖も安兵衛が節義賞美の餘り願の通り申付べし併ながら卯之助幼少ゆゑ後見致し然るべしと有ければ速水は早々園田安兵衛始め嘉左衛門一家残らず呼出し役人中列座にて此度嘉

左衛門知行召上らるゝの處甥安兵衛自分へ下されし祿高を以て叔父嘉左衛門の家名相立申度段願出る條神妙に思ひ召
れ願の通り申付らるゝ旨申渡しければ安兵衛始め一家皆々勇み勇み悦び有難き段御禮申て歸りける是より安兵衛は家
老中より卯之助が後見致すべしとの内意に付矢張浪人ながら彼弟卯之助の後見として鹽瀬方に寄留なし父祖の家名を
顯さんと時節を見合せ月日を送り居たりける

將軍家御具足開御儀式の事并遠山三郎四郎不受不施の事

斯て園田安兵衛武康は叔父の敵を直に討取大功を顯はしけるに依て左京太夫殿新知を以て召抱べき段申付られけれ
ども叔父の家名斷絶を歎き節義を守りて其祿を譲り其身後見として暮せしは天晴なる志しなり其後又高田の馬場に於
て比類なき武功を顯はし諸人の耳目を驚かせし其起りを尋るに當時將軍家の御旗本に高二千石を領す遠山三郎四郎と
て御書院番を勤むる人なり例年正月十一日は將軍家の御具足開きの祝儀として御三家方御家門は申に及ばず國主城主
の諸侯を始めとして布衣以上の役人各自登城なし嘉儀を申上られける此日は將軍家自ら御斧を以て御鏡餅を開き給ふ
と云ふ此餅米は豫州桂川村三州松平村兩所より十俵づつを獻ず是を用ひて日光山東照宮の神前へも備へ給ふ此儀式は
古しへ漢の高祖古郷に歸りて舊亭に父老を集め大風の曲を舞ひたまひしが如し將軍家にも御先代の昔を忘れ給はず
其元を愛しみ尊まるゝは君子の政令いみじき御事なり殊に正月十一日は不成就日とて諸人は忌嫌と雖も將軍家には
武門第一の祝儀具足開きに此日を用ひ給ふ其謂は不成就日に爲事は都て行て歸るの日なり是に依て軍馬四方に發する
事逆徒征伐して諸勢目出たく歸陣の儀を祝さるゝ處なり東照宮より以來代々の天子勅定有て九錫兵仗を帶し淳和
辨學兩院別當源氏の長者に補し武門の棟梁征夷大將軍に任せられ官は三公に昇り給ふ事天晴珍ら敷御榮譽なり九錫兵
仗は天子の兵器にして朝敵追討有時は武將たる人に是を授け給ひ逆賊平均の後は禁庭へ取上らるゝ例なるに元弘

建武の大亂より天子の御徳衰へ武威盛になり足利三代義滿公の時に始て公方の號を給はり其後義持義量義教義政五代
の君たち威勢強しと雖も應仁の亂より將軍も又權威薄く義輝義昭兩公などは武將の名計り成し處織田信長公右大臣に
任じ又秀吉公關白の職に居て四海を掌中に握り給へども此二公は公方將軍に非らず爰を以て見るに徳川家の武威盛な
る事又先代より勝れりと云べし正月には新年嘉儀多き中にも御具足開きの御儀式は武家第一の祝ひたるを以て嚴重に
其式を行せられ御三家方御家門中國主城主を始め御旗本の諸役人に至る迄格式に隨ひ先例に任せ御鏡餅を分與へ當番
の御役人中三寶に据て相渡されける又布衣以下の人々へも其日詰合の分へは是を下さるゝ中に遠山三郎四郎は去年の
春父三郎左衛門死去せしかば家督を賜り忌明の後猶ほ怠りなく勤め居たりしに當代の三郎四郎は法華宗一致派にして
宗門の掟を守り不受不施の法を重んじ一類中にて他宗の人々には萬事取遣なく平常より人に紛れて固ましくみえた
りける然共今日は將軍家の御祝儀ゆゑ御臺所役人御鏡餅を持參し頂戴有べきの旨申述て差出しけるに三郎四郎役人に
向ひ此儀有難く候へ共拙者儀は宗門の掟にて不受不施を守り候に付他の神佛へ備へし物は一切受納致さず候間御鏡餅
は拜領仕つり候も同前なれば御引下され度此段其筋へ宜しく御披露給はるべしと公より賜はる御鏡餅を頂戴せず其儘
に差戻しけるにぞ御臺所役人も當日御祝儀の事ゆゑ貴殿の御委細承まはり候へども宗門の掟は私し事今日の御儀式は
武門第一と云殊に東照神君へ御備へ有し御餅にて他の神佛などへ捧げしとは格別の御品と申殊には將軍家より台命を
以て拜領仰付らるゝは例年の御嘉例なりと申に相番中も貴殿一人拜領なくば上聞に達しても宜しかるまじ尤も貴殿は
當年始めてゆゑ御家例不案内にも有之べきなれども法式に背かれては番頭衆へ披露も成難く是非〳〵頂戴あれと理を
責めて申しけるを遠山押返し各々方の御心を添られ仰せ聞らるゝ次第御道理の儀ながら大切の御鏡餅とは申せども宗
法を相背き佛敵と相成り候ては先祖へ對し不幸高祖日蓮大菩薩へ申分御座なく候へば平に御用捨下さるべしと色を變
じて見えけるに相番中も詮方なく貴殿然程までに宗門の掟を守り台命をも背き給ふ段是非なし然らば御頭へ披露致す

べしと此趣きを御書院番頭本多對馬守殿へ相達せし所以ての外ほかの事なりとて早速詰所へ三郎四郎を呼寄其許宗門の捉を守る由夫は兎も角も今日は大切の御祝儀と云公よりの賜はり物を辭退なしては其許身の上の爲に相成まじ未だ新參ゆゑ心得違ひは有中なり急ぎ受納有て然るべしと申けるを遠山猶も強情を張御道理の儀に候へども他の捧げ物を受納仕つり候ては後來相濟申さず決して頂戴は仕つらずと達て申ゆゑ對馬守殿是非に及ばず此段月番の老中秋元但馬守殿へ披露せし處但馬守殿是を聞れ其れは怪しき遠山が言葉哉我公よりの賜物と言ひ殊に東照宮へ御備に相成し御鏡餅を辭退なす事言語同斷なりとて右の段將軍家の上聞に達しける處以ての外御機嫌悪く憎き遠山が振舞哉予より遣すものを己が宗門の法を立る而已ならず剩さへ東照宮へ捧げし品を嫌ひ武家にして最も大切なる嘉例を破るは甚だ奇怪の曲者なりとの上意にて御景色散々なりかば老中方も御道理至極に付屹度沙汰仕まつるべしと申上られ御前を下りて老中方若年寄一同評議有て御書院番頭本多對馬守殿を呼れ以來の爲なれば遠山が知行を召上げ八丈島へ流罪仰付らるる間此段申渡すべしと有ければ本多對馬守殿畏まり奉つるとて夫より遠山三郎四郎儀組頭相番附添番頭本多の宅へ罷り出べき旨達せられたり

遠山三郎四郎遠島の事并寺田與右衛門横死の事

扱も老中秋元但馬守殿稻葉對馬守殿列座にて右の趣き申渡されければ頭本多對馬守殿は遠山三郎四郎を自宅へ呼寄御目附中立合にて對馬守殿席に正し今日例年御儀式に任せられ東照神君へ御備に相成し御鏡餅を下さるゝの處其方不受不施の法を守り台命を背き候段不届に思し召され知行改易八丈島へ配流仰せ付られ候旨老中秋元但馬守殿仰せ渡され候然様相心得らるべしと嚴重に申渡けるに遠山は少しも騒がず私し宗門の信義を守り候事上聞に達し遠島仰せつけらるゝの趣き委細畏まり奉つり候誠に法華行者たらんこと千辛萬苦を経ずしては遂難きとは高祖日蓮大菩薩の金言なり

り宗風の儀に付八丈島へ流刑の事は高祖上人佐渡ヶ島遠流の佛げと存じ奉り候へば有難き仕合せ此段宜しく御披露下さるべしと少しも瘻む色なく却て悦び諸士へ一禮述べければ満座の面々遠山は亂心せしか狐狸の取付しかと彌々惘れ果たりけり夫より三郎四郎は揚屋へ送られ同人屋敷へは相番中より老中方仰渡されの趣き相達し家内始め家來共へも申し聞せしかば家内の愁傷大方ならず用人寺田與右衛門は泣々内室子息達を一類中へ預け遠山家大切の品々を取集め悴藤十郎に萬事の儀を申合めて親類中へ運ばせ置追て時節を見合せ主人三郎四郎の歸參を願ひ出さんと末の事までも考へ自分の事には少しも頓着せず只一心に主家の跡こそ大切なりと老人の氣配りをなし先概略に片付しと雖も如何にも俄かの事故未だ雜具までは手の廻らず同役林平治右衛門は與右衛門に反して大愆邪智の小人ゆゑ主人の難儀も構はず己れが雜物を一番に片付け剩さへ奥へ駈入主人の用篋を開き百兩餘り取出すを與右衛門瞥見と見るより合點行すと即座に聲懸平治右衛門には何の用有て御用金を取出し何國へ持參致さるゝやと咎めければ平治右衛門は驚く色なく此方を見返り御用金を取り出すは別儀に非ず拙者の取扱ひし出入町人へ御拂ひ残りを遣さん爲取出すなり尤も餘り火急の事故奥向始め貴殿も御取込みと存じ御挨拶延引せりと云に寺田は聲を張上貴殿の詞其意を得ず斯る主家の大變を餘處に見て是迄何の働きもなく身勝手を致さるゝとは近來不忠の至りなり何用の入費なりとも我が意に任せ計らるゝ事盜賊同前なり省慮召れと極付られ平治右衛門は赤面し乍ら少しも瘻まず所詮斯顯はるゝ上からは是迄なりと度胸を極めヤア爰な老耄入らざる忠義呼はり由なき主人が片意地より公方家の命に背き先祖の家名を失ふ上諸人の笑ひを受るは本氣の沙汰にあらず迎も滅すべき遠山の家何の爲に忠義を盡さん馬鹿くしきも能加減にせよと傍若無人の林が詞に寺田は怒り心頭に發し君恥しめらるゝ時は臣死するとは古人の金言道に背きし無道の振舞聞き捨ならぬと言間もなく林は小賢と拔打に切付るを寺田與右衛門心得たりと拔合せ請つ流しつ手を碎き争ひしが劍術無双の平治右衛門踏込、嵩に懸りて打太刀を老年の悲しさには跪つくるとたんに受損じ寺田は弓手の肩先より斜に四五寸研下られ南

無三寶と驚きながら猶斬懸らんせしかども最初の深手に眼眩み腕先弱りて打太刀の四度路五度路に見えければ林は得たりと疊み懸難なく其所へ斬伏つゝ止め刺手も勿々に取圍まれては叶はじと金子を手早く懐中なし飛が如くに門を出行方知れず逃失たり斯る刃傷有と雖も此節家中も引拂ひしに付騒動の最中咎むる者もなければ安々と逃げ出しけるは大膽不敵の曲者なり然れば寺田與右衛門は老人の忠誠を盡せしに佞人邪智の刃に懸りしは天なるかな命なるかな嫡子藤十郎は主家の用を取込此の所に居合せざりしは残念なりける次第なり

寺田藤十郎父が讐を尋る事并林平治右衛門臆病の事

斯共知らず寺田が嫡子藤十郎は主人の重器を親類の方へ預けに到りしが漸々立ち歸り父に逢て悦ばせんと奥へ入死骸を見附て大いに驚き何者の仕業なりと近習の侍士志賀小十郎石島良介等へ尋ねれども是等も此度の騒動の取込最中此事を聞て俱に驚き扱は親公には御存知有しか我々儀は親公の御差圖にて奥方御親子の御供致し向柳原の松浦家へ罷り越たる留守ゆゑ委細の事は曾て存ぜず定し残念に思はるべし御門を閉吟味あれと俱に力を合するにぞ藤十郎無念ながら屋敷中の人を集め何者の仕業にやと嚴敷吟味に及ぶ中座敷を手傳ひ道具を運びし日雇傳藏と云者林が口論刃傷の様子委敷物語れば扱は平治右衛門が父を手に懸立退し事仔細有るべし追詰て討取んと血氣に逸るを石島良助志賀小十郎是を止め残念は道理に候へども斯る騒動の中といひ主人を見捨親公を殺害して立退程の人非人何故此邊に留らんや定て遠く逃げ去べし最早餘程時過たれば追駈られても詮有まじ明日は早朝屋敷受取の役人衆も入來あれば主家の大用打捨置難し一先御親父の死骸を取納めて屋鋪を首尾能相渡し其上にても遅かるまじ及ばずながら我々とても御力に成申さん主君に放れ親を亡ひ御愁傷は嘸々と御察し申なり然れども公邊に關る大事の場處再び思慮を運らされよと理を盡して諒めけるに藤十郎も兩人の詞に無念を忍び成程御兩所の仰せ主家の大變此儘には成難しと力及ばず死骸を取納

め屋敷引渡しにぞ取掛りける翌日は早朝より屋敷受取として屋敷改め役野呂七左衛門徒目付岡井久太夫等立合引渡し相濟遠山三郎四郎の家士は何れも思ひくりに出行けり斯て寺田藤十郎は一先淺草森下町なる知己の方へ立退夫より敵の行方を彼方此方と心を配りて尋ね居たり又彼の林平治右衛門は主家の大變を幸ひに同役寺田與右衛門を殺害して金子を奪ひ取其儘屋敷を立去暫く懇意の方に忍び居たりしが主家の改易に依て表向敵討の願ひも出されず藤十郎一人にて己を狙ふ由仄に聞えしかば此上は公邊へ對し恐るゝに及ばずと小石川組橋に借宅して劍術の道場を開きし處相應に門人も出來て暮しけるは不敵なりける次第なり是偏に主人たる遠山が公命に背き改易に成しゆゑ家來迄も公邊にて善惡の御糺しもなく只其儘に離散せしとぞ聞えたる然ば林平治右衛門が道場を開きしも公儀にて一向御構なく藤十郎は武藝も熟せぬ柔弱者故最早世間に恐るゝ所なしと一日平治右衛門は門弟四五人連にて遊歩しけるが折節上野の櫻今を盛りと咲亂れ貴賤老若群集しければ林も彼所に到りて酒食を調へ暫し酒くみ交せしが追々能機嫌になり往來の男女を押へては猪口をさし又は人々の風俗を諷りなどして居たりけり斯る所に播州赤穂の城主淺野内匠頭殿江戸留守居堀部彌兵衛の妻女も佛參より兩大師へ參詣旁々一人の娘を伴ひ來りしが元より忍びの事ゆゑ僅か僕一人を供に連今通り懸りしを林の門人秋山房右衛門竹内嘉藤次等娘が艶麗なるを見て好酒の相手なりと直と寄て前後より引挾み道を塞いで通さねば堀部が下部は是を見兼中に分入つゝ何方様かは存ぜねど斯様の狼藉は其意を得ず其所退て通さるべしと云ば兩人大いに怒り推參なる下郎めと云ながら下部を突退て妻女に向ひ我々は小石川邊の浪人なるが御息女の艶色天晴當時の小町とも云べし差付ながら御所望申と云つゝ娘が手を取立て行んとするを妻女は騒がず其腕を取て突放し敏くも娘を後に圍ひ氣色を正して二人に向ひ是は御無體なる成れ方我が娘御意に叶ひ得懇望とあれば武士の習ひ表向人を以て申さるべし遊び女などを慰む如く理不盡の御事嗜み給へとやり込れば後に續きし鶴殿平藏笠原右衛門是を聞り論は無益引立よと遠慮もなく又も娘の手を取を彌兵衛の妻は耐へ兼腕首取て交付れば小續な奴と竹内嘉藤次續いて

懸るを心得たりと突入て腋腹一當々ければウンと仰向に反返り大地へ堂と倒れたり鶴殿秋山左右より此女めと飛掛るを早くも閃りと身を開き用意の懐劍抜放し身構へするに二人の悪者女を相手に刀も抜れず猶豫の中に堀部が下部娘を茶屋に預け置寄らば斫んと主従二人眼を注て立たりけり此體を見て奸智に長たる林平治右衛門なれば南無三女を相手に無益の腕立過まちはあらば我が身も難儀ならんと心付何となく中へ隔入是は怪からの御立腹何れの御方にや御名は承はらね共若き面々酒興の上の不禮何卒御用捨に預りたし御立腹の筋は拙者に御預け下され一刻も早く御通行あれと日來の悪心も手並に恐れ挨拶に及びしかば堀部が妻女も忍び參詣ゆゑ別て事を好むにあらざれば林に向ひ何誰かは存じ申さず御挨拶に預り恐れ入る餘り無體の振舞に付手前とても武士の妻此儘にも捨置れずと存れども佛參と云御詞に従ひ兎も角も致すべしと勇氣弛まず申けるは天晴彌兵衛が妻女なり林が門弟共も手並に恐れ這々の體にて平治右衛門が詞を幸ひに皆々行き過ぎ林と俱に早々上野を逃歸りしは最見苦しき有様なり堀部が妻女は茶屋に立寄り娘を預り吳し禮を述夫彌兵衛は堅氣なれば耳に入らぬ様にと口を留め道を早めて歸りしが元より忍びの參詣故誰も此事柄を知る者なく其儘無事に濟せつゝ夫の耳へも入ざりしは天晴發明なる妻女なり

堀部彌兵衛由緒の事并淺野家笠間入城の事

却說堀部彌兵衛金丸が父彌治郎金氏は強氣の勇士にて淺野采女正長重殿に仕へ十石三人扶持の足輕なりしが采女正殿常州下館より同國笠間へ所替の台命下りしに笠間城中天守の五重目に蛇蝎住て城中の諸人を驚かし天守番の輩ら難儀に及ぶと雖も是迄の城主彼蛇蝎を退治爲事能はず明城にて捨置れしに此度將軍家より長重の武勇大器を御感賞の餘り笠間へ入城致すべき旨台命に依て淺野家に於ては諸侯多き中に其御撰みに預る段面目を施し早速彼蛇蝎を退治せんと思はるれ共年經し惡蛇ゆる容易に退治成難く因て城代家老大石平右衛門を始め誰有て退治せんといふ者なく

何れも口を閉て居たりしかば殿にも齒けらの爲に大切の臣を傷はんも本意ならずと種々心を痛められしに此時堀部彌治郎是を聞て大いに勇み是屈竟の時節なり日來手練の鐵砲を以て毒蛇を退治し我が武勇を顯し諸人の愁ひを除かんと急ぎ家老大石の方へ相越私儀不肖には候へ共御城中毒蛇退治の役仰せ付られ候はゞ有難き仕合せなりと思ひ入て願ひ出けるに此節諸士の評定區々なりし所堀部彌治郎衆に抽出て申出たる事日來の勇壯彌々盛んに見えたりとて大石甚だ悦び勇ましきかな彌治郎聞及びし其方が手練仕損ずる事必らず有まじ首尾能毒蛇退治あらば急度恩賞有べきなり小祿の其方何ぞ支度も有ば遠慮なく申さるべしと心を付て申ければ彌治郎増々悦び然らば隨分宜敷紅絹一疋御渡下さるべし假令如何なる毒蛇なり共一砲にて仕止ん事心安し彌々仕止候はゞ何卒二百石下し置れ度御願申置なりと未だ城中へも入ざる先に然もいかめしく望みたり此彌治郎平生不骨第一の我が儘者なれども鐵砲に妙を得て非番の節は近邊の山野を駈廻り遊獵を好み枝上の小鳥其外獸類を討捕こと少しも過またず勇氣益々強く嶮岨幽谷も更に厭ふ事なし生得頑固なる者ゆる家中の諸士へ無禮など多しと雖も誠忠一圖なる男なれば采女正殿も其不骨を咎められず差置給ひしが大石も堀部が未だ功も顯さず近來法外の願ひなりと思ひけれども彌治郎が不骨は今に始めぬ事心よく承知なし然らば早々仕度有べしとて紅絹一疋は如何なる事に用ゆるやらんと不審爲がらに乞に任せて渡しければ彌次郎は有難き仕合せと悦び勇んで我が宿へ歸り妻女に云付て懇意の方へ髪を貰ひに遣し多く集めしに何れも甚だ怪み彌次郎には大切の役目を願ひ何の用に多くの毛を集るならんと申に彌次郎少しも構ず悉皆用意をなすに彼の紅絹を以て手甲脚半又は羽織などを拵へ頓て好む處の鐵砲を携へ城中に入て支度をなし只一人天守の五重目へ登り行しは實にも勇々しき有體なり然れば彌治郎が打扮餘り仰々しき體なるを見て堀部は狂氣したるや瘡瘡神の退治ならば然も有べし天晴稀有の打扮哉と口々に笑ひ誹りけるが中に心得ある人々は是を見て彌治郎は平日山野を駈廻りし程有て蛇蝎の毒氣を防ぐ手當は天晴の心掛にして日來の不骨に事替り神妙の振舞哉と却て譽たりとか

堀部彌治郎蝮蛇退治の事并彌治郎立身の事

去程に堀部彌治郎金氏は用意充分に調ひ多年の砲術を顯はすは此時なりと初更の頃天守に登り集め來りし髪の毛を火鉢にさしくべ燻しつゝ嗅氣も厭はず十匁筒に強薬二ツ玉を込笑を含んで待懸たりしは大膽不敵の振舞なり實に堀部が謀計に違はず髪髪の毛の餘煙四方に滿るに隨ひ臭氣を慕ひて城中の野狐數十疋集り來り火鉢の邊りへ寄集り小鼻を怒らし飛上り踊り越悦び狂ひしが夜の更るに隨ひ數十疋の狐髪の毛の香ひに性根を奪れうつゝの如く睡りけるを彌治郎は精心を勵まし毒蛇の來るを相待けるに良丑滿とも覺しき頃峯の夜風梢に沈み自然と氣骨を閉草木も眠りを催すにぞさしもの彌治郎も五體瘳れる如く眠氣のさしけれども爰ぞ大事と氣を烈し眼を配りて居る中に何處共無雷の落る如く物音して血生臭風起るや否や天守の西北の隅より眼の光は鏡の如く紅みの舌を出し數十尺の蛇蝮毒氣を吹掛滑々と胡ひ寄る有様身の毛も彌立て見えけるを彌治郎金氏少しも動ぜず筒先差向窺ひ寄るを蛇蝮は斯とも知らず眠居る狐を唯一口に呑込しかば残りの狐は是に驚き飛上り逃んとするを又一疋に飛掛り呑んと伸す咽元を胡ひ澄して打ち放せば血煙とものにた打廻り蛇蝮は遙かに地響なし下階へ咄と落れば彌治郎は仕濟したりと用意の明松燈し立天守を下て能々見るに數十尺の蛇蝮腮より頭腦へかけて打貫れ動きもやらず倒れたり誠に堀部が多年の手練爰に顯はれ近代無双の毒蛇を唯一砲に打留しは天晴當時の手柄なり因て堀部は大いに悦び走り行て此旨言上せんと駈出しけるが立戻りて思慮するに古へより毒蛇の類一旦は死に至る共怨恨腦上に残り後來仇をなすと云へり我是を恐るゝにはあらねども渡邊が金札の例も有と刀引拔兩眼を差貫ぬき今は心安しと早々外城へ立歸りて斯と注進に及びしかば家老大石は直様采女正殿の御前へ堀部が手柄の程を披露なしけるに淺野公は甚だ感賞有て彌治郎を御前に呼出され此良其方の大功誠に賞するに勝たり是は當座の褒美なりと長押に掛たる十文字の鎧を取て汝が武功を賞するの餘り今より目見以上の檢式申付るなりと長重殿自手ら賜はりけるにぞ堀部は是を押し頂き武門の面目此上なしと感涙を流して退きけり是より大石は約束の如く殿へ披露して二百石を申與へ物頭格にぞ成にける然るに因て采女正殿事故なく笠間の城へ引移り給ひ一家中の悦び少なからず夫より入城の次第毒蛇退治の趣きとも飛書を以て大老酒井雅樂頭殿へ注進有ける處酒井殿にも淺野家の武勇を感じられ翌年長重殿江戸表へ參勤ありて將軍家へ御目見の時雅樂頭殿御前へ向はれ長重が毒蛇退治の次第委細言上有けるに將軍家御感有て長重老年に及ぶと雖も能家來を扶持致す事天晴武門の譽なりとて御賞美有て御盃盞を賜りしかば長重老後の面目を施し御盃盞を賜りし段有難き旨御請申上下城致されける是將軍家指て御稱美ある程の事はあらねども酒井殿胸中に大望ある故諸侯を手馴けんとして斯は執成れしとなり斯て二三日過酒井殿より使者來り淺野家の武勇御羨數存の間龜茶進上申度手前屋敷へ御來駕下さるべし猶又笠間表にて毒蛇退治致されし御家來在番に候はゞ御召連下さるべしと思ひ寄らざる大老よりの請待に及れしかば淺野采女正殿御請待有難く承知仕り候と使者を返され頓て堀部彌治郎を召され此度汝の働き將軍家の上聞に達し剩さへ大老酒井殿御招きあるは至つて重き御賞美なり汝大老の屋敷へは始めての儀なれば日來の無骨を省慎酒井家の諸士へ必ず無禮有べからず萬事我が差圖に隨ひ強氣の振舞相慎しし申べしと嚴重申付られければ堀部は委細畏まり奉つり候其儀は少しも御氣遣ひ下さるまじと早速供の用意をなし長重殿の駕籠に添て酒井家へぞ赴きける

堀部彌治郎酒井家にて無骨の事并淺野采女正殿廉智の事

然ば淺野長重殿は酒井家へ赴かれけるは雅樂頭殿其身大老の職に在て權勢強きに任せ内々大望を心掛ける故長重殿の如き智勇の人に親しみ堀部が強氣を聞て淺野家へ所望なし召抱へて一大事の役に立べしと思はれければ何となく長重殿を請待して饗應の上申出さんと使者を以て招かれけるに采女正殿は其心を更に知らず只大老よりの請待なれば

其儘に拾置れずと直様堀部を召連酒井家へ到られて案内あるに雅樂頭殿甚だ悦び早々書院へ伴はれしに彌治郎は主人の後に附酒井殿の支關へ上らんとするゆゑ雅樂頭殿の取次役石原彌右衛門と云者御家來は腰掛に御控へあれと咎むるを堀部は知らぬ顔にて座敷へ行んとすれば石原是を引留貴殿は采女正様の御家來と見請たり何の用向有て支關より通らるゝや近來不禮千萬なと此方より使者の様子を知らざれば咎めけるに彌治郎少しも動ぜず是は怪からぬ御咎めかな今日は御當家より主人諸共御用の儀有て御召に預りたり是に依て主人を始め取敢ず參上致せしゆゑ御案内も有べき處却て御咎めを蒙り近來迷惑に存るなり雅樂頭様御用もなくば直様罷歸り申べしと例の聲高に申て引歸さんとする處に堀部が高聲奥に響きしかば酒井殿近習を以て苦しからず次の間へ罷り通るべしと有けるに然こそ有べき筈なれと石原を尻目に掛ながら次の間へ通りて居直りしが居來堀部は我儘者ゆゑ斯る座敷に出たる事なく殊に此程まで足輕を勤し事なれば酒井家の諸士挨拶に及ぶと雖も應對甚と不作方にて只四方を見廻し居たりしが斯長座する事始めてゆゑ痺れをきらし難儀の體に見えけるを酒井家の諸士次の間より目引袖引笑ひたり然ども堀部は更に頓着せず空嘯きて居たりしが此時酒井殿も采女正殿と暫く物語りあり頓て雅樂頭殿座を立れ手自長重殿へ膳を据られ又堀部へも料理を下されしが雅樂頭殿自身次の間迄出られ等間に於て數年諸人を惱したる蛇蝎を此度退治せしは其方なる由驚き入たる勇壯なり是に依て今日召寄しは其節の物語りを聞ん爲なり遠慮なく酒食有るべしと挨拶あれば彌治郎は只發とばかりに平伏なすに給仕の面々扱は此度筈間に於て勇壯を顯したるは此人なるか見掛けに寄らぬ人物なりと始めて堀部が武功を聞何れも彌々禮を盡し始め笑ひし人々迄も叮嚀に饗應しけれども彌治郎は誠實一遍の勇士なるゆゑ膳部に向ひ珍味を食すると雖も其作法も知らず只己が好む處を撰みて大食に及び何の挨拶もなくむしやり／＼と喰ひける體眞に強勇の者ながら更に禮儀を知らず無骨の體に見えたりけり然れども酒井家の諸士堀部が勇名を聞面前にて笑ふ事も成ざりしは近來一興の次第なり此時奥の間にては雅樂頭殿自ら長重殿を饗應しけるに采女正殿は彌いよ謹んで禮義を饗

さず雅樂頭殿自身の配膳を迷惑に思はれ是は怪からぬ御饗應痛入候なり御近習へ仰付られ貴公様にも御安座下さるべしと一々に配膳を戴き手を下て挨拶あれば雅樂頭殿にも貴老には老體其上武勇の家筋依て某し敬ふ處に候其節御答禮に及ぶべからず寛々安座有て鬱氣を晴し給へ今日御招請申せしは甚だ龜末の振舞御用捨に預り度と頻りに饗應し給へば采女正殿は更に頭を上げ今日の御饗應は眞に佳肴の珍味御深切の段痛み入候なり其上天下の老が自ら配膳を下し給ふ事冥加の至極長重恐縮仕まつること配膳にも手を付ず敬ひける雅樂頭殿是を聞て一旦の辭退は御道理に候へども強て謙退致さるゝ事勿れ今日の招請は貴殿が武名を慕ふ某しが寸志にして外に禮義を盡すべき賓客もなく貴君一人の事ゆゑ必ず遠慮は御無用なりと詞ばを盡して進め給へば采女正殿御思志千萬忝けなく候へども禮を守る事は武士の本意其義に違ふ時は何を以て今日の政道立申すべきや況て貴君は天下の執職身不肖の長重へ自ら配膳を下さるゝ事冥加の程實以て恐縮仕つるに是を長重食する時は禮に似て禮に非ず貴君の敬ひ重じと雖も長重に於ては御答禮に甚だ當惑仕まつれり御饗應服食の儀は幾重にも御許容下さるべしと少しも禮儀を亂さず豫じめ雅樂頭殿が胸中を察すると雖も是を云ず進退舉動以て酒井殿の奸計を防ぎ自然と諫めの詞を出されしは眞に勇智の老將なりさしも巧まれし酒井殿も廉智の誠心に勝事能はず手持不沙汰に見えたりける雅樂頭殿猶も詞を和らげ貴郎然程に思はれなば兎も角も致さるべし眞に貴老の智勇と云又御家來にも智勇の名士あり某し天下の政道を司どると雖も未だ斯る名士を得ず近來羨しく存するなり苦しからずば此度笠間城にて毒蛇退治せし勇士を某しへ給はるまじきや我又貴老が武勇に類似聊か將軍家へ忠勤を盡し度貴老此儀御承知あらば大慶に候と餘儀なき體に所望ありければ采女正殿は返答に暫時當惑せられけり

堀部彌治郎誠忠の事井酒井殿忌慮相違の事

此時堀部彌治郎は次の間にて始終の様子を聞居たりしが元來剛毅の者ゆゑ耐へ兼何の思慮もなく酒井殿の前へつかつかと罷り出て此度毒蛇退治の儀御聞に達し天下への忠義を思召れ私し儀を采女正へ御懇望遊ばさるゝ段一應は冥加の様に候へども然様の忠義は主人とても御同様に心懸る事なり武士たる者何程の知行を下し置れ公儀よりの御召に預かるとも當主の厚恩を捨て他へ奉公仕つり候事忠義を知らざる祿盗人も同前に候此儀采女正承知仕つり候共私し不承知に御座候と貴人高位の挨拶も辨へず事も無氣に言拂ひしかば采女正殿内心には可愛く思はるれ共故意と聲を荒らげ大老の御前無禮なり彌治郎罷り立と顔色を變じて見えけるに彌治郎猶も頭を下げ何程御望み成れても他家へ仕ては武士の一分相立申さずと勿々痿む氣色なければ長重殿堀部を磔と白眼れ推參なれ彌治郎陪臣の身として貴人に恐れず再三の過言大老に對し無禮の振舞手討に致すぞと席を打て忍られけれども彌治郎少しも身を惜む様子なく御手討に相成候は臣が望む所強て他家へ奉仕致せとの儀に候へば速かに一命を捨る所存に御座候と更に憚る所なく申ける眞に豪毅朴訥は仁に近しと堀部が忠義を采女正殿にも深く感心あると雖も酒井殿の面前なるゆゑ彌々怒られ主命に背く法外の匹夫其儘に捨置難しと既に手討にも見えければ酒井殿は采女正殿に向ひ給ひ是は怪からぬ御立腹何條御手討に及ぶべき堀部が過言も誠實より出る處なれば何ぞ某し是を咎ん一命を捨てても他を顧みざる心底昔し本多忠勝が秀吉に望れし時も斯やと思ひ合され天晴の忠臣強て某し所望せしは誤りなり堀部が如き者又外に有べからず扱々無類の忠臣斯る名士を一旦の怒りに依て猥りに害を加へ給ひては諸人の嘲りと成べし必ず短慮の振舞御無用なりと挨拶ある中堀部は次の間へ退きけり然れば酒井殿も大老の權威を以て懇望し永く召仕はんと直談に望れし處長重殿返答なき中に堀部席を進んで誠忠の意地を立しに依て雅樂頭の思慮は悉皆く相違せり采女正殿是を聞て是はく存じ寄ざる大老の御挨拶痛たみ入り候なり渠は元來賤き者に候へども今度の勇功に依て格式を取立剩さへ貴君の御召に預り冥加至極に付如何にも重禮を盡すべきに却て高位を恐れず失禮に及びし段長重に於ても申上べき様なく近來赤面の至に存じ奉つる

の所御挨拶成下され彌々恐縮仕つり候なり卑賤匹夫の不調法萬事某しに免せられ下さるべしと叮嚀に述べられ何となく席も白けて見えければ雅樂頭殿も氣の毒面に先刻より無益の儀を申出甚だ興を失なひ候日も稍晩景に及びたれば猶打寛き終夜寛々御物語り致すべしと有けるを采女正殿愈々詞を正し夜陰の酒宴は左右禮義を失ふと申せば重ねて參館仕まつり今日の御禮申上べしと暇を告て退座の體に見えけるにぞ酒井殿も老人の長重殿長座の事ゆゑ押して止めんも迷惑ならんと思はれ然らば御勝手に歸宅なさるべし今日は何の風情もなく不調法の至御用捨に預かりたしと挨拶あれは采女正殿にも厚く禮謝に及ばれ早々自分の屋敷へ歸られけり斯有し程に酒井殿には今日の思慮残こらず相違けるを殘念に思はれしにや長重殿の嫡子内匠頭重直殿の代に至り播州赤穂の國替を言付居城の地へ追退けしも淺野家へ恥辱を與へんと計られしに淺野家の老臣大石頼母才智の者故境普請を願ひ出し難なく一城を築造し赤穂へ移られしは天晴淺野家の美目と言べき而已然ば采女正殿には酒井殿亭にて聊か難澁の處を堀部彌治郎酒井殿の權威を恐れず進み出誠忠の心より誠る過言に及びし事長重殿感心有しと雖も酒井殿へ對し遠慮もあれば態と表向には堀部が無禮を怒り暫く閉門申付られたり然れども出勤の節百石加増有ければ彌次郎愈々怠りなく忠勤を盡し長重殿老死の後には家嫡内匠頭へ仕へて堀部も終に老死なしたりけり

黒田權左衛門不行跡の事井堀部彌太郎異見の事

然るに堀部彌治郎は三百石を領し長重殿長直殿二代に仕へ老年に及ぶまで猶も精勤なしけるが病死の後子息彌兵衛金丸家督を繼父に劣らず義氣盛んの勇士にて赤穂へ引移りの節も家老大石頼母に心を合せ誠忠勇敢擲なければ内匠頭殿寵愛あり其後三代目采女正長友殿四代目内匠頭長矩殿等に仕かへ番頭兼帯にて國元赤穂に勤仕せしが父に勝りし強氣の勇士なり然りと雖も武を先にして不骨第一に物堅き事父彌次郎に百倍せし故一家中にて二代石白なりと異名を取

し評判の男なり其ころ彌兵衛が妹の子に黒田權左衛門と云者あり屋代越中守殿に奉公しける處越中守家督の男子なく知行召上られ家名斷絶に及びしかば一家中散々になる中に黒田權左衛門が母方の伯父なるゆゑ赤穂に來り彌兵衛に便り淺野家へ奉公を望みたり然れども物堅き彌兵衛なれば誠實の性根を見届げざる中は大切の勤めには出し難し我は是まで主人へ對し不奉公せざれば權左衛門に過ちあるか不奉公の筋あらば主君へ對し不忠と云我までも面目を失ふ道理なり先權左衛門が行跡に依て吹擧もなさんと何となく甥の心を試し居たるに權左衛門は斯とも知らず始めの程は至つて物堅く萬事慎しみ居たりしが家内の者心安くなるに隨ひ生得行跡正しからざるの者なるゆゑ我が身指たる用事なきを幸ひに徐々川狩などを始め又は端唄三味線遊藝は申に及ばず部屋に居る時は茶碗酒に我を忘れ下女端下に猥りが間敷儀等言懸正體もなき有様なるに彌兵衛の妻女を始め嫡子彌太郎妹のお照まで權左衛門が不行跡を氣の毒に思ひ居たるを黒田は少しも構はず剩さへ鎗持草履取を相手とし枕引角力などに日を暮し夜に入ば博奕に夜を更し朝寢に己が身を持崩し武士の作法少しもなく散々の身持ゆゑ家内の者目に餘り行末如何と案じしに物堅き彌兵衛夫婦と見より權左衛門を居間へ呼付嚴重意見を加へしに只々畏まり候と誤り入ての承知の體ゆゑ彌兵衛も其儘に過せしが權左衛門は伯父の異見に五六日は身持も直り隨分實體に見えけると雖も元來情弱者故彌兵衛の眼前ばかりにして又々例の持病起り下女を嬲り酒興に乗じ妹お照を捕へ人目も恥ず無體の戀慕を言懸などする故彌太郎兄弟始め下女下男まで權左衛門を爪弾して疏みけり然れども黒田は好色候智の無分別者なれば己が身持悪きを知らず我が浪人を侮りて家内の者の無禮をなす事奇怪なり何條渠等遠慮すべきにあらず追付當領主へ召出され再諸士の列に入らば其時こそ思ひ知らすべしと彌兵衛が城中泊り番の節は親子兄弟並居處も憚らず甚だ尾籠の振舞をなし下女が高聲何れも面を赤らめ彌太郎兄弟居るにも居られず顔を反ける程のことなり因て彌太郎は何分見兼權左衛門を一間へ招て若輩の私し斯様に申すはおこがましけれども御互ひに親族の心安きに無禮ながら申上るなり下女などを捕へ給ふは眞の座興とは存じ候へ共

餘りに見苦しき有様尤も一通りは御座興と申べきが只今の御振舞言語同斷なり私し儀は苦しからず候へ共母へ對し妹の手前近頃氣の毒に存るにより親共其事を承まはらば勿々聞捨には致すまじ然し今晚は當番にて不在こそ幸ひ以來は御心を付られ尾籠の儀御憤み下さるべし斯申上るも親族の中なる故其許様へ恥辱を與んなどと云私しの心底にあらずと或は論し又は歎き他人に聞せぬ諫言は流石に彌兵衛が嫡子なり權左衛門は思ひ寄す喙背し黄なる分際にて我に向ひて諫言立こそ奇怪なれ汝一討にせん者と心中には急立しが黒田は邪智深き曲者ゆゑ如何にも閉口せし體に面を和らげ其許一族の好身を思はれし御異見の段千萬辱けなく委細承知致したり知ず酒興に乗じ尾籠に及びし段實に申譯なし其許始めの思召も恥く面目を失ひし仕合畢竟時の座興に乗じ過ぎざれば萬事は宜く御母君へ執成穩便になし下され此上とても何がな御心添御頼み申入ると邪智を隠して詔ひつゝ口には言ど心中には汝此遺恨何時かは嗜し吳んと怒たり彌太郎は其身若輩と云親族の權左衛門承知の挨拶する上は別條有まじと喜び乳臭き口を以て申せし儀を御咎めもなく御聞入下され私に於ても大慶仕つると己れが廉直に比較べ權左衛門が惡心を知らざることを残念なれ

黒田權左衛門惡心増長の事并堀部彌太郎横死の事

然程に黒田權左衛門は彌太郎が眞實の諫言を己が邪智に迷ひて大いに憤ほり叔父彌兵衛が此程の異見も皆彌太郎が讒言ならんと一圖に遺恨に思ひ今斯浪人すれども我も黒田權左衛門彌太郎如きの青二歳に追廻され剩さへ聊かの儀を威稜しく己が前へ呼付家來などを戒しめる如く恥辱を與へしこそ奇怪なれ何卒して此無念を晴さんと種々工夫を運らしけるが所詮彌太郎を人知れず殺害すること近道ならめ幸ひ叔父彌兵衛は泊り番ゆゑ今宵の中を過すまじ渠を打て當地を立退江戸へ出て奉公を稼ぐべし何ぞ大丈夫たる者鬱々として人の下に膝を屈するの理あらんや後るゝ時は人に制せられ先んずる時は人を制すと此控々すべき處に非ずと己れが懦弱の心は知らず人を恨み恩を忘れ堀部の家内を飽

迄眼下に見なし罪なき彌太郎を害せんとする人非人なりと雖も元來奸智の曲者更に面に顯はさず斯て日も暮に及びし時黒田權左衛門は何氣なく彌太郎に向ひ今宵は殊の外淋しければ久振に將基にても始むべしと云に彌太郎は元來病身にて強氣を好まず手跡連歌の道などに心懸又將基は其頃家中のさし人なるゆゑ如何様徒然なれば憂晴しに然るべしと權左衛門が巧みと知らざれば餘念なく勝負を争ひ深更に及ぶ迄覺えず數番を指し居たり彌兵衛の妻女も随分發明の人は云ながら黒田が邪智は夢にも知らず常の慰みと思ひ一間に入て臥みしにぞ家内の者も終日の草臥に皆々部屋に入と前後も知らず寢入りけり彌太郎も數番の將基に心氣を勞らし何となく物淋しく覺ければ殊の外夜も更たり後は明日勝負致すべし其許にも御休みあれと辭退に及ぶを黒田は猶も急たる體にて御道理には存ずれども只今の勝負何とやら殘念に存じ候今一番さし給へ是にて相止めべし御苦勞ながらと駒を並べ勸むるに彌太郎は頻りに眠氣を催しけるゆゑ先刻より氣分も宜しからず何分御用捨下さるべしと達て斷りを黒田は是非なく然様ならば如何とも仕つらんと飽迄欺き互ひに別れて臥みける權左衛門は己れが巧み充分に謀り課せ今は心安しと部屋に入て入用の品物を取集め風呂敷包みに用意なし四方の寢息を窺ひ指足拔足して忍び出家内の者に心を配りながら難なく彌太郎が部屋に指懸り襖を明て様子を見るに前後も知らず寢入りたり權左衛門仕濟したりと笑を含み密と敷居の内に入て彌太郎が枕元へ忍び寄一刀を抜き放し寢息を窮ひ水も溜らず首を打落しけり嗚呼彌太郎虚弱なれ共宵より夫と知るならば花の盛りの若者なり斯闔々と討れまじきに黒田如き人非人に敢なく殺害されしは哀れと云ふもおろかなり黒田は首尾能彌太郎を打放し家内の者の知らぬ間にと血刀を押し再び指足して自分の居間へ立歸り用意の風呂敷包を脊負勝手を窺ふに若黨下郎には寢入り權左衛門は庭の戸開けて逃ださんとすれども鎖り能錠を捻切らば音のすべし見付られては一大事と心も心ならず然ども飛越んには癖は高し如何ともする事能はずさしもの惡黨も途方に昏て居たりしが明朝は彌兵衛の退出早迎ひなれば供の若黨の出行し跡より逃退ん事屈竟なりと思慮を極め跡へ戻りて小便に出たる風情になし故と高く咳拂ひして己れが部屋に立歸り夜の明るを待たるは大膽不敵の曲者なり

堀部彌兵衛老練勇氣の事并黒田權左衛門最期の事

然るに彌兵衛金丸は例の如く本丸へ出勤なし終日役向の用事を果して日も暮夜詰も引しかば臥床に入て休けるに稍丑滿過る頃不圖眼を覺しが何となく頻りに胸騒して動氣常ならず彌兵衛は強氣の者故然まて心にも懸ず其儘寢入りんとすれ共右左に神氣穩かならざれば我が身ながらも何分合點行ずと起上り四邊を見廻すに何も別條なし扱は城中に狐狸の類ひ隠れ居て我を欺くと見えたり憎き畜生が所業何程の事有ん目に物見せて呉んずと枕元の刀追取鯉口を寛げて眼を配ると雖も更に一物も見えざりしかば必定戶外に居るならん人にこそより堀部彌兵衛金丸なるぞ如何なる變化鬼神なりとも怖るべき某しならずと獨り言して手燭を取り雨戸を開きて透し見れ共是又何の妖き事もなく因て猶縁より飛下り四方を探し見るに是ぞと思ふ者もなく唯遠寺の鐘のゴウ／＼と響き鴟鵂の啼に鳴聲より外に不思議のものも無ざしもの彌兵衛も不審晴す天を仰げば衆星赫々として秋風肌えを徹し哀猿叫んで悲しみを催しけるにぞ是凡事にあらざと臥床に歸りて暫時眼を閉神氣を落着再び眼を開きて四邊を見れども何も變りし事なし彌兵衛今は詮方なく座を組て思慮するに若年の砌りより斯異しき事を見ず城中に變なければ我が家に必らず變あらんか何にしても心得難し早東雲にも程近ければ明なば早々宿所へ歸り事の實否を糺し見んと夜具を疊んで葛籠に入履物取出し身拵へして夜の明るを待たりけり惣じて宿直する武士は葛籠其外夜具包み旅中には挟み箱の中等へ草履草鞋の新らしきを入れ置事は昔しよりの通例守る處にして是火急の用に立てん爲なり別して堀部は堅物き勇士なる故失念なく用意せしとぞ誠に親子の縁程深きものは無吉凶とも必ず驗有と云昔曹參山中に入て薪を伐しに其友留守へ來りし所へ母は我が子を慕ふの餘り自ら小指を嚙しに山中に在曹參が胸中轟きしかや彌太郎が變死も遠き城中の父が心を動せしも理り也既

に夜明にもなりしかば堀部彌兵衛は相泊りの馬廻り田中清九郎と云者に様子を語り近來無禮には存ずれども拙者は火急に歸宅致すにより同役奥野將監參らるゝ迄宜しく御頼申なりと日來に似合ぬ彌兵衛が折入ての頼みなれば清九郎も豫て堀部が誠心は知りたる事ゆゑ御勝手に御歸り成るべしと快よく受合たり彌兵衛は大いに悦び城を出や否や足をばやめて歸り來るに留守宅にても今朝は早歸りの交代ゆゑ遅なはりて御叱りを受まじきぞと平常よりも早く若黨中間起出て支度をなし出迎ひに出ければ權左衛門家來の出入を待兼時刻遅りと逃出し足に任せて走りしが堀部は未宵の奇怪を不審く思ひ道を急ぎて來懸るを彌兵衛の家來も主人が物堅きを心得居れば早く迎に出ける處思懸なく彌兵衛に行き逢しかば南無三遅かりしやと其所へ躊躇るに後より來りし黒田權左衛門は是を見るより大に驚き道を違へて一目趁に逃出せども非道の悪人天の罪する處にや彌太郎を害せし時の血汐衣類に懸り左の袖より肩先迄朱に成しを更に心付ず脇道へ逃行しを氣早き堀部は警りと見るより合點行ずと聲を懸夫れへ參るは權左衛門ならずや早朝より何方へ行くぞ用事あり暫く待れよと呼止れども權左衛門は爰ぞ大事と一生懸命聞ぬ振にて走せ行を彌兵衛は愈々不審り續いて後より追懸つゝヤヨ黒田待れよ權左衛門止まれと呼はりながら鎗追取て鞘を外し追ひ駈たり家來ども様子は知らねども後れ馳に馳着る中に權左衛門運の盡にや礮と蹶き倒るゝ處へ堀部は追着き吟味せんと思ふ間に權左衛門は最早退れぬ處と起上り様彌兵衛に切て懸るゆゑ堀部も今は堪忍ならずと繰出す鎗は急所を除て弓手の高股充分に突貫けば黒田は堂と尻居に倒れて蠢めくを彌兵衛は怒りの聲を揚汝れ先程より再三詞を懸ると雖もさらに返答もせず走るのみか汝が衣類の血汐の染りしは必定人を害せしに極まりたり然れ共事に依ては討果すも武士の習ひ尋常に名乗るべきを只管に身を遁れんとすこと甚はだ卑怯の振廻なり汝は定し非義を働き双傷に及びしならん未練の事あれば某し迄も武道の恥辱と家來を呼寄て様子を尋ぬれども何の譯も知らざれば早々宿所へ歸りて様子を聞糺し來るべしと兩人の供を追歸し猶も黒田を吟味する中堀部の家來は急ぎて屋敷へ歸り途中にての様子を物語りしかば堀部の内室は漸々起出此事を聞

て甚く驚き先彌太郎を起すべしと一ト間を開き見るに無慚や彌太郎首は側に落ち居たるにぞ下女が高聲妻女の驚き妹も走り來り是はとばかりに仰天して家内の愁傷言語に述べ難し歸りし家來も暫時惘れて居たりしが又引返して彌兵衛の處へ馳着彌太郎が變死の趣き斯様くの體裁なりと知らせけるに剛氣の彌兵衛は愈々怒り悴彌太郎を手に懸しは此奴なり察する處尋常に勝負もせず寢込へ忍びて討しと見えたり斯る卑怯の大悪人我が子の恨みを晴させんと鎗取直して散々に突貫きしに權左衛門は一言の答へもなく苦しみ叫んで死したりけるは天罰の程恐しき堀部は直様彌太郎が變死の趣き且權左衛門を討留し様子等若黨を以て大目附へ訴へしに即刻檢使として大目附間瀬久太夫其の外立會にて詮議ありし處彌兵衛方の寄留人と云別に手數の掛事も無きにより兩人死骸早々取片付申付られ事故なく相濟けり一家中の者も彌兵衛が平日の心掛宜しき故堀部が計らひを皆々感じけるとなん

堀部彌兵衛江戸出府の事并寺田藤十郎孝心の事

然程に堀部彌兵衛金丸は只一人の子息彌太郎が虚弱なるも丹精にて漸々成長せし處黒田權左衛門が悪意の爲に變死せしゆゑ日來の強氣も少し撓み親子の愛着忘れ難く日々鬱々として暮しければ妻女が愁歎妹娘お照の紅涙一入袖をぞ絞りける又召仕ひの男女は彌太郎が平生の恩義に感じ屢々是を言出しては哀れを添けるゆゑ流石の堀部も表に勇氣を張ると雖も心中思ひ深きにや其後は出仕を止て引籠りけるが徒然の慰みに古しへの軍書を見たりしに大丈夫たるもの門を出ては妻子を忘れ敵に向つては身を忘るゝとの言語に至つて忽ち勇氣を發し武士たる者奚ぞ我子の愛に溺れ大切なる勤仕を怠らば主君へ對して不忠此上なし女々しき此程の有様諸士の思はん事も面目なしと心を離へし出仕せしは流石に日來の義心爰に顯はれ未頼母敷く見えにけり城主内匠頭殿此義を聞及れ甚だ感心せられ堀部が胸中を察して江戸留主居役を申付られしかば彌兵衛は愈々面目を施し早々退出して江戸表へ發足の用意にこそは及びたれ此江戸留主

居役と云は屢々登城して將軍家の重き役人衆へ應對なし公儀へ對して主人の勤方を承まはり何事も公用を引受任ずるゆゑ倍臣にても格式宜敷武士の規模とする大切の役儀なり武鑑にも姓名を載せ家老用人の次とし御城使とは此事なり斯る大役を蒙りしかば彌兵衛も愁傷を忘れ此忠義天の恵み給ふ處なりと喜悅の眉を開き家内残らず江戸表へぞ引起しける然れども彌兵衛が妻女并に娘お照は住馴し古郷を離れ知らぬ東都へ赴くこと女心に左や右と思ひ過しもありながら夫の出世を力にて馴ぬ旅路も朝夕に樂く道も抄取つゝ程なく江戸へ着たりける然るに留主居役は彌兵衛が日來の不骨にては公邊の御用向伺ひ等物堅く偏屈過て何とて覺束無き様に思はれし處元來彌兵衛は才子故此度主留居役申付られしより工夫を運らし國元に在し頃の物堅きを止主人同席の留主居仲間へも随分丁寧を盡し役目大事と萬端慎み勤めしかば公私ともに至て評判よく次第に懇意も出來内匠君殿公邊へ對しての勤向至つて都合よく行届きしかば愈々君主の心に適なへば天晴堀部が働きたり然れども彌太郎横死の後には家を繼ぐべき男子なければ妹娘に養子をなし往家督を譲らんと懇意の諸士へも頼み置人柄を聞合せけれども彌兵衛は武邊の心掛厚く義は鐵石の如き士ゆゑ其身貧賤なりとも文武に秀て第一信義を守るものと撰みしかば兎角に長し短しにて未だ相應の人物あらず彌兵衛頼りに其人を得ん事を心懸てぞ居たりける夫は扱置遠山三郎四郎實斷絶の節林平治右衛門に討れし寺田與右衛門の子息藤十郎は生來虚弱にして力量なく劍術も又未熟ながら其志ざしは少しも屈せず假令武藝は熟せずとも古へ漢の李廣は僅九歳の時だにも親の敵を討んと辛苦を厭はず三日三夜山谷を駈廻り惡虎と思ひ放つ矢の念力岩石に立しと云り況や我は廿歳を越ながら少年の李廣に及ばざる事のあらんや敵平治右衛門何國如何成鐵門の中に隠るゝとも亡父の仇敵やはか安穩に差置べきと孝心の勇氣日來に倍し浪々の難澁を厭はず尾羽打枯し衣服大小見苦しくも一向心に掛す知己の方へ老母を預け炎天霜雪を侵して晝夜父の敵を尋ねしは天晴健氣の若者なり

寺田藤十郎敵に出逢事并林平治右衛門場所約束の事

然共時の至らざるにや藤十郎は深編笠に面を隠し江戸市中は勿論近在近郷迄も馳廻り心を付て窺へども未だ敵に出會ず此上は神佛の力を借ずんば本望遂難しと我産神なる市ヶ谷八幡宮へ日毎に參詣し猶も敵を尋んものと藤十郎が切なる孝心神も納受在ましけるにや例の如く朝疾出て敵を尋ねながら麴町通りより四ツ谷御門の枳形へ來懸る折から向ふより浪人體の者五六人仇口交りに話し來るを能々見るに林平治右衛門なりしかば藤十郎は大いに悦び年月尋ねし亡父の怨敵今日爰にて出會して此來信じ奉つる弓矢神の加護と覺えたり飛び懸つて本望を達せんか待ち受けて討べきやと勇み進んで居たりしが又能思慮を廻らすに今敵には六七人の同道あり彼等加勢なす時は輕擧つて討ち損じ只喧嘩口論と云れ無法の沙汰に及びなば生涯の恥辱なり併し現在尋る讎を助太刀有とて見遁すべきに非ず只潔よく名乗懸て討るゝは運命なり天道順を助け給へば亡父の讎討得ざる事の有べきかと身繕ひして待懸たり斯とも知らず平治右衛門は見付の橋臺へ差掛るを藤十郎は編笠投捨突と寄て大音揚珍らしや林平治右衛門汝我が父を殺し主家の用金を奪ひ取立退し人非人覺悟せよと名乗蒐られ思ひ掛なき折からゆゑ平治右衛門は大きに仰天せしが元來不敵の曲者なれば是れを色にも出さず是れは奇怪なり藤十郎其方が親與右衛門は法外の惡言を罵り何分聞捨難きにより止を得ず討果せしが用金を奪ひしなどは跡形もなき不禮の一言斯往來繁き途中にて諸人の見聞許し難し然れども其方心得違ひにもせよ我を敵と付狙ふ孝心の優らしさに今日は用捨致し遣す重ねて斯る詞を吐かば父同様同じ双にかくべきぞと嘲笑ひ藤十郎が虚弱なるを飽まで見下しければ寺田は烈火の如くに憤怒り汝主家の大變を見ながら厚恩を忘却し我が父を害したる人面獸心無益の間答せんよりは尋常に勝負せよと鯉口寛け拳を握りて詰掛たり平治右衛門も瘥ず故意と詞を和らげ出來されたり藤十郎我を討んとて定めし心をも盡されしならんに圖らざる今日の出會又得難きとの心よりは是非に勝負と

望まるゝは貴殿若輩の血氣に逸り前後の思慮薄きゆゑなり我思ふに此所は公儀の御門際といひ往來も繁く場所悪ければ勝負は成難し殊に同道の方々もあるにより貴殿の爲にも宜しからず夫とも達て勝負とあらば是非もなしと雖も後日何方にても貴殿の望みの場所にて某しと貴殿只兩人差向ひの勝負を決せんは如何に是御身の爲にして我が遁辭に非ず篤と思慮を定て返答あれと當座の理をせめて申けるにぞ勇み逸りし藤十郎も平治右衛門が詞の中に場所柄悪きゆゑ爲にならずと公儀を憚かる云分何様渠が云如く見附先にて双傷に及ん事は公儀を怖ざるの罪あれば討果しても後難計り難く道理の次第なり然共奸智の曲者爰を遁れん爲欺く方便ならんかとは思へども元敵討の願ひも叶はず愈忽の勝負は大死の基なれば此上は場所を取極め一先此所は別れて渠が後を慕ひ宿所を見届け置くならば後日如何様にも成べしと思無念ながらも林に向ひ亡父の仇見遁すべきに非ずと雖も公儀を恐れ場所を約して尋常の勝負を望まるゝ事は貴殿に似合ぬ神妙の申分なり然あらば貴殿の望みの如く今日は見逃すべし依て高田の馬場は究竟の所なるにより明日早天に間違ひなく同所へ出會申しなん必らず卑怯の振舞有事勿れと言葉鋭く申ければ平治右衛門大いに悦びたる體にて何條某し貴殿の如き柔弱者を恐んや不審ならば我が後を慕ひ有家を見届け置くべしと言捨別れて宿所へ立歸りたり因て藤十郎は見え隠れに後を尾有家を見届け置かば萬一異變の節は踏入て討取んと密かに後を慕ひけり。

高田馬場敵討評判の事并林平治右衛門返り討を巧む事

扱も寺田藤十郎は亡父の怨敵たる林平治右衛門に圖らず出會既に双傷に及ばんとせしに敵ながらも平治右衛門は公儀を憚り重ねて出會場處を望みし事神妙に聞えしゆゑ流石勇みし孝子も公儀への恐れなきに非ず殊に四五名の同道人助太刀あらば容易く討得難く覺えければ篤と思ひを廻らし出會の場所を約して立分れしかば先刻より追々に集りし見物老若種々に評判しながら我が家へ歸りけるゆゑ是を聞傳へ云傳へ物見高きは江戸の人心武家は云に及ず是は

珍らしき見物なりとて人々翌日を遅しと待かけて道の遠近を厭す我も一と高田の馬場へぞ集りける就中赤穂の家土堀部彌兵衛金丸は壯年よりも武邊を磨き義勇第一の士なれば此噂を聞よりも甚だ悦び諸士太平の化に浴し逸樂を先んじて武邊の壯士も追從輕薄を己れが業と心得武を好む者稀なるに未だ若輩の身にして亡父の敵を討んとする條誠に無双の孝子なり斯る勝負を見置ずんば有べからずと歳は取ても強勇の堀部前日より同役へ當番を頼み合置未だ夜明前より若黨中間を引連て高田の馬場へと急ぎけり實や一大虚を吼れば萬犬實を傳ふとの譬へもあるに況てや是は實事なれば街の風説愈々高く諸大名入込て武家多き東都にも斯様の勝負は珍しとてさしも廣き高田の馬場も人の山をぞなしにける其中に追々夜も明放れ日も昇る頃になれども寺田藤十郎を始め林平治右衛門も出來らず是は如何に敵討の評判は虚言かと待に日も早辰刻過んとせし頃までも双方共に出會ざれば見物の人々は退屈なし如何の事にやと種々に風説しければ堀部も群集に交りて區々の噂を聞何様聞しとは違ひ悠々としたる敵討かなと獨り言して待居けるに頓て寺田藤十郎今日こそ年來の敵を討て父の鬱憤を晴さんと尾羽打枯し衣服も汚れ見苦しかりしを屈せず垢付し袷に木綿縞の袴の股立高々と引上澁染の鉢巻を縮草鞋の紐を結び切然も勇間敷く出立たり是を見るより扱は噂の實なりけりと諸人何れも顔を打詠るに日に寔れたれ共如法柔和の人相なり相手は如何と見る中に林平治右衛門は黒羽二重の紋付に大縞の馬乗袴を着し白布の鉢巻をし白銀作りの太刀を横たへ裾引絡げて勇しく同士の若者七八人を引連群集の中を押分肘を張りて出來る體身の丈六尺に餘り青髻ありて憎體なる容貌なり人々すはこそ勝負なれと固唾を吞て見物せり寺田藤十郎は敵と見るより聲を懸如何に林平治右衛門日來の虚言に似合ず能も神妙に出會たり用意能くば率立合て勝負を決すべし但其方より打掛るや此方より仕懸んやと反を打て詰掛たり林は元來奸智に長し曲者ゆゑ少しも動ぜず潔よし寺田藤十郎豫て約せし如く差向ひ勝負して我等も武道の譽れを顯はし出世の便りと思ひしに門弟の面々平日の恩義を思ひて是非助太刀なさんとて視らるゝ通り近來約に背くに似て貴殿の思はく氣の毒なり殊に御邊の如き若輩者我一

人にてお相手にせん事不足ながら孝心に愛て約の如く出来りしとは言へ大勢にて討ち取んは世上の外聞悪く某に於ても残念ながら門人の厚意も黙止難く實に本意なき次第なり不便ながらも觀念せよと己れが武威を顯し詞を巧みに敵の氣を取挫ぎけれども寺田は少しも屈せず事々敷平治右衛門約を背くは其の方が恥辱なり某しに於て何十人の助太刀有るとも恐るゝに足らず無益の論に時を移さんより迅速に立ち合ひ運を天に任すべしと必死を極めし返答は然も潔よき有様なり

寺田藤十郎難戦の事并堀部彌兵衛義勇の事

然ば双方の論談を聞見物の貴賤老若皆林が卑怯の様を憎むと雖ども難討の事ゆゑ誰有て藤十郎の加勢する事叶はず只々拳を握りて控へたり兎角する中平治右衛門は藤十郎が義言を聞て猶豫すべきにあらざれば然は覺悟せよと言様二尺八寸双廣の業物すらりと引抜切て掛るを寺田は心得たりと受流し直に付入上段下段と戦ひしが踏違へ様林が肩先目掛て切込を彼方も然る者翻遡りながら發止と受止め返す刀に横になくればあはや寺田は胴切と視えたりしに忽地閃りと身を翻し打込は電光の如く年來狙ひし亡父の怨敵討得ずんば人に面は合されじと憤聲を發し太刀風烈しく切結ぶ有様は勿々日頃の寺田に非ず勇氣も平常に十倍なし前に有かと思へば後ろに顯はれ飛鳥の如く戦ふにぞ強氣不敵の平治右衛門も孝心の猛威に碎かれ心中大いに驚きつゝ如何なれば渠斯の如く手練せしや然ども我も一流の師範もなす身何程の事か有べきと打込太刀を受流し勇を震つて戦へども佞惡を天の憎む所にや自然と危く視えければ今まで憎し／＼と思ひし見物の面々少し色を直し若者よ其所を付込み此所を打と聲を懸るに平治右衛門が同士の惡黨秋山房右衛門鶴殿平藏笠原右衛門等此體を視て堪り兼助太刀御免と云より早く三方より拔つれ切て懸るを藤十郎少しも恐れずヤア卑怯なり助太刀の面々假令何十人一度に懸るとも思ふ敵を討取らずんば有べからずと踏込／＼四方の刃を受流し切拂ひ手を碎いて戦ふを林は助太刀に氣を得て今まで透りし足を踏直し四人等しく切立たり藤十郎は一世の大事此時なりと前後左右に切拂ひ難はらひ死力を盡して戦へども強惡血氣の若者ども師の平治右衛門を討せじと無二無三に切捲るゆゑ孝心凝たる寺田の腕先も大勢に難立られ既に危く見えたりけり然りと雖も武家にあらざる人々は是を助くべき力なくアレ／＼と聲を立心を冷すばかりなり又士たる人も後日を恐れ或は身をかばひ寺田が加勢する者なければ愈々危く見えけるにぞ義心に強き堀部彌兵衛今此體を視兼汝等我が後を圍ふべし斯る孝士の難儀を餘處に見るは士たる者の恥る處年こそ寄たれ堀部金丸不義の振舞見捨べきかと云つゝ提緒を取て釋に掛其所へ飛込んと勇み立を若黨中間左右に取付是は怪からぬ且那様の御振舞御老體の御身に過ち有ては言譯なし鎮り給へと制すれども彌兵衛耳にも聞入す不甲斐なき汝等義を見てせざる勇なしと袴の裾を搔挟み見繕ひして氣を揉ども若黨中間左右に立塞がり假令且那様は義の爲めにもせよ後日に公儀の御咎め有んも計られず然すれば殿様の御名も出て御屋敷の御爲め宜しからずと無理に止むるにさしも堀部も公儀の御咎めを蒙むりなば主君へ對し不忠也と強氣を押へて猶豫の中に寺田の藤十郎は林が助太刀の爲に切立てられ思はず七八間退りしが然るにても残念なりと獅子の怒りをなし爰を先途と働らけども大勢を相手に助くる味方もあらざれば受太刀四度路になり目も眩も殆ど腕もなまり薄手三ヶ所まで受しかば所詮今は切死と覺悟を極め流るゝ血汐に咽を潤し死者狂ひに働きたり林が加勢多勢を頼みに四方より切立ければ哀むべし藤十郎は邪智強惡なる非道の双に命を落さんと見る者皆肝を冷せしかば堀部は増々切齒をなし爰な人非人の畜生侍士差向ひの勝負もせず只一人の若輩を相手に大勢加勢を頼み返り討になさんとは不道至極の奴們かな弓矢神も照覽あらんに若者を助くる人の有ざるか痛ましき有様やと一人身を揉急りつゝ眼を怒らし拳を握りぢだんだ踏て見居たる所に身の丈六尺ばかりなる浪人體の者深編笠に面を隠し菖蒲皮の野袴を着して長き大小を横たへづか／＼と其所へ進み出敵討の勝負暫らく御控あれ某し双方へ對し知音にはあらね共一言申入度仔細あり御猶豫あれと呼はりながら双方必死に

し切拂ひ手を碎いて戦ふを林は助太刀に氣を得て今まで透りし足を踏直し四人等しく切立たり藤十郎は一世の大事此時なりと前後左右に切拂ひ難はらひ死力を盡して戦へども強惡血氣の若者ども師の平治右衛門を討せじと無二無三に切捲るゆゑ孝心凝たる寺田の腕先も大勢に難立られ既に危く見えたりけり然りと雖も武家にあらざる人々は是を助くべき力なくアレ／＼と聲を立心を冷すばかりなり又士たる人も後日を恐れ或は身をかばひ寺田が加勢する者なければ愈々危く見えけるにぞ義心に強き堀部彌兵衛今此體を視兼汝等我が後を圍ふべし斯る孝士の難儀を餘處に見るは士たる者の恥る處年こそ寄たれ堀部金丸不義の振舞見捨べきかと云つゝ提緒を取て釋に掛其所へ飛込んと勇み立を若黨中間左右に取付是は怪からぬ且那様の御振舞御老體の御身に過ち有ては言譯なし鎮り給へと制すれども彌兵衛耳にも聞入す不甲斐なき汝等義を見てせざる勇なしと袴の裾を搔挟み見繕ひして氣を揉ども若黨中間左右に立塞がり假令且那様は義の爲めにもせよ後日に公儀の御咎め有んも計られず然すれば殿様の御名も出て御屋敷の御爲め宜しからずと無理に止むるにさしも堀部も公儀の御咎めを蒙むりなば主君へ對し不忠也と強氣を押へて猶豫の中に寺田の藤十郎は林が助太刀の爲に切立てられ思はず七八間退りしが然るにても残念なりと獅子の怒りをなし爰を先途と働らけども大勢を相手に助くる味方もあらざれば受太刀四度路になり目も眩も殆ど腕もなまり薄手三ヶ所まで受しかば所詮今は切死と覺悟を極め流るゝ血汐に咽を潤し死者狂ひに働きたり林が加勢多勢を頼みに四方より切立ければ哀むべし藤十郎は邪智強惡なる非道の双に命を落さんと見る者皆肝を冷せしかば堀部は増々切齒をなし爰な人非人の畜生侍士差向ひの勝負もせず只一人の若輩を相手に大勢加勢を頼み返り討になさんとは不道至極の奴們かな弓矢神も照覽あらんに若者を助くる人の有ざるか痛ましき有様やと一人身を揉急りつゝ眼を怒らし拳を握りぢだんだ踏て見居たる所に身の丈六尺ばかりなる浪人體の者深編笠に面を隠し菖蒲皮の野袴を着して長き大小を横たへづか／＼と其所へ進み出敵討の勝負暫らく御控あれ某し双方へ對し知音にはあらね共一言申入度仔細あり御猶豫あれと呼はりながら双方必死に

戦ふ中へ恐るゝ色なく分入く左右の太刀先を止めしは天晴剛の者とぞ見えたりける然れども林が輩らは無益の奴が面倒なる挨拶かなと知らぬ顔して討取仕廻と猶も藤十郎へ討てかゝるを彼の浪人は無體に割入飛懸つて押へければ不法の者共も力及ばず刀を引て息を繼何故の挨拶にやと控ゆるに藤十郎も既に討るべきを浪人の挨拶により萬死を出て一生を得たる悦び是ぞ氏神の助けならんと大息吐て控へたり因て堀部を始め見物の諸人何れも是を見て誠に無双の勇士も在るものかな双方火花を散して戦ふ中へ分け入て挨拶するは義を先んずる處ならん如何なる事を申にやと皆々目も放さず耳を傾ふけ聞居たり

園田安兵衛義勇の事井林が惡黨滅亡の事

然程に彼浪人は林が黨に向ひ各々方の刃傷を先刻より那方にて見聞するに寺田氏とやらには亡父の讎を報せんと若輩ながら武士道を立て尋常の勝負あるは天晴神妙の至りなり然るに各々方以前の意趣は存せねども林氏とやらん差向ひの勝負有べきに只一人の敵に朋友門人等の力を借返り討に致されんとは近來以て非道の振舞なり助太刀の面々も師弟懇意の中とは申しながらも非を糺し合力あるこそ武士の信義にして討討るゝは天運なり何れもの助太刀は強きを助け弱きを討是豈信義と云べけんや正道に迷はゞ武士の本望を失ひ後日の嘲りと成べし併ながら各々方師弟朋友の情捨難く強て合力あらんとなら餘儀なし拙者に於て双方へ遺恨もなく又知音にもあらざれども言懸りし事ゆゑ義に於いて捨難きにより某し寺田氏へ力をそへ各々方の御相手に相成申さんこの儀篤と思慮して返答あれと聊かも怖るゝ色なく述べけるに林を始め黨中のもども浪人が勇氣に恐れ一言の返答もなく茫然として居たりしは見苦しかりし事どもなり見物皆々是を聞て天晴大丈夫當世の勇士かなと思はず啗と譽たりける爰に堀部彌兵衛は最前より林が好惡を惡み身を揉て居たりしゆゑ今浪人が詞を聞て大いに悦び家來に向ひ汝等浪人の挨拶を聞つるや假令身分に上下あるも義を見

て進むは人間の第一なりと家來に示しけるは又有難老人なり斯て林は返討の巧み相違し上義勇の詞の五臟を冷し一言もなく赤面して控へしに鶴殿平藏笠原右衛門秋山房右衛門三澤幸内等是を聞て大いに怒り素浪人の分際にて入らざる挨拶立殊に憎き過言聞捨難し假令天魔鬼神にもせよ只一人の助太刀何程の事か有らん刀序でに打放し鼻明し吳んずと前後の思慮もなく詞を揃へ如何様勇ある詞なりとも我々師弟朋友の情に於て見捨て難し斯相成し上は其許の挨拶に恐怖して此儘に差置んも恥辱なり貴殿は勝手に寺田氏へ御加勢あれ我々其御所望に隨ひ御相手に罷りなり候はん率用意あれと八人互ひに目配せなせば浪人は是を聞て勇しき各々方の返答然も有べし某しも斯申掛し上は少しも辭退致さず御相手に相成べし我長刀を持參せしは一振試ん爲御挨拶に及びしが各々始め諸人の思はくは如何なれば長刀は見物へ預け申さん暫しお待あれ又寺田氏は助太刀の者共は拙者に任せられ林氏へ差向ひの勝負有て然るべしと言置見物の方へ向ひ近來御面倒の至りなれども此長刀暫らく御預り下さるべしと云に皆々は勇ましと思へども誰有て預らんと言者なく互ひに譲り合て果しなく視えける所彌兵衛は聞より浪人に向ひ最前よりの御挨拶天晴勇々敷存るなり苦しからずば其御道具某へ御預けあれ義に進むは勇士の常不肖ながら堀部彌兵衛年こそ寄たれ貴殿の後を固め申さん心安く加勢召れと只一言に氣を勵し事に馴たる老功の挨拶浪人猶々悦び御懇意の御一言先づ以て忝けなし見苦しき鎗道具暫らく御預り下さるべしと持たる長刀彌兵衛へ渡し帶引めて身繕ひ徐々場所へ立出たり堀部は長刀杖に突浪人が武術如何にと眼ばたきもせず見物爲に彼浪人は助太刀の人数に向ひ用意能は勝負致さんと釋も掛ず只袴の裾を取て帯に挟み金剛兵衛盛高が鍛へて双廣の業物中段に構て待掛しは花々しくぞ見えにける寺田藤十郎は思ひ掛なき浪人の加勢を得て再び勇氣を増世話しき場所ゆゑ禮謝の間もなく血刀打振立向へば林も殆んど詮方なく此上は運を天に任せて戦ふべし然れども藤十郎が手練は知れたる事と飽までも侮どり先返り討覺悟せよと聲掛ながら切込を寺田は微弱の若者なれど亡父の讎を報せんと一念凝たる腕先に打込太刀をガツキと請止じりゝと付入たり又彼方には三澤幸内鶴殿平藏佐

佐木與五兵衛等三方より浪人目掛只一打と切て懸るに此方は騒がず心得たりと飛違へて切よと見えしが先に進みし三澤幸内二ツになつて倒れたり佐々木鶴殿兩人は矢聲の下に味方討れ是れは如何と驚きながら隙もあらせず左右より討込太刀を浪人は弓手馬手へと切拂ひ二討三討戦ひしが佐々木が焦つて討込切先閃りと翻して躍り込エイと呼はる聲諸とも與五兵衛が耳の付根より乳の下かけて切下られ二言と云はず死たりけり鶴殿は是に愈よ驚き逸足だして逃げんとするを卑怯者めと云ふより早く後の方より袈裟掛に血煙り立て切割是をば見るより見物は皆一同に聲を揚げ誠に無雙の早業と感じ稱へて止ざりけり

寺田藤十郎父の敵を討止る事并堀部彌兵衛浪人安兵衛を養子とする事

扱又堀部彌兵衛は浪人の働きを見て然も有るべしと打悦び猶も如何と肘を張堅唾を吞て居たりけり此時秋山影右衛門笠原右衛門戸倉文之丞水島十兵衛名川小右衛門は後詰の心得にて平治右衛門の後に詰て居たりしが最早堪らず五人等しく抜連て切掛るを浪人は少しも動せず持たる刀を青眼に取直すと見えしが直と入て眞先なる秋山を眞向より胸板迄割返す刀に水島が弓手の高股切り放せば残る三人必死となり無二無三に切懸を上段下段に受止く通さじ遣じと追捲る體其早きこと猿猴の梢を傳ふが如く脱兎の浪を走るに似たり然れども此三人は林の高弟どもなれば何とかして浪人を仕留んと戸倉は一際躍り上り眞甲目掛て切込を此方は直と身を沈め下より發止と打止れば戸倉が太刀は中天と四五間ばかり飛散たり笠原名川は前後より死物狂ひに切付るを是は優らしき振舞かなと嘲笑ひつゝ切拂ひく一上一下虚々實々只電光の晃めく如く眞甲梨子割車研或は袈裟掛腰車瞬く間に八人まで事も見事に討取しは目覺しかりし有様なり扱又寺田藤十郎は林平治右衛門と人交もせず戦かひ居たりしが助太刀輩らは皆浪人の爲に討死し今は林が力となるべき者なければさしも不敵の平治衛門も大に驚き一世の大事と秘術を盡して切結と雖も寺田も今ぞ一生懸命獅子

の怒りを顯はせば彼方は虎の嘯く如く互ひに死力を盡しつゝ、茲を先途と闘ひたり然れども寺田は元より虚弱の上數刻の戦ひに精神亂れ動ともすれば危ふく見えけるに浪人は血刀引提馳寄て腑甲斐なし寺田氏夫右へ蹴して左へ拔よ其所を踏込打取れと詞に力を添ければ寺田は再三力を得て退る足元踏堪へ火花を散して打合たり林は兎角嵩に懸り延掛延掛斬込ゆゑ亦も寺田は危く見ゆるに浪人今は耐へ兼林が後へ廻りつゝ只一打と見せければ林も手練の功者ゆゑ後の敵に氣を配り自然に隙が見ゆるにぞ寺田は得たりと躍り込一聲叫びて討よと見えしが林が肩先七八寸胸板かけて研下れば林も今は是迄なりとめつた擲りに振廻すを寺田は隙さず踊り越壘み掛て研倒し直様に乗りかゝり亡父の恨み思ひ知れと止めを刺て退けば數萬の見物聲を揚仕たりやゝと譽稱へ暫しは鳴も止ざりけり扱四方の見物は浪人が勇を感じ寺田が孝心を賞歎し思々に散行を寺田は浪人に向かひ敵が奸計に落入十分危ふかりしを通れ年來の本望を達せし事全く貴殿の御加勢に寄處なり此高恩何れの日にか報すべき夫に付ても先刻より取紛れ未だ御姓名を承知仕つらず何卒御名乗下さるべしと兩手を地に著述けるに浪人は會釋なし拙者御加勢申せしにより御本望を達せられしと云に非ず天道不義を憎まるゝがゆゑに首尾能怨敵を討取れしなり是孝心のいたす處にして某し謝辭を受べき謂れなし公儀より御咎めなき中少しも早く當所を立去身を忍び時節を待れて立身あれ無益の事に隙取て妨げあらば詮なき事折も御座らば再會致さん然らばと一言ながら網笠取て行んとするを寺田は暫しと引止め貴殿の詞も然る事なれど斯る御恩に逢ながら御姓名さへ知らずして御別れ申は何とも本意なし是非に名乗給ひねと乞ども浪人首を振義に依ては然も有べしなれども姓名明しては双方後日の爲ならず何國に住居致すとも御縁もあらば相知れ申さんと袂を拂つて立別るゝに寺田も今は強て問べき詞もなく名殘惜氣に見遣りしが頼て林が首を打落し亡父の墓へ手向んと悦び勇んで歸りけり夫れより浪人は堀部に挨拶なし預けし長刀を請取けるに彌兵衛は浪人の働き始終の様子を見て當代の英士とは此人をや云ふべし斯る人に好身を結び武邊を磨くは士の本意なりと賞歎して宿所を尋ねしに青山の宅へ歸る由申ければ彌兵衛は

故意と用向の有體に見せて住所を知らんと同道を望みしが浪人も心能承知なし互ひに武邊の話しに道すがら姓名を尋ねけるに浪人も彌兵衛が義心を感じ某しは越後新發田の浪人園田安兵衛と申者にて豫州西條の城主松平左京太夫殿の家士鹽瀬嘉左衛門は伯父なるゆゑ同人方に罷在中牧野新五右衛門の門爲に伯父を討れし一件より今猶同家に居る事など逐一物語しけるに彌兵衛は彌よ感心して終に青山まで同道なし鹽瀬方へ立寄て互ひに心底を明し是より懇意になりける彌兵衛は日來養子を尋ねると雖ども未だ是ぞと思ふ者もなし幸ひ此の人養子として年來の願望を達せんと計略を運らし安兵衛を養子にぞ望みける

世俗堀部安兵衛が高田の馬場の鬻討に伯父菅野六郎右衛門の敵なりと言傳ふ其伯父六郎右衛門或日安兵衛の方へ來り我一友と口論に及び終に果し狀を付られたり因て今より其場所へ赴むくにより我不幸にして討死せば汝よろしく家族を扶助すべしと言置て出行を安兵衛聞て伯父人の死に赴むくを餘所に見なす法や有とて是を追かけ高田の馬場へ到りしに敵は早くも待受け互ひに同道人の助太刀は頼むべからず差向ひの勝負をこそ望むなれと言ゆゑ六郎右衛門道理なりと一人進み出率とて刀を合せ戦ふに敵危ふく見えければ敵方二人の弟進み出之を助け安兵衛見るより大いに怒り卑怯なる汝等が振舞かなと一刀を拔放し飛入よと見えしが忽地二人の助太刀を斫倒したり然る處敵の下僕後ろより忍び寄物をも言ず切付しに安兵衛運や強かりけん帯にあたりて身に傷付ず心得たりと身を蹴しさま横に拂ふに下部は胴斬となりて亡たりけり此時伯父を顧りみるに敵味方とも數ヶ所の手傷にて兩人踉蹌ながら戦ひ居たり馳寄て敵を討止首を搔落し伯父の介抱なせしが六郎右衛門は深手に活難きを知りて自殺しけるにより泣々亡骸を棺に納めて假に葬りしと是より安兵衛の名四方に轟ければ堀部彌兵衛其勇武を愛して養子にせしと云

又一説に彌兵衛の妻娘とも雜司ヶ谷鬼子母神へ參詣の折から高田の馬場に來たりし時果し合ありて一人の老人を數人の侍士寄集りて打取心地よしと幕張の内にて各自酒宴を催し居たりし所へ一人の壯士馳着伯父の敵と名乗かけ其所へ乗入らんとす彌兵衛の妻女は女ながらも氣象の者ゆゑ娘が腰帶を解せ安兵衛が禪に貸與へ鬻討の體を見物して立歸り夫彌兵衛に此事を語り夫より安兵衛の居所を尋ねて養子にせしと云。

又一書に彌兵衛は高田の馬場の働きを聞及び己實子なき故斯る勇武の者を養子とせば天晴君へ忠義を盡されんと思ひしかども手寄なければ當時安兵衛の寓し居たる牛込なる劍術の師の許へ到りて卒爾ながら四五萬石の大名の家中にて食祿三百石を領する者頃日御門人安兵衛殿が働きを聞及び養子になしたしとの望あり遣はさるべきや否や内意承まはり度斯は罷り出たりと言ければ隨分承知致すべし然れども只今は留守なれば歸り次第當人に申聞せんと云人の世話なりと申ければ安兵衛拙者儀江戸表に親族もなく身貧なるゆゑ至極望ましく候へ共先方の事を篤と問糺さざれば不都合なりと云ふに然らば右彌右兵衛の方へ赴きて宜しく談合すべしと申せば安兵衛は彌兵衛の方へ到り案内を乞安兵衛参りたりと云入ければ彌兵衛は大いに喜び座敷へ通して對面なし彌々養子承知なるや養父母は老人にて主人よりの宛行ひは先達て其許の師迄申置たる聊かも相違なしと云に安兵衛も喜び仰の趣き承知せり併し某しは身貧にして何の支度もなし先方を右承知なれば兎も角もといひければ其儀は腰のものさへ持參あれば外に何も入用なしと申にぞ安兵衛然らば御世話願ひたしと云ければ彌兵衛重ねて其詞に偽りなきかと押返して問けるに如何にも相違なしと答ふるを聞彌兵衛はたつて勝手に入衣類大小を携さへて再び出來り養子致す者は則ち拙者なり主人の高も五萬石が食祿は三百石今日より某しが悴なれば左様に心得られよと云て率此方へ來るべしと勝手へ伴ひ家内へも引合せければ安兵衛も餘りの事に驚きしが頓て父子の契約をなしけり此時彌兵衛曰く且妻女は衣服に譬たり若心に適はぬ事あらば某しへ申に及ばず早速追出し心に應じたる者を婦娶るべしと言又娘にも

此旨申付婚姻を整ひしと云。

右は本書と事故の異なる所謂を考ふるに伯父鹽瀬嘉左衛門の警牧野新五右衛門主従を澁谷長谷寺の門前にて討取し事ありしが其後高田の馬場にて寺田の助太刀せし時の評判高きにより夫を伯父の讎なりと後人の作意せしものならんか

又云安兵衛は元越後長岡の人にて舊氏は中山なりと是また本書に載る處に異れり然れども越後新發田の城下長徳寺と云寺に堀部安兵衛の墓あり又同所の酒造家相馬善右衛門と云る者の方に安兵衛所持の印籠あり箱の木地は即ち右長徳寺の松の枝なりと云是等を云て考ふれば世に傳へる處誤り多しと云べし

安兵衛も彌兵衛の義心を感じしかば終に承知して同人の智養子と成堀部安兵衛武庸と名乗淺野内匠頭殿へ仕へて忠勤を盡し祿二百石を賜り年來の本意の達したり然ば淺野家に勤士中彼の寺田藤十郎に出會して兄弟の約を結びし藤十郎を松平左京太夫殿の家來として益々懇意を盡しける豫州の家中に寺田七郎右衛門と云は是なり其後淺野家騒動の後安兵衛は大石の黨に入夜討の砌りは拔群の働きをなし翌元祿十六年二月四日伊豫の松平家にて切腹に相成しは世の人皆知所にして古今類ひ少なき勇士なり

敵討高田馬場終

根 笹 の 雪

是は羽州龜田の在に住する不意軒草廬と申講師にて候誠に今程は繁昌榮んの御府内と聞しにより最となつかしく今年初て参府牛込邊に於て不都東軍書等講釋をもようし候處に何方此方の御最負を以て取續きしやべり候所或御方様根笹の雪の實録を御好みなされ候に付此度倉講侍り候然れ共根笹の雪數多寫本有といへ共相違の事見へ候なり野夫が撰み置候處の根笹の雪は元白川の侯士何某々恩借して實録に添刪して撰み候へば何ぞ違ひ候事有んや疑ひ有べからず扱亦近内に明和風土記並明和嚴秘大全と表題致し候著書を御覽に入度ぞんじ候何れも様御機嫌能御來駕の程奉レ希候先づは今から白川講釋致します

安永三年午龜

龜田在郷

草

廬判

追て御斷申上ます上杉騒動の一件近々著候間委しく相認御覽に入れ可申候明和嚴秘大全は麻布大火の事をのせましたれば講釋高聲成難く兼て御斷申置ます

根 笹 の 雪

目 録

- 一、藤戸大右衛門を清水権左衛門調伏の事
- 一、九景寺が原にて下總守殿鷹狩の事
- 一、同所再び鷹狩の事附り 清水江川に於て藤戸を討事
- 一、松本新左衛門江府に出て碓屋に成る事
- 一、藤戸大右衛門敵討に出る事附り 大右衛門松本新藏兄弟の約をする事
- 一、松本新藏宿所へ歸る事
- 一、藤戸大右衛門諸國を廻る事
- 一、藤戸大右衛門大右衛門と改名大坂居住之事附り 新町錦木殿機が事
- 一、大坂大右衛門關東へ赴く附り 遠州濱松にて喧嘩の事並 同所大信寺の事
- 一、大信寺の飛脚江戸赤坂へ到着の附り 松や十藏病死の事
- 一、大信寺大坂へ文を届る事附り 茨木屋錦木貞心の事
- 一、松本新藏敵討附り 先知安堵の事

征夷大將軍源

根 笹 の 雪

藤戸大右衛門を清水権左衛門調伏の事

夫臣を愛する事 必道有り此街に迷ふ事有べからずとなり唯賞罰を正ふして仁を以て人を愛すべし其道たる事を辨へずして猥りに我に宜を以て稱し愛する時は 必災ひを生ずるのならひなり亦貴賤相共に色慾に長じ邪淫をくわだつる事は是全く害を求るの根元恐れ慎むべきは只此道の街なりときに寛文年中に征夷大將軍家綱公嚴有院殿の御代の比成しが奥州白川の城 主松平 下總守殿の御家中に於て敵討の事有り其由を委く尋る所に清水権左衛門藤戸大右衛門とて譜代の家士有り元兩人は御小姓を勤しもの成しが其親々卒去の後面々家督を繼て領知三百石宛にて御近習を勤めける處に兩人の者共下總守殿殊の外御意に叶て威勢強く一家中に用ひられたり然るに藤戸大右衛門は妻有り清水権左衛門は妻に後れて當時獨身なりされば下總守殿此兩人をば別して秘藏に思召れ大右衛門へは御手鷹を十居預けられ權左衛門には番鷹十居を預けられける然るに此權左衛門は業惡無道の者にして不行跡第一の者成しが藤戸が妻のお瀧事十人にも勝れし生れ付にて心立てもやさしく一家中の評判にも乗る程の女なり是に依て清水は此お瀧に戀慕の心起り何卒して彼れを手に入れんと折々艶書を送りて様々と口説きけれ共お瀧は貞心の者にて一向とんしやくもせず亦はしたなくはじを興へんも情なしと唯おんびんにして自ら事は藤戸大右衛門と申夫有りと斗り云つて度重れ共返事にも及ばずとなり依て清水は彌増に戀路の闇に迷ひ何卒方便を以て手に入れんと様々に 謀を工夫致しける處に白川の中町と云所に本山験者にて大乘院と云て不思議成る山伏有り清水此法印を招いて大右衛門調伏の事潜かに談じければ大乘院是を聞て大に驚き様さまと辭退に及び色を違へて申けるは我等事行法の掟に依て忍辱慈悲の密法を以て人を

すくう事而已を行と致す所なり呪阻調伏の義杯は中々ぞんじも寄らざる御事なりと云清水聞て貴殿此事承引なきに於ては我等大事を明かし其分には差置き難く依て貴殿の命を申請くべし覺悟有れといふ大乘院又大きに驚きは扱以の外成る御事なりたとへいかやうなる御事有り共中々他言可致様成る我等にあらざ一命の義御用捨可被下と云へ共是まで密事を明せし上は免るし置れず是非共に貴殿の命は某申請べし遁れざる所なりといふ大乘院是を聞て今は我命爰に極りしと思ひ左様にまで思召し詰め給ひなば我等行法の掟に背といへ共一命には替難し是非なき仕合なれば仰に隨ひ申べしと請合ふ時に清水申けるは然らば他言有る間敷旨誓紙有べしと則熊野の牛王に血判致させ彌々此事成就の上には急度御禮申べし亦主人へも我等取持を以て宜敷披露致し末々祈禱所共取立べし杯と追従事を云並べ又當座の御禮成りと金子二千疋の目録を與へ扱又夫々は酒肉を以て饗應致す其後清水申けるは近々主人には例年の如く九景寺が原にて鷹野有るべし先づ其節大右衛門に越度をさづけん爲め彼が預りの手鷹反れて再び歸り來らざる様の御修法を行ひ給はるべし然る時は決して切腹に及ぶべし其後手便を以てお瀧を我等が手に入れんと云ければ大乘院聞て是は最安き御事なり其砌に至り如何様にも行ひ申べし若又是にて參り不申ば拙者何分にも修法を以て呪阻致し相果し申べし御心安く思召候とへ互に約束を定て大乘院は宿所へ歸りけり

此事安永五年までに百貳拾八年に成るなり

九景寺が原鷹狩の事

去程に寛文四年甲辰十月廿一日九景寺の百姓共より言上致しけるは此四日以前が鶴下り候て未立ち不申由註進に及ぶ即刻下總守殿被開召九景寺の原御鷹野有るべしとの御事にて翌廿二日に未明より御供揃へにて家中の歴々御供に相隨ふ中にも藤戸大右衛門清水權左衛門の兩士は御鷹預りの役人なれば兩人共爰を暗れと出立ち梟程なく九景寺の原

に至り見れば百姓共訴に違わず鶴數下りてゆふくとして居たりける下總守殿先づ藤戸が預りの白綾と云御手鷹を召れ自身に合せ給へば此白綾は何とかしたりけん鶴の方へは目もやらずして雲を霞に反れて其行方も見へず總州大にせかせ給ひあれ呼び戻せよと宣へども其行方知れざれば人々詮方なく御供の下部まで冷汗に成て控へ居る時に總州仰られけるは夫れ清水鷹をと有ければ權左衛門は仕済したりと心に悦び則預りの鷹を切て放す此時に件の鶴ははるかに伸し行ける所を清水が鷹飛かけつて揉合いければ則増し鷹を掛て終に其鶴を得給ふ扱夫が大右衛門を召して仰られけるは預け置し鷹の飼方しつて悪敷秘藏の白綾を逃せし事不届千萬成と御機嫌さんくにて御立腹有りければ大右衛門は誤入て一言の答へもなく兼て覺悟の事なれば既に自害と見へにける此時下總守殿是を留て仰られけるは秘藏と雖共鳥類の代りに人間の命を取ん事世の人口も如何なり只其分にて罷歸り閉門致すべしとの御事にて大右衛門は直に屋敷へ歸り遠慮致して居けるとなり其後清水が番鷹にて數多の鷹ノ鴨を取給ひ御機嫌も直らせ給ひ權左衛門事は別して預りの鷹を大切に致し飼方等宜敷旨御褒美の御言葉にて則其日も暮に及びければ御歸館有り翌廿三日清水を召出され百石の御加増本知合て四百石に成り御近習頭に仰付られ又備前兼光の貳尺八寸に祐乘彫にて根笹の雪の三所物の刀を下し置れ其上にて是まで藤戸に預け置れし所の御手鷹を召上られ清水に預けられける權左衛門は時の面目有りがたき旨申上て退出す其後に大右衛門をも召出され御叱の上にて閉門御赦免有て清水が是まで預りし所の番鷹を御預けにて則歸役仰付られける大右衛門殘念成と雖も主命なれば詮方なく難有旨申上て勤役を仕たりとかややすれば是がいよく清水を御寵愛淺からずとなり依て清水思ひけるは我大望大乘院が行法にて大がいきゝしか共先比主君藤戸が切腹を止め給ひし事社殘念なり此上は又々大乘院に談じ合せて計略を以て大右衛門を失ふべしと様々に謀を工夫致しけるとかや然るに天に口なし人を以て云わしむとかや清水が藤戸を調伏の事たれ云となく一家中にひそひそ風聞致しければ終に大右衛門が耳に入にける依て大右衛門此事を聞て大に憤り無念心魂に徹し早速清水が宅へ踏

込み此恨みを散んぜんと思ひしか共能々思案を廻らし見るに私の意趣を以て刃傷に及ん事是不忠の第一恩祿の賊と云わんと心を静めて怒りを押へ女房にも清水がたくみの事共を委しく語りければ女房聞て大に驚き扱々清水殿には武士に似合ざる人かな我身此事をぬし様へ語りなば若し又互の意趣ともならんかと只今までは包みしが清水殿の事は自らへ度々文を送りて色々口説きたまへ共自取上ず我身事は藤戸大右衛門と云夫有身なり御ぞんじなきやと云て折節の物によそへ恥しめし事も有しが定て个様成る事の恨みにて主様へ意趣を含みし物ならんと語りければ大右衛門是を聞て扱々憎き奴ツめが仕業かな人面獸心とや云ん彼れが如きの畜生を活け置て頭と用ひん事も穢なり唯一討に討て捨んと云ければ女房聞て御尤には候へ共清水殿を討取給ひなばぬし様にも生きて歸り給ふ事有るまじ然る時は大三郎や自はたれを便りと頼べき只々大三郎が爲と思召し利を曲げて此事をおもひ止りたもふべし是非々々堪忍成難く討果さんと思召給ひなば自が思案有り我に御任せ有べしといふ大右衛門聞て其方が思案如何成る事と問ふお瀧申けるはされば自ら偽て戀を叶へんと云遣し呼び寄せ申べし其時に相圖を以て我と清水を一所に討取給ふべし然る時は互の密通に成て主様へ咎も有まじと云ければ大右衛門聞て大に感心致し誠に斯る真心のその方に悪名を付けて何とて双の立べきや是より後は此事決しておもひ止るべし少しも苦勞にする事なかれと云ふ女房聞て主様のはや合點自らは何共心元なし我身事は如何様に悪名を立られ候共主様や大三郎が爲と思へばさら〜いとふ心はなし殊に我身より起りし事なれば是非々々此謀を用ひたまへと云大右衛門いよ〜かんじ入てもはや此上は其義におよばず某彼に恨を生じ今更事を起す所存曾てなし心やすく思ふべしとちかひを立て云ければ女房も悦んで大三郎が事を思召しなば必々短慮を生じ給ふ事なかれと泪を流して諫ける是に依て大右衛門も恩愛不忠の二つにからめられ清水を討事をば止りけるとかや然るに呪阻の風聞何國々洩れて斯の如くと云に清水が召仕の茶坊主有りしが此者子心に彼大乗院と清水と一間にての密談を小陰より立聞したりしが日外九景寺に於て御鷹狩の節藤戸が預りの白綾反れ行きて再び歸り来らず大

右衛門不首尾に成ければ彼大乗院が行法の奇妙成る事を感じ風意ちやうして人に語りし事有りしとかや誠に是ぞ非道の者を天の誅したまふ所にや人倫の慎むべきは个様の事共なり

九景寺が原にて再び鷹狩の事附り清水権左衛門於江川藤戸を討事

然るに同年三月上旬に至り再び九景寺に御鷹野有べしとの御事にて此度も清水藤戸杯御供にて終日御殺生是有り興に乗し給ひしが此日も清水が預りの御鷹名譽數多成りしかば清水は彌々御意宜敷なりにけり藤戸が預りの番鷹は何の譽もなし是に依て大右衛門思ひけるは今日もまた例の大乗院が呪阻ならんとて其憤り止む時なし去ればその日も黄昏に及びければ御歸城なり然る所に藤戸清水は何とか仕たりけん遙か跡へ下りしが爰に會川とて御城下が廿町餘り脇に少しの小川有り此河原に來りて清水が其行粧を見るに己れは馬上にて今社御頭なりと云ぬ計りの顔色を顯し世間に人もなげなる有様なり大右衛門は後ろ々此體を見て扱々悪く畜生めが有様哉と日比の恨み増長して今日も某預りの此鷹に利運なき事偏に清水めが致す所成りと思ひ其無念止事を得ず今はたへ兼て是幸ひの所なりと彼河原に來りて頓而後ろを聲を掛て藤戸大右衛門なり日來の工みを覺へしかと云様拔て切付る所に清水が乗たる馬驚きて踊上りて刎ける故清水鞍に溜らず向ふ方へ落にける依て大右衛門は初太刀を討損じ又馬の向ふへ立廻り討んとするに清水心得たりと抜合せて切結ぶ元來此兩人は同門弟にて戸田流劍術の達者なれば双方共負ず劣らず火花を散し戦ひしが藤戸が初め切込みし太刀影跡へ見ければ清水が若黨駈來り此躰を見て後ろ々物をも云わず無二無三に藤戸が右の肩先をしなかに切付たり大右衛門は此深手に弱りければ清水は得たり賢しと踏込々々何の苦も無く藤戸を討取りける社本意なき事共成り此時下總守殿にははや先達而御歸館なり此兩人は運の極めにや跡に下りければ誰有てさよゆる者もなしさて權左衛門は夫々直に登城し御前へ罷出右の次第尾に鱒を付て申上大右衛門事をさん〜に讒言を加へて直に訴へ

ける間清水には何の咎もなく元の如く勤けるとなり然るに大右衛門が一子大三郎とて未だ十一歳なり妻のお瀧は廿八歳成しが此事を聞て大に驚き歎き悲しみ十方に暮て居たりしが爰に藤戸が譜代の家來に松本新左衛門とて深忠のもの有りけるが此事を聞て申しけるは某今日の御供に參る物ならば斯やみくとは討たすまじ物と後悔致すと云へども今更悔ても詮なしと萬事を取計ひて會川が死骸を引取り菩提所に葬りけるとかや扱亦下總守殿仰には大右衛門致方不届なり迎知行並居屋敷共にめし上られ粹大三郎後家お瀧諸共に追放仰付られけるされば松本新左衛門は忠義無二の者なれば主人の妻子を御供して我子の新藏諸共一と先づ江戸表へと志して登りし所新左衛門事は江戸赤坂傳馬町にまつや九兵衛迎所縁の者有ければ此九兵衛方へ便りし所に九兵衛と云者甚だ頼母敷男にて諸事を世話致し其近所に店を借りて右四人を差置けるとなり其比新左衛門は器用成ものにて諸藝に達し別て打物の碓を致す事を得たれば則此所にて碓屋をはじめ松や十藏と名を改めて主人貳人と我子新藏を養育致し年月を送りしとなり然るに此時白河の御家中にて風聞致しけるは此度の御捌きか様には有間敷御事なり是は餘り片手打成るなされ方なり殿様の御意にさへ叶へば人を殺してもかまひなきやか様成るくらき主人に仕へる事社未頼みなし彼清水事四五日も御沙汰なくば一家中一列して暇を願わん杯と様々に評議致しけるとなり依て此事下總守殿御聞に達ければ清水を潜に召れ个様々々の次第なり其方事おしき者なれ共大勢の家中には替難しざすれば其方今宵の中に立退くべしと有ければ清水御厚情の程有り難く奉存候旨申上る下總守殿重ねて仰られけるは其方何方へ參り勤仕致し候とも姓名を改る事なく相勤べし又是は汝へ錢別成り迎金子百兩を下し置れけり清水は重き御厚恩の程有がたき仕合なりと則御禮御名残を申上て其夜の内に逐電致けるとなり是に依て白川の御家中事もなく治りしとかやされば清水は是が江戸に出て茅場町邊に神谷仲庵と云へる町醫ありしが是は清水前々江戸詰の時分此仲庵と入魂成しかば此者へ便りて彼が口入れを以て此邊に借屋致し浪人を立てて戸田流劍術の師範を致し暫く此所に居住致けるが彼松本新左衛門江戸に在る由聞し故此所にも落着致し難く何國へか引越しけん其行く先を知らずとなり

松本新左衛門碓屋を致す事

然るに松本新左衛門は松屋九兵衛が世話をもつて刀の碓を家業として赤坂傳馬町に於て松や十藏と號しお瀧と大三郎を大切に養育致しければ天道も此深志を憐みたまうにや程なく出入の徳意方も出来て次第々々に家業も繁昌致し弟子杯も抱て安くと渡りけるされば光陰に關守なしとかや月を重ね日を追てはや大右衛門が三廻忌に當りければ十藏萬事をとり賄ひ念比に佛事を供養致しけるとかや。然るに大三郎も此時十四歳に成ければ母のお瀧常に思ひけるは何卒大三郎に父の仇を討せん事而已を常に忘れず如何にもして劍術の師を頼み武藝を學ばせんと方々と聞合せけるに其邊の御組屋敷を借地して淺山一傳流の劍術の師範士岐源左衛門と云へる浪人大小名の御方に門弟數多是有り家富榮へ藝術も秀し者の由聞及びさればお瀧は大三郎を此門弟にせんとおもひ十藏に此事を相談致しければ十藏聞て某も兼て其心掛にて御座候が御心底の程如何と差控へ候なり天晴の思召したち奉れば我等倅新藏をもまさかの時は御助太刀とぞんじ居候へば彼も一所に源左衛門殿へ弟子に遣はし申べしと相談極けり此時寛文八年申正月大三郎十四歳新藏は十三歳なれば先づ大三郎には半元腹を致させ其賀杯も相應に祝して其後十藏は右の兩人を伴ひ土岐氏へ罷越し則源左衛門に對面致して申けるは我等儀は元來武士にて是有り候所聊かの事にて只今は町人と相成候へ共此倅共は少々望も是有る者共に候へば何卒昔の武士にも立歸らせ度頼に依て今町人となりながら劍術等其外武藝に勵せ申度願ひに候是に依て此兩人へ御指南奉願とてひねいに頼みける源左衛門聞て夫は宜敷御發氣なりと早速師弟の約をなして盃事杯致し其日は三人共に暇乞して歸りける然るに其翌日稽古を初て兩人は毎日々々土岐氏へ劍術稽古意す出精致しければ外々の弟子は藝術も勝れしとかやされば大三郎は或時母に向ひ尋けるは父大右衛門殿清水權左衛門

に討れ給ひし由其時の次第を委しくお聞せ下さるべしと云ければ母は涙を袖に隠しその時の次第を具に語り聞せける
 大三郎は此難を逐一に聞て彌々無念骨髓に徹し何卒父の仇を討べしと思ひ立則 赤坂氷川明神へ祈誠を籠て劍術を勵
 みければ神力應護の徳に寄りてや其器量人に越へ四五年も古き門弟も勝れしとかや是に依て土岐氏も満足に思ひ別
 て此兩人秘藏の弟子とは成けり大三郎おもひけるは今後はや門弟の中に恐るべき人もなし是にては五人や七人の相手
 は左而己苦にも成る間敷と思ひ或時母へ敵討の事を願ひければ母是を聞て云けるは其方未十五や十六の未熟成稽古に
 て中々相當るべき敵に非ず彼清水權左衛門は一騎當千の者恐るべき敵にしてしかも劍術勝れて達者なれば其方杯が小
 腕にては心元なし先々心靜に今一兩年も稽古有るべしと云ければ大三郎は母の心を背くも又不孝なりと思ひて是が一
 年半程も稽古致して手裏劍柔術捕手棒の類悉く奥儀を極め殊に尺八杯も學び得て又母へ願ひけるは夫父の讐には供
 に天を不レ戴とかや承候へ共某幼少に依て是非なく唯今まで延引仕候何分當年は敵討の門出御免し下さるべ
 しと云母のお灌限りなく悦て十藏にも相談致れば十藏も是を聞て拙者も今年杯は可然様に兼てぞんじ居候なり
 と云て其支度杯も相應に調て或時源左衛門へも能き加減に挨拶致して暇をこひ其後十藏大三郎に向ひ申けるは某
 御供に參るべけれ共左様に致しては若輩成る新藏儀に候へば母上の御養育心元なし沙而某し事は相残り新藏を御供に
 差添へ申べしと云ければ母のお灌は是を聞 自事は如何様に相成候 共敵をだに討候わば本望なり唯々大三郎に力を
 添て給わり候へと有ければ大三郎聞て申けるは助太刀杯はぞんじも寄らぬ事なり未代に至ても藤戸大三郎と云へる者
 助太刀を以て親の敵を討たりと云れん事は是れ武士の恥辱と致す所なり中々助太刀も供も召連候 所存なしと云十藏聞
 て是は思もよらぬ仰かな我等親子在ながら御無人にてお出立有ならば我々又腰抜けの汚名を取ん事は又臣として恥辱
 といたす所なり何分御供に召連られ候へと云大三郎聞て 某此所を去るならば山川野谷を住家とせん所存なれば其義
 に及ばず殊に亦存る子細も有れば供杯召連んは却て邪魔也昔を聞くに曾我兄弟の人々敵を討に出んとせし時鬼王兄弟

の者共御供を願ひしか共漸見送りを免るし唯母の事而已を頼み置しとかや承る 某も又曾我兄弟の人々程には非
 ず共其例を習ひ是非共と有るならば七生までも主従の縁を断べし偏に頼置は母人の御事我に代りて新藏随分々々孝行
 に頼入なり又母人にも新藏を私と思召し美しくしみ給わるべしと互に暇乞の酒宴を儲て敵討の古實を引名残を惜みけ
 るとなり此時寛文十二壬子八月大三郎十八歳にして敵討に出しとかやされば其節十藏は金子貳拾兩を取出し是は某
 が八年以來心掛し所の用金成と渡しければ母も金子三拾兩に來國光の刀を添て是社は父の秘藏に持給ひし重代の刀な
 り此金子も父の溜め置給ひし金子なり自ら此用に立てん爲今日まで隠し貯へし所なり此二品社は父の紀念成るぞと渡
 し給へば大三郎 敬て重々有難しと御請申て後ち十藏に申けるは 某事は非人乞食と成ても本望を達すべければ路用
 の支度に及ず此金子共は残し置く間母人養育の要用となしたまわれと云十藏聞て 某八ヶ年が間口に甘き味ひをしら
 ず身をかざる事をわすれて丹誠を 仕りしは此用に立んが爲なり只幾重にも 某親子を御供に召連られ候と思召御
 持參可被下と達て申ければ無據 此五拾兩を落手致しけるとなり大三郎重て申けるは御當地は是まで平生心を盡し細
 吟に及ぶと云へ共曾て其風聞をも 不レ承然る上は先故郷なれば奥羽の方へ 志し可參とおもうなり新藏には千住越
 谷の邊まで見送りたまわるべしと云ければ十藏思ひける斯まで居りし 魂なれば押て申 共中々承引は有間敷とぞん
 じ然る上は如何様とも仰に任せ可申と云ければ大三郎も大きに満足致しけるとなり其後又十藏諫て申けるは古語にも
 大切は細謹を願みずと申せば係る大儀を抱て 必々小事にかゝわり給ふ事有るべからずと吳々も教訓を加へける又母
 の申けるは其方事常に物語りせし如く清水權左衛門事は人躰能くして背い高く少し肥肉にて髯青く左りの眉尻に少し
 き黒瘤有り又印とする事は彼備前の兼光貳尺八寸祐乗が細工の根笹の雪の三所物を所持したり是を手掛りとして能々
 心を配り詮議有るべしと也又十藏方にても商賣からなれば此事を随分心を付べしと有ければ大三郎逐一に手記し何條
 天道佛神の應護を以て尋出さて置くべきか殊に明日は八月十五日弓矢正八幡宮の御縁日なり首途も最上吉日なれば少

しも御氣遣い有べからず追付け本意を達し目出度歸國仕るべし先夫までは十藏親子の衆へ母の御事而已吳へも頼み置なりと云ければ十藏聞て我々斯て有上は其義に於ては少しも御心遣ひ有べからずと頼母敷く請合先暫くと母諸共各寝所へ入にけるされば其夜も曉け告て東雲近くなりければ大三郎ははや旅のよそおひして又門出の盃を出し猶越方の物語りに暫く時をぞ移しける斯ては果じと 則八月十五日の未明に赤坂傳馬町を出ければ十藏親子も見送りに附添出にける母のお瀧は表に出て後影を而已見送りく是が是世の名残とは後にぞおもひしられ梟

藤戸大三郎敵討に出る事附り新藏大三郎と兄弟の約をなす事

去程に十藏父子は大三郎が旅立を見送りに先づ首途なれば迎氏神氷川明神へ參詣致し敵清水を安々と討せ給へと三人一同に祈願を籠め其後十藏申けるは其昔平親王將門叛逆の時平貞盛卿此御神に祈願有て下總國相島に下向ましと首途を祝し夫々麴町へ掛り番町通り小石川水道橋を渡り本郷通り坂本に出て花のお江戸東叡山をも跡に見やりて行けば程なく千住の大橋に至りて此宿端の茶屋に休らひて大三郎申けるは何國まで伴ひ候共名残は盡じ十藏には是が御歸り有れ又母人にも案じ給ふべし新藏事は少々談じ置度用事も是有る間今宵の泊りまで同道致すべし左様心得給はり候へ明日は早々相歸すべしと互に暇乞致し立別れけるが互の後影に心引れ跡へ一と足先きへ一と足道の程もはかどらず斯ては果じと大三郎思ひ切て踏出し道を急ぎければ漸々と夕陽西に傾く比幸手の宿に着にけり則屋どりを求め兩人は一宿致し湯拭つかひ食事を致して後四方山の物語り等致して其後大三郎申けるは某其方に無心有り云ふ新藏何事にて候や御心置なく仰られ候へとゆう大三郎悦び申けるは某か様にいつと限りなく出行く跡は嘸や母人便りなく思ひたまわん問其方我に代りて母人の事を頼み入る也斯くまで主従と成し事も一世ならぬ契りと聞けば

今も汝と我兄弟と成て母人の事而已を頼み置なり汝とわれか様に縁を結びし上は我が母は汝が爲にも母なりと云ければ新藏聞て是は御尤の御事なり併左様なきと母も三代厚恩の御主なれば何迎鹿略に存候わんや乍去御心休る爲なれば今日の只今乍憚兄上と頼み申べし然る上は某爲にも父の敵なれば敵討の御供に召連られ候へと云大三郎聞て此事一利有りとも雖も只今同道致しなば大三郎はおくれて汝を召連るが爲に兄弟と成し杯と世の人口も如何なり又左様無き迎も母の御事を頼み置んが爲なれば此儀は曾て叶ふ間敷と則酒香を求めて盃に酒をつぎ互に小指の血を絞りて大三郎是を少し呑みて新藏へ譲りて申けるは彌々我母は汝が母成り汝が父は我爲にも父なり向後は猶以て互に血を分けし兄弟に疑ひなし如在は有間敷けれ共返くも頼置は母の事なり若又某事武運拙くして返り討にも逢たりと聞くなれば其時は汝我に替りて父の敵を討て手向け呉れよと云新藏此酒を呑て申けるは斯まで分けて仰られ候上は達て御供共申難し某は跡に残り母上の御介抱申べし跡の義は少しも御案じなく目出度御歸國而已を願ふなり迎則大三郎が詞に隨ひけるとなり夫々大三郎は母の方へ文を認めて互の名残に夜も更ければ旅枕の夢や結んと兩人共に休けるが既に其夜もくたかけの曉告て別れよとてや諷聲に目覺て戀にはそれかあらね共鶏鐘にくしあかぬ別れのかなしみの長々しと詠吟の秋の夜も短く覺て兩人は頓て起出つゝ又も行末越方の物語りに夜も天明々々と明けぬればはや朝食を出しける則是を食して大三郎申けるは某事は生きて再び歸り來らん事も不定也兼て無き者と思ひたまわるべしと乍去母上へは力を添て案事給わざるやうに痛り給われと云新藏聞てこは不甲斐なき御事を仰せられ候物かな警敵鬼に神なれば迎孝心の双に向ふ事叶ふべきか御心強く思召候へと云て幸手の宿をば立出一里斗りも同道致し行けるが大三郎申けるは何國までも名残は果じ最早是を歸り候へと云新藏承り何个様御尤なり迎申ける互に詞をかわせばかわす程末練の心起りて別れがたし此上は双方共無言に致して相れ申べしと云て其後は一向物云わずしていつともなしに立別れ互に後影而已を見送りし是今生の別れとは後にぞ思ひ知られけり

松本新藏赤坂へ立歸る事

然るに新藏は其夜に赤坂へ立歸り母へも十藏へも念比に言傳を申述べ兄弟に成し事も委く語りければ母も十藏も大悦びけるとなり扱夫が新藏は大三郎が文を出して母へ渡しければ是を披き見るに

鳥渡 申上 候まづ 〱 私事はさて幾年月の御養育有りがたくぞんじあげ參らせ 候その御厚恩をふりすてか様になり行きまいらせ 候事も前世の因縁世の習わしとおぼしめしふかうの程を御免し下され随分々々御機嫌よふ御よわひつもらせ候へかしのこれのみ 〱 祈願ひ上參らせ 候夫に付新藏事夜前々兄弟と相成り候て私爲に眞實の弟に御座候まゝ 母人にも實の子と思召御寵愛なされ御力と可被遊候然うへは十藏殿御事も私爲には父とぞんじいさゝかも龜略にぞんじ不申候間母うへにも其おぼし召にて何事も御心置のふ御力に御頼み可被遊候 私事も追付け本意を達し目出度歸國仕御 兩所さまの御悦びの御顔はせ拜し申さんことのみ 祈 申 候十藏殿へも委しく申上度候へども途中の事ゆへにその意に任せ不申候此文一所に御覽可被下候申上度御事は海山にて候へ共筆紙に述がたく殊に旅路に心もせかれ筆もまわりかね候間あら 〱 申上候かし

八月十六日

母上様

御元へ

大三郎

と書たり母は是を見て感涙を催し思ひけるは 自事老にし身にも非らされば若しや身持に名を下す事も有らんかと心をつけて細々しき文駄かな昔唐土にて母親不義致し夜毎々々に堀を越して通ひしかば兄弟の子共是を知て母の歸りに亦も此堀を越給ん事をあやうく思ひ其所に橋を掛置待居りたりしかば母は歸り見て我不義の顯れし事を知て空しく成

りしとかや自は左様成る拙き心は持たされ共若や左様の事も有らんかと若き者の優しき志し哉と感入て此文を十藏に見せければ十藏も此心を察し感心致すと云へ共流石また主人なれば夫共得云ず母も十藏も心を恥じて當分は互に憤み居たりしがお瀧は十藏が眞實なる忠儀の心にひかされ殊に未だ三十餘りにして相應の夫婦と見へればいつ共なしにあたり近所の付合にも女房あしらひに呼れければ大三郎が免せしを幸ひにして終に夫婦と成にけり

藤戸大三郎諸國を巡る事

去程に大三郎は先奥羽表へ志し同廿四日に會津の御城下に至り旅宿を求め暫く逗留致しける然るに大三郎は尺八を稽古致して一月寺の往來を所持致しければ先尺八修行と號して日々に出で諸家中の屋敷々々は勿論町々其外在所までたずね廻り色々と方便を廻らし手掛りを求め共其便りを得ずされば此所をも去りて夫が仙臺南部岩城等其外城下々々を委く尋て又夫が羽州に至り扱龜田の庄内最上等の城下々々を廻りて其後羽州を退き尾形の原とて一里餘りの間人倫絶て廣々たる野原有り此所にて日も暮に及びけるに此原を通りぬげざれば人里もなきよしなれば一刻もはやく彼人里に出んと思ひ道をはやめて行所に此原の眞中比と思ひし所向ふの方を貳人連れの大男山刀を横たへのつさのつさと出來り旅人酒手を所望と云大三郎聞て是社は開傳へたる彼追剝ならんが人にこそよれいざや目に物見せんと身構へせしがいや 〱 大事を忘るゝ所に非ずと思ひ直して各方は如何成御方かわぞんぜね共見分の通り我も長々尾羽を枯らせし浪人にて詮方なき儘奉公持の爲に上方表へ罷登る者なれば中々たくわへは少しもなし了簡有て通し給へと叮嚀に詫ければ彼兩人言葉を揃へ貯へがなくなれば腰に帶せし長短身に引張た物までも残らず渡し置て通るべし此原に於て我々が言葉掛し者すて通した例なし左なき内は一寸も先へはやらじと立はだかつたり今一人跡には我等が控へしと二人が中に引挟み柄に手を掛けおどしければ大三郎云けるは斯まで事を分けて御詫申と雖も聞入なし然る上は是

非なき仕合也某も侍なれば一命の有ん程は兩腰を何連渡され申べきやと云様拔て向ふに立たる泥坊を大袈裟に切付ければ忽二つに成にけり此勢ひに恐れて跡なる壹人逃ながら呼子の笛を吹き立てれば八方をばら／＼と七八人走り出て追とり巻ければ大三郎は爰を大事と秘術を盡して働ければ此者共も爰を詮度と戦ひしが其間に大三郎は敵三人を切伏せ二人に手を負せければ残るもの共叶はじと思ひけん四方へ逃て失にけり大三郎はあやうき難を遁れしも是孝心の實を佛神も加護にやと有難きおもひをなし道を急ぎければ程なく此原を通りぬけ越後の姫村と云所へ出にけり然るに大三郎思ひけるは此所に泊りなば彼等が同類共が又も付け來らん事も斗り難し災ひに遠ざかる事は理の當然なりと思ひ今宵は夜通しに行べしとなんの當所もなく道を急ければ夜の中に入九里の道を行けるが明る日も又十五里餘りの道其上夜通の旅に疲ければ日高に宿を借りて泊りしとかや夫々追て越後の高田に至り此所に暫く逗留致して又虚無僧となり高田の御城下を微細に廻り或は近郷且は糸魚川荒井邊まで残る方なく尋ると云へ共その便りを得ず依て此所をも去りて御大家の御城下成れば迎先づ加州へ赴きて則逗留致し尺八修行を事として御家中屋敷は云に及ばず金澤の町々を細吟して或時近郷へ出けるに松永と云へる所に行きて見れば方一里餘りの原有て廣々たる松樹枝をたれていとしん／＼たる所有り爰に來りしかば俄に日も西に暮んと欲す大三郎は不思議成事哉と忙然として立たりしが邊りを見れば辻堂有り是幸ひの所なりよしや日暮なば此堂に一宿せんと立寄て休らひ居けるが既に日も暮にけり然るに月滿々と照輝て明らかなれば大三郎其邊りを尋て能き比の石を拾ひ枕として寐居たり然る處に此堂に大い成る石地藏の立せ給ふが大三郎少しねむらんとせしに何國共なくせきばらひの聲聞えける故大三郎思ひけるは此所も日外の様成る山賊の住家にやと怪んで近所を窺ひ見るに何の沙汰もなし是全く狐狸の仕業にて某を引見る物ならんと構はず寢入らんとするに石地藏大音聲を上げて其所は汝等如きもの伏す所に非ず出よ／＼と呼り給ふ大三郎起上りて扱は所所に其噂多き地藏の類ひ成らん憎さもにくしと見る所に彼石地藏頭を振て手を打音しければ忽眼日月の如く見開

て大三郎を見て完爾々々と笑ひ掛次第々々に丈高く成り後には壹丈餘りの大入道と成りぬされ共大三郎は不敵の若者にて少しもさわがす是は全く狐狸の致所なりにくさも憎しいてや目に物見せんと彼來國光を引抜て只一討と切付けしかば彼地藏の形は消て失にけり辻堂と思ひし所なども常の松原と社成にけり大三郎思ひけるは皆々口おしき次第なり畜生どもに化されたりいざや歸らんと道を求めし所に貳三町も脇と覺て數萬人の鯨波聞へける正しく是も今の大入道めが仕業ならんと窺ふ所に段々と鯨波近く成て晝かと思へば月の光り明らけし亦夜かと思れば晝の如しされ共大三郎は是化物のなす所なりと少しも屈せず鯨波の方を打詠め面白き事かなと見遣る所に白簾赤はたを吹なびかし騎馬かちの鎧武者おびたゞしくむらがり來り西風東風しのぎを削て相戦かう大三郎あらけしからぬ事なりと思ひ草原に息を詰て窺ひ居たり然るに其夜も深更に及しが遠寺の鐘も風の便りに聞こへ東雲近く成りしかば此戦兵も一同にどつと笑て次第々々に消失せ何國へ行しか其行方を知らず大三郎も不思議成事と思ひ夢の覺めたる心地にて邊りを尋見るに齋藤別當實盛と記せし石塔幾つ共なくならび立たり是も又今の化け物共が仕業にやと怪み詠め道を求めて旅宿に歸り此事を語りしかば宿の亭主申けるは成程左様の事も有べし其所は松永と申所にてその原を篠原まで凡道法り三里計りも有べし古へ壽永の後には篠原を其松永まで源平の兵共が靈魂夜なく出てときのこへ矢叫びの音かまびすし里人恐れて此近郷に居住致すものなし然るに其後藤澤の遊行上人此所を通り給ひしかば彼實盛が魂魄錦の直垂を着して上人の前に平伏して申けるは某事は武藏國の住人に齋藤別當實盛なり壽永の戦に手塚大郎光盛が爲に討死致し其上平家悉く亡びし事を残念にぞんぜし所其魂魄未だ浮み得ず終にわ修羅道に落入てそのあらそひ止時なし願くば上人御教化なし給ひて我々が修羅のくげんを助け成佛を得せしめ給へと願ひしかば遊行上人則彼松原に御小屋をしつらひ給ひ百日の間佛事供養を勤め給へば亦實盛來りて申けるは御教化の功德に依て只今魂魄共に佛果を得候とてもの御慈悲に此所へ一つの石塔を御建立下さるべしと願いて後細々と禮を述て去りぬとかや申傳へ候其後折節は彼

靈戰是有り候。由斷傳へ候へ共誰有て見し者連もはべらす右先例に依て其後遊行上人御代々御廻國の砌は彼松原に小屋を掛給ひ百日宛の御法事は有り候なり只今にては加賀中納言様を其御小屋をば百間四方に御懸け遊され上人御通りの節には御馳走の御役人を被仰付置今に至りても百日の間實盛の法事を勤られ候なり此法事の度毎に實盛の石塔一ツ宛御建立被成候なり是に依て近年は左様の靈戰の沙汰も曾て不承候なり又石地藏の事は如何成事にや是まで其噂をも聞及ばず候が定て化物のなす事にや不思議成る事共なりと申ければ大三郎聞て然れば遊行上人の御教化にて成佛透し源平の兵魂今更現るべき様なし是は正敷く狐狸の業成らん彼石地藏は此地に年を経し古狸の類ひ成べし又軍兵と見へしは是にしたがふ數多のけんぞく共某を引見し物成らんと云て止ぬ然るに此表の逗留も敵の手掛りを得ざれば亦大聖寺の城下に至て夫々越中富山に暫く逗留致し其後江州へ渡り湖水を越て大津へ登るべしと心掛序なれば竹生島の辨才天又は西國三十番の札所成れば此觀世音へ參詣して禮拜をなし何卒敵清水に廻り合討せ給へと祈願を籠めしとなり誠に心爰に非れば見れ共見へずとかや名にし近江の八つの美景も目に付ず折節風もなく波靜にて程なく大津打出の濱に着にけり則是大津の町に出て一先京都に赴んとて石山觀山三井寺杯も餘所に拜して行ば程なく西番口に至る時しも生々敷獄門有り幸ひとばんの者も見へず跡先に通りもたへたれば彼獄門を引下ろし是社敵清水が首なりと心辻占を賀して刀を抜彼首をなし割にして通りける然るに三條大橋に着て播磨や金藏と云旅籠やに逗留して江戸を京都見物のもの成が連の者共伊勢へ參宮に廻り跡を來る筈也と云て日々に諸方へ出て名所舊跡人立多き所を心掛て尋けるがその便り手掛りをも得さればまた是が大坂へ赴くべしと則三條を立て伏見の夜舟に打乘り難波津差てぞ下りける

藤戸大三郎大坂逗留の事

然るに大坂肥後殿橋にて隠岐守殿御藏屋敷に大三郎又從弟加藤銀平と云者有りければ先是を尋けるに則在大坂の番にて早速對面して兼て大右衛門討れ家亡没の事杯聞傳へければ悔の一義をのべてたかひに絶て久敷物語り等致して後大三郎敵討の事具に語りければ銀平聞て氣毒の事に思ひて申けるは其儀ならば我等が長やに暫くかくまひ置くべけれ共朋友の思わくも如何なり其上人に尋られて白地には語り難しと萬事を取半い世話致し浪人者と拵へ則諸人の入り込み新町にも近ければ連四つばし平右衛門町に借屋致し多くの武士にも付合の爲且は兼光祐乘が雪に根笹の刀を見出す便りにもと劍術の師匠を致させける則淺山一傳流城大吉利と名を改め劍術の指南致しけるされば銀平大三郎共江戸表赤坂へ書状を送るとなり其大三郎が手狀の文に曰はく某諸國を廻り候へ共未手掛得ず是に依て當地は諸國入込の大湊なれば此所に足を留め暫く是有り候間江戸表にて其手掛りも相知れ候はゞ早速御知らせ可被下と認めて送りける然るに大坂は武家町家共に武藝をみかく所にて程なく門弟五六拾人に及びける然る上に大吉利尺八を得たりければ又此弟子多く付たり依て大坂の男伊達と呼る者共殘らず門弟と成り兩様を指南致しける故大吉利は次第に内福に成りければ敵を尋る便りにも思ひ新町へ入込み但馬屋和助と云へる茶やに遊び備前屋の賤機と云傾城に馴染ける此時大吉利十九歳にてその器量世に勝れし若者なれば是に文を付る傾城敷をしらず然れ共大吉利は有望有る身なれば全く色欲を思わずたゞ敵を尋ん謀とはじめの程は憤み遊びけるが後には女良同士の大立引と成りにける其故如何と云に茨木やの錦木と云女良賤機に文を以て彼大吉利を貰ひ掛ければ共賤機中々合點せず是に依て錦木は但馬屋の和助方へ行賤機に對面して直々に貰ひ懸ければ賤機申けるは我身事はまで馴染參らせし御方を御元へまいらせ候はゞ大吉様思召と云世間となへもまた女良衆への顔向も恥かし何れの道にも此事は叶ひ申す間敷と答へければ錦木覺悟を極め然る上は是非もなし我も斯まで世間へ知られ其分に濟し候はゞ此顔立ず依て自らもかへる所存に非ずしかし我身壹人も死せじそもじ様をも迷途へ連れ行んと云ひければ賤機大きに嘲り笑ふ錦木今は免るされずと用意の懷劍取出して突

掛れば亭主和助驚きいだき留めて先暫く御待有れ我等了簡有りと静めければ錦木中々聞入れず自ら斯まで女の恥かしき事而已を打明かしてのめく〜と生き存命へる所ぞんなし迎も叶ぬ事なれば又賤機どのを殘し置大吉様に逢わせんも恨なれば供に迷途へ伴んそこ退き給へと云ければ賤機も身構へして自ともいとしき大吉さま故に身を果す事本望なりいざや互に勝負をとげんと詰寄て争ひける和助双方を漸々と静めて申けるはおまへ方には夫でも濟ふが私方に左様成る事有てはお前へ方の親方へ對して私は何と云譯致すべきや爰は了簡物なり一先私を御立下さるべし我等亦御二人共に立様に了簡有りまづ静り給へと双方を押宥め扱賤機様へ我等一生の御頼有り御聞届け下さるべく哉と云ければ賤機申けるは此里にて禿立久敷御世話に成參らせ殊に御入魂のおまへの事如何様なる事成り共聞まいらせんと云時に和助夫は近此有難しお前の身には餘程御不肖の御事ながら此出入私に下され候へがし其上にて五分々に譯を付けて大吉様を十五日宛御二人にておん逢下さるべし此了簡を御承引下されなば生々世々忘れ申間敷と延つ引ならぬとりさばきに賤機流石にはしたなくいや共云われずどふ成り共と挨拶に及ぶ和助大いに悦び是は早速御承引私を御立下され候段忝なしと又錦木に向ひ唯今御聞の通りなり何にと御座りませふと云錦木聞て成程おまへの御働にて私が顔も立て嬉ふ御ざんす賤機さま無駄な事を申掛け嘸おはらが立ましやう是も此里の意氣地と思召し何事も水にして下さんせと打解ければ亭主悦びさあ〜是てさらりと埒か明いた御中直りの酒は我等が呑みます〜とさよめき渡り夫が酒盛りはじめける然る所へ大吉が來りければ和助飛下り是は〜旦那御來駕たつた今までお前の事て扱扱大もめ我等捌て潮公事も濟しと右の始終を語りければ大吉郎も満足して夫より賤機錦木へ向ひ數ならぬ我等事左程迄も慕ひ給る事嬉しくぞんずれ共某し事は大望有る者なれば中々御頼みに成され候程のものにてなし只袖の振合も他生の縁と思召下されよと云ければ亭主引取何は兎も有れ我等があつかひ先の御逢方成ば賤機さまおまへは上十五日錦木様は下十五日小の月は少し御損是だけは御不肖有れと云て亦々酒にして大さわぎとぞ成にけり去程に大吉郎は

いよ〜面白く成ければ猶々此里に通ひけるにあちらのうらみこちらのねたみにうつゝをぬかし此貳人に魂を奪れしとかやされば程伊川の姪麗美しさは人をまどわすと有り六塵の妙藥慾多しと雖も厭離しつべしと其中に止め難きは此道なり誠や春の駒は身を破り夏の虫は身を焦す山瀬と云獸は女氣をかひて命を失ひ久米の仙人は脛の白きを見て通力を失ひ志賀寺の上人はさばかり貴き聖成りしか共京都の御息所に戀慕の心起りゆらく玉のをの御詠に浮名を殘し給へり斯て大吉郎は此二女をなぐさみて心をうばわれ敵きの事も指南の事も打於て明暮れ此里に而已暮しける故劍術の門弟共も寄〜に異見すると云へ共用ひざれば何れも呆果て居たりしが中にも今井三十郎と云者此事をなげきて中の島加藤銀平方へ參りか様〜と委敷語りければ銀平方大に驚きて早速平右衛門町へ參り大吉を呼び寄せ三十良と諸共にさびしく異見を加へ必々此後相償むべしと得心させて後銀平方大吉を一問へ招き近くへ寄り指向ひにて申けるは最早此地の逗留も餘程なり併し夫れと云手掛りもなければ又々所を替へて詮義有るべしと云て三十良銀平方共に暇乞して飯りけるされ共大吉郎は彼戀路に心ひかれて大坂を立ん事を歎き今は敵の事も門弟の事も一向に思わず勿論銀平方が異見も馬の耳に風にて上り詰て通ひければもはや門弟共も見限り内證のかよひも廻らずほう〜の躰とは成にけり勿論其後は銀平方も不通と社は成りたりけるされ共大吉は新町の通ひ止事なし然るに彼賤機は大吉郎がひんに成ければ此比はいつ來ても今日は借りられ候ふ杯とうをつひて逢はずとなり是傾城の習とはゆひながら先達ての出入の節の詞にはいやわす不實千萬なり亦錦木は大吉登に成ければ彌實を盡してしんせつをして自身身揚りをし大吉を客となしけるが或時錦木大吉郎に申けるは主様御事は何大望の御方ぞや何事に寄らず包なく御心底明し給へと云ければ大吉聞てイヤ左様の者にはなし只常の浪人も望と云は能主人を見立て祿を得て立身を遂んと思ふ也と答へければ錦木いやいや夫は尋常の望なりぬし様御事は外に大切の御望み有るべし包給ふなと再三責めければ大吉義彼が實成る事を知て有りの儘に語りければ扱社左様にましますやと其儘視引寄せ筆取て一通の起請文を認め自ら小指の先を切て血を

絞り血判を居へて今様成事傾城の家業なりと古めかしくも思召候わんが是斗りは自らが眞實を以て認候なり扱
 又唯今ぬし様へ申事必悪敷く聞給ふな自らは賤機どのへの面當に候へば何つまでも匿ひ申度候へ共左様致候て
 は主様の武士の道をすてさせ申さん事如何斗の敷や一先此所を立退き給ひ何卒敵を尋出て本望を達し給ひ其後は
 必々便りを聞かせ給われと云ければ大吉も彼が實を感じ且は此詞を用ひ然らば是が大和路を廻り伊勢大神宮へ參詣し
 て再び江戸へ下り本望を達して後便せん亦縁有らば逢事も有べしたとへ此世の縁は薄く共未來は一つ蓮花ぞと互に堅
 く約束し是を直に旅路に赴くと云ければ錦木申けるは是が此世の別れにならん事も斗がたし貴ての名残に今日一日を
 逗留したもふべしとめてまづ其日は大吉を飯しける大吉は宿に飯りて宿主方へ行き我等事奉公持の爲に江戸表へ下
 り候なりと云い扱夫を諸道具を賣り拂ひ邊り近所へも暇乞して旅の用意杯をこくに致し又新町へ行き和助方にて
 四方山の噺しの内に何となく旅へ出立の由云ければ何れも是を聞名残をおし早速に錦木方へ申遣しける扱錦木は親
 方へ願ひて二年のねんをまし金子三拾兩をかし下されよと願ひければ茨木屋治右衛門是を聞て何の爲なりと云錦木申
 けるは在所の母の病氣を申越し人參是なく候ては療治相叶はず由にて候急成用事なり只今御貸し下され候へと願ひけ
 れば親かた氣毒く成る事に思ひ則三拾兩を貸しければ錦木金子を請とりし然る處へ大吉來りし由申越しければ折よ
 しと直に但馬屋へ來り夫と兩人は名残の酒宴をはじめて其日は終日す和助方にて吞明かしたり然るに錦木は件の金子
 をとり出し是は自らが心斗りの錢別なり自らも供に通れ行と思召被下よと渡しければ大吉達而辭退に及と雖も錦木
 更に承引せず是非にと申故に無據此金子をもらひけるとなり傾城に實となしと警へには申せ共亦實有る事此錦木が
 如し亦賤機如き不實の者も多し忘れても迷ふ事有べからず只假初の慰に遊ぶべき事成り卒然るに大吉錦木は其夜和助
 方にて互に名残を惜み翌朝暇乞してまた元の大三郎と名乗り別れけるとなり干時延寶三乙卯年五月十七日に大坂を立
 て大和路へ志してぞ出にけり

大三郎大坂を退く附り遠州濱松にて喧嘩の事并同所大信寺の事

去程に大三郎は五月十七日に大坂を出立して南都に至り二三日も逗留致し諸社堂に詣て敵の有り家を知らしめ給へ
 と祈願を籠めて夫と郡山高取の邊を尋て又是塔の峰並金峰山或は高野山杯へ參詣致し夫と私歌山の御城下に出て
 暫く逗留致し心を盡くして便を求め共手掛りを得されば是が那知山に至り三熊野權現に參籠致し其後伊勢の河端海
 道と云所へ出て則内外の御神に參宮し夫と東海道に掛り江戸表へ志して下りけるが程なく遠州荒井に着て則關所
 を通過て壹里の海上恙なく舞坂へ上がり扱舞坂を濱松へ馬を借りて輕尻を六拾四文と極め乗けるが此馬士は一駄東
 海道に名うての悪黨にて濱松の入口にて龜田屋と云茶屋に卸して駄賃百六拾四文渡せと云大三郎聞て夫は大い成る相
 違なり我等が直段極しは只の六拾四文なりと云馬方は中々合點せず大に悪口難言を云ければ大三郎も初めは一言二言
 答へけるが後には堪忍成難き所になり刀の柄に手を掛しかば馬士は大に嘲り笑ひ尻をまくりて出し是を切れよと云
 ながら控いて汝等如きの赤鯛杯我此尻には立ぬなり土ならば切て見よと言りければ大三郎わずかの事を云掛り是ぞ
 災ひの元立てなりとは思へ共刀の手前今更引にも引かれず彼來國光をぬく手も見せずひらりと見へしが其儘馬士は倒
 れしが血も出ず人々不思議と見る處に暫く有て二つに社は成にけり大三郎は其間に爰を立去りければ跡にて町中が騒
 ぎ立やれ切たわと云て棒と階子とひしめき追掛る大三郎は身を忍ばん處なく兎やせん斯やと行處に此宿はづれに大い
 成る一寺有りければ先此寺に掛込んで住持に對面致し某儀は藤戸大三郎と申者にて敵をねらふもの成るが様く
 の次第にて馬士を殺して跡を追手の來り候なり何卒此敵を討候まで一命を助り度願ひなり其上にて此方名乗り
 て罷出下死人と相成り申べき間御慈悲と思召し當難を御救ひ下さるべし此御厚恩生々世々忘れ申間敷と願ひければ住
 持も武士道を知り情有る人にて匿い申べし出家侍二言はなし心安かれと頼母敷く申されければ大三郎も少しは安堵

の思ひをなしにける然るに此事當地の城主青山因幡守殿へ其町を訴へければ則捕手を差向けられける是依て捕手の者共も爰よかしこよと詮義致す處に大信寺へ逃込み候由申者有ければ捕手のもの共二三人大信寺へ押寄せ門を明けよと罰ける則住持罷出何事にやと問ふ捕手の頭申けるは當町に於て人をあやめし旅の侍を此寺へ付込んだり出されよと云時に住持思ひけるは我れ其侍は此方へ來らずと答へなば偽りと成故戒行を破る依て有様に申べしと成程其仁わ當寺へ参り候へ共愚僧に救ひ呉れよと見掛けて頼れ候上は彼侍事は某が一命に替て置い置くなれば何分渡し候事は曾て叶ひ候まじ併此上是非と有物ならば譬國主の仰にもせよ某一命の有らん程は御相手に罷成り申べしと返答有る時に捕手の頭申けるは然らば某壹人を御通し其侍に逢せ給わるべし委く譯を聞届け貴僧へ預け置き其上にて御前の仰に任せ申べしと云故然らば貴所壹人は御通り有るべしと彼番頭壹人を入れて門をはたと打にけり扱是を彼侍打通り大三郎に對面致處に大三郎此者を能く見る處幼少にて見覺へし清水權左衛門に似た様なり又母の物語りに聞及びたる年恰好とこやら似た所ありければ大三郎心をしづめて馬士を殺したる次第を云譯致し其後大三郎申けるは貴所様は青山家御譜代の御方に候や但しまた中興の御方様に候か御姓名は何と申御方様に御座候哉某少々御願ひの筋是有り候間御尋ね申候と智略を以て名をたづねければ彼侍は何の氣も付ず某事は元奥州白川の城主松平下總守に仕へて清水權左衛門と云者なるが聊の義に依て暇を取り只今は當地青山に勤仕する者なりと云大三郎聞て扱社仕濟したりと心にうなづき重ねて申けるは清水權左衛門殿と有れば某が此年月心を碎きし處の親の敵なり我等こそ藤戸大右衛門が一子同苗大三郎なり其方故に是まで永の年月親子主従心身を苦めたり汝身に覺へ有べしいや尋常に勝負すべしと云様拔て切付けたり此太刀清水が眉間を外て切り付けしかば清水は縁先を轉び落しわじとや思ひけん抜合もせず舞を乗越し逃出て組下の捕手引具し一さんに屋敷へ逃歸りける故大三郎殘念也と追掛しかば住持留て申されけるはか様に敵顯るゝ上は今更追懸るに及ばずと押留給へば大三郎も住持の詞に隨ひて止り居た

りしとかやされば權左衛門は逃歸りて申けるは大信寺をも委く詮義仕候得共一向に有家しれずと言上致しける然るに大信寺は早々登城有て青山殿へ直謝有りけるは清水權左衛門は个様々々の者にて御座候依て何とぞ御慈悲を以て敵討被爲仰付被下候様にと願われける其上にて清水が今日の振舞を嘲り給ひ權左衛門事は侍の風上にも差置く間敷者成りと様々言上是有るとや扱清水は大信寺へ來る由を聞かもはや屋敷を逐電致して行衛知らずとなり然るに青山殿には大信寺の願ひ聞届け清水を尋出して後宜く沙汰致すべし迎夫を毎日々々足輕五拾人宛手分を致して清水が有家尋出し候様仰付られけるとかや亦大三郎事は大信寺へ預け置る間隨分心を添て痛り候様にと仰付られける大信寺は有難き旨申上て罷歸り右の始終を大三郎へ語り給へば大三郎も大に悦び此厚情いつの世にかは謝すべけん一禮を述べ夫は夫大信寺に暫く足を止めりければ其後十日餘りも過て何とか仕たりけん大三郎不斗風の心地と病付いて煩ければ住持驚き給ひ大切の望み有る身なり能々養生有るべしと則醫者を招て様々に療治致すと雖も更に其験をも見へず次第々々に重病と成りければ大三郎熟々思ひけるは是まで十ヶ年が間心を盡し身を苦しめ適々廻り逢し敵を討損じたるは能々武運に盡果たる物かな殘念是に不過と雖も今病中の事成れば是非なき仕合なり生死不定の世のならひなれば斯までも不運の此時節我此儘に相果ん事も斗り難くと思ひ則江戸を出しより以來の一部始終をつどく〜に書したゝめ別而大坂の事又は濱松の次第器具に書かへ江戸赤坂へ書置の一通を認め又大坂錦木方へも右の趣書殘し殊に大坂居住の内戀情の程感悦の禮を盡して必ず來世にて相待べしと書終り則此二通を住持へ渡して申けるは是社江戸に於て某が母を養育致し呉れ候十藏と申て譜代の者ながら親にも増りし大恩のものなりければ若も某し空敷く成行候はゞ此書置を江戸へ遣され赤坂傳馬町にて松や十藏と御尋させ御届け下さるべし此壹通は又大坂新町にて茨木屋治右衛門抱への女に錦木と申す者にて彼にも恩を請し上餞別成り迎己が年を増し金子三拾兩を送り候故某色々と辭退に及ぶと雖も錦木合點せず實を盡して申候故某も彼が心を感じし餘り是非なく此金子を貰い請

候が流の女には珍敷實有るものなり 則此金遣ひ残て只今貳拾兩是有候間 此金子に書置の壹通を添て御届下さるべく候と兩様を念比に頼み扱某事斗らずも御世話に預り有難く奉存候併し此分にては中々以て本快有間敷く覺へ候へば覺悟を極め斯の如くに書置を殘し置候なりとまた金子五兩を出して住持へ渡し某相果死後に至りなば重々の御世話ながら宜御片付け可被下候 某死する命は惜からね共是まで永々心を碎きしうどんげの敵に適適廻り合い討洩したる事返すも殘念なり御察し可被下とさめくと涙を流して語りければ和尚も哀れを催されしが力を添んと大に叱り扱々云甲斐なき次第かな某も元は武士成りしが左の様の事にては戦場の用には立難し殊に未若年の御身なれば是式の煩にて何條さる事や有るべし只々氣を丈夫に持たれよと力を付け給ひしかども心に未年若き身として能くも安心を極めし者かなと感心是有りしとかや夫が療治様々に手を盡しけれ共其驗もなく次第々々に瘦せ衰へ其後五七日も過る中一向絶食にして延寶三年乙卯六月廿七日年積て廿壹歳を一生として朝の露と消てはかなく成にけり是に依り住持も大に力を落し早速青山殿へ言上有りしかば 則檢便の者來りて相改る所別條なれば 則死骸取置べき旨を仰渡されける間大信寺に於て念比に申ひ給ひ延寶三乙卯六月廿七日桂花悟道禪定門と法號仕給ひ石塔を建られける間今に於て此大信寺に此石塔有りとかや夫が住持は先づ江戸赤坂へ飛櫓を立てられけるとなり又大坂の錦木方へは三度便りを以て右の金子に書置きと又添書をして届け遣し給ふとなり

大信寺の飛脚江戸赤坂へ到着の事附り松や十藏病死の事

然るに江戸赤坂にては三人の者共大信寺が江戸を出て久敷便り迎は坂に有りと聞し斗にて其後は絶へて音信も聞かざれば今比は如何にして有りけるぞと案じ煩て若や敵の爲に返り討に討れわせぬかと明け暮此事を苦勞にして歎き居たりしが中にも十藏はお瀧新藏を諫め力を付けんとは何進さる事や有べき追付け目出度歸國有るべしと云て諸寺

諸山へ祈願を籠て大信寺が歸るを待居たり然る所に同七月朔日の夜に至りて遠州の大信寺が飛脚來りて右の次第を語りて大信寺が書置に和尚の一書を添へて届けければ三人の者共大に力を落し十方に暮れて詞も無く忙然として居たりしが斯ては果じと彼書置を披き見るに江戸を出し久敷以來の事共を逐一に書殘し別而大信寺の御厚情濱松の次第具に書加へ分て大坂の錦木が事杯細々と書顯したり人々大に愁傷にしづみ暫く言葉もなかりしが十藏申けるは何は兎も有れ此度の事大信寺様の御厚恩詞には述難し先々御禮の爲責めて御返書仕るべしとお瀧にも文認めさせ其身も返事を認て細々と禮を述て彼飛脚の者に渡しければ飛脚のものは翌日二日に暇を伸て歸りける扱夫が十藏は兩人に向いて申けるは大信寺殿武運拙くして清水を討洩らし給ふ事今更悔て詮なし此上は某し大信寺殿に代りて仇を討べし新藏事は母を能く介抱致すべしと云て既に其用意に掛りければお瀧申けるは責て大信寺殿が七々日をも過して其後出給へと云故然らば十藏も四十九日まで延引す其中に十藏何とやらん氣分勝れずぶらぶらと煩付きければ人々驚き先づ醫者を呼んで其様子を見するに是は當分の事に非ず久敷きつかれ出て其上大に氣を打し事有べし殊の外六ヶ敷煩なりと云て先藥を調合して與へけれ共差て藥力の驗も見へず只ぶらぶらと煩て食事も進まず次第々々に衰へて後には床に付いて歩行も叶はざる様に成りければお瀧は大に力を落して申けるは大信寺殿には別れ便り少なき此身の上亦も十藏殿此世を去り給ひなば是まで年月心を碎きし敵を討事も叶ふまじ能く武運に盡たる我々哉と伏沈みて歎きければ新藏聞て母上左而巳敷せ給ふ事なけれ左様に深く愁傷有て此上お前までが煩と成りなば我等壹人殘て如何致べき新藏斯て有上は父十藏どの空敷成り給ふ共敵天地の間に有ん限りは某尋出して本望を達し申すべし殊に又兄上に別れし時若も萬一に个様の事有らば某に代りて敵を討んと誓置しかば何れの道にも此敵は某討たては叶わぬ處なり此事に於ては少しも御氣遣ひ有るべからずと母を諫めて申ければお瀧是を聞て汝が其勇氣を見るに付て我又力を得たり此上は十藏殿本快有る様にと諸方の名醫を頼んで手を盡しけれ共何れも醫師心得難きよし申ければお瀧新藏も大に力をおとし涙の外はな

かりしが最早や此上は神佛の力を頼むの外はなしと護摩よ千垢離よと様々に祈りけれ共其印も無き次第なり是に依て十藏も覺悟を極め跡の片付き諸事萬事を新藏お龍へも教訓遺言杯致して定期の時に至りしにや終に三十九歳を一期として同く八月十八日名残の霜と消て空敷なりにけり親子の者は今更の様に驚てかなしみの泪に前後を失ひ居たりしが母は漸涙を止めて云けるは扱々是非なき世の有様哉蝶よ花よと思ひし大三郎には遠國にして死別れ今更夫と頼みし人にまで間もなく別れ行事は如何成る因果のむくひにやと手足も折れし心地して十方に暮て居たりしかば彼十藏が親分松屋九兵衛杯來りて萬事世話致し先々亡者を取置べしと四ツ谷の正清寺へぞ葬送仕たりける夫が親子は七日の佛寺等をも念比に營みけるとかや然るに新藏は家業の硯を能く致しける間則父が出入の屋敷方を引請け右の家職をいたし母を養ひ痛りしが或時新藏思ひけるは某敵を討に出るならば母を養育致者なし敵を討たては主親兄への忠孝に缺たり如何はせんと様々に思案を廻らし斯る折には佛神を頼み奉んにはしかじと思ひ先づ目黒の不動尊へ祈願せんと思ひ立しが明王は兩部とは云ながら父の服穢有れば先づ遠慮すべしと思ひて則淺草の觀音へ願を掛んと同十月十七日百ヶ日の日參を始めける然るに此願望の中は精進して勤めけるとなり扱十七日に成りしかば朝の七ツに赤坂を出て淺草に至りて一心に觀音を奉願ひ則百度參りを勤て赤坂へ四つ時に飯りける母は此日を宿にて普門品七卷宛毎日素讀してたんせひをこらし祈けるとかや新藏は夫々毎日々々淺草へ參詣致し寒風留雪の中おも厭す眞實に信心を發して勤めしとなり先づ晝の内は平生の如く硯を致して月日を送りけるが明る年の正月に致り九十九日を勤めて今日にて結願と云日の前夜の夢に新藏は我家の門に乗鞍立派にかざりたる馬に侍壹人を乗せて白髮たる老翁其馬の口を捕て來り新藏に向て曰く是社は汝が日比尋る所の清水權左衛門なり本意を達し亡主へ手向け申べし我は是淺草觀音の仰せに依て來りたりと宣ひ夢は則さめにけり新藏は現の如く忙然と目覺てアラ不思議成る夢かな是觀世音の御告にや但しは某し常に此事而已を片時も忘れず是に依て心の勞れより出し彼支惠法印が云し心夢の類ひ成

んかと怪しみ居たりしが何にもせよ今日は満願の日に當たれりと七ツの鐘と諸共に宿を立出て淺草へ參詣致し此日も百度參りを勤めて則延寶四年丙辰正月廿九日の結願を白して飯り亦毎の如く硯場に掛り硯をはじめける然る處に大嶋の木綿布子を着したる男借馬とりの戻りて馬に打乗り來りしが何とか仕たりけん松屋新藏が前にて落馬致し氣を失ひける故新藏驚き早速に立出て氣付杯與へ様々と介抱致しければ漸人心地付いて本性と成るされ共未だ正月の事にて餘寒強く手足も冷へ働ず依て先づ内へ伴ひあたゝかき食事杯進て暫く休ませ置しとなり此時に彼者申けるは私事は黒鐵谷にて借馬の彌助と申者なり不思議成る御縁に依て常ならぬ御介抱に預り御厚情の程淺からず千萬々々奉存候重て緩々御禮に參るべしと念比に一禮を述て歸りしが此縁を以て次第に懇意となり此邊を通る度毎に見舞をとづれけるとなり

大信寺々錦木方へ壹通と金子を届る事附り茨木や錦木が事

然るに難波新町の茨木屋錦木は大三郎大坂を立出てより五十日に餘れ共何の便りもあらざれば如何成り行給ひしぞと案じ煩ひて勤も身に染ず無理に酒杯呑んで客を勤め居たりしが斯る折節濱松の大信寺より大三郎が書置と金子を届ければ錦木は大三郎が文と聞より急ぎ披き見るに書置の文牒大三郎空敷成し事濱松の事共逐一に書載又大坂にて思に成りし禮を細々と云顯し扱金子貳拾兩を返し候儘切ましのねんを縮めて早々勤を抜け候様にと書加へたり錦木は臆を消しこはそも夢にてはなきかと其儘に打伏し難き居たり然る處へ傍輩の女郎瀧田來り是には前々より大三郎が譯をば漸し置しかば包まず右の次第を語る瀧田も驚て先づ悔の一義を述て後申けるは今更敷ても歸らぬ事なり武士の身の上なればいつの何時難の程も斗られず殊に病死とは是非に及はずながらまだしも此上の事なり然る上はしやう名の一遍も唱へて供養をなし給へと色々に諫めければ錦木は是に力を得て夫より七日が間は勤を引て佛事を營みける

とかや扱又千日寺の巽の方に當りて難波の鐵玄迎世に名高き貴禪派の禪寺有り此寺の和尚貴き名僧の聞へ有りければ此寺に詣て錦木は彼鐵支和尚に對面致し右の次第を逐一に語りて則貳拾兩の金子を奉納して和尚へ願ひけるは此金子を以て御寺内に一ツの石塔を御建立遊され候て桂花悟道禪定門延寶三年乙卯六月二十七日と御記し置れ候て何卒佛事御教化をなし下され候様にと吳々も願ひければ和尚も淺からず思召し係るものには珍敷女なりと早速其願ひを聞届け請合給へば錦木は有難き旨御禮申上進も義に我身も此勤を終りなば尼となり申すべく間御弟子と成して下され候様にと則ち師弟の約をなして歸りける其後和尚は石やに命じて大い成る石塔を建られ朝夕念比に御供養有りしとかや然るに此事大坂中に評判有て茨木やの錦木は珍敷女郎なりと大いに時花出し息子手代は勿論終に新町橋を渡りし事もなきむかし作りの親父まで亂染にし我先にと此錦木に逢ん事而已願ひければ一寸の間も明き迎はなし依て十日も廿日もまへより約束をして逢事とはなりぬ然るに天王寺や五郎兵衛と云人の息子小太郎と云者世間の人に張合ふて他の客に買わせぬ事を面白くおもひ此錦木を買始め四五ヶ月の間を揚詰めにして一向他のものに逢せず是に依て新町へ行く程の者此小太郎を憎ぬはなしされれば地廻りの悪黨どもかたらひ集り或時小太郎が来るを待伏せして喧嘩を仕掛けしかば小太郎が召連れたる牽頭末社働くと雖も小太郎さんく打擲に合い手足も折れたる様に成りしかば所の者共又馴染の茶や猶も分けて當時の揚や近江屋清七と云ものなど様々世話致しけれ共相手は散りくに行かたしれず尤面の知れざる者共も是有る由なれば先づ堺筋の奈良や吉兵衛と云を呼て相談をせんと則奈良や吉兵衛方へしらせければ吉兵衛早速缺來り介抱致し様々と評儀の上是を公邊に致しては親御の名までを出して恥の上の恥辱なりと沙汰なしに致て急病と披露し駕籠にて則吉兵衛方へ伴ひ歸りし處にはや此事を親父五郎兵衛聞付て大に怒り勘當せんと有りける依て親類中或は子方伴頭共までも打寄り色々と評議の上達而佗び致し漸と得心させて先づ五郎兵衛を諍めける扱其後彼錦木が身持の程を吉兵衛より委く語りければ五郎兵衛是を聞て大に感じ夫は世に希成る女也慶敷ものなり

りと雖も左様成る心底は中々金銀の及ぶ處に非ず小太郎が馴染たるこそ幸ひなれ早々請出し我嫁にせんと云是を聞て小太郎をはじめ人々大に悦び則一伴頭金助を御差配に申付け金助承り茨木屋へ参り先づ次郎右衛門に對面致し相談に及ぶに次郎右衛門申けるは誠に錦木も浮む事に候へば如何様にも御相談仕るべし併し當時我家の福の神金箱と申は錦木にて候へば輕るく敷はなり難きよし申ける金助聞て其義は手前にて察し居候也手前親方錦木どの心底を感じての懇望なれば大概の事はいか様共致し申べしと云次郎右衛門聞て然らば何角なしに三拾貫目にて出すべしと云金助聞て成程之位にて萬事相濟候はゞ唯今相談極め申べしと則金子貳百兩を出して先づ是は當分の手付け成り迎相渡し近々に呼迎へ申べし先夫までは其元へ預け置き候と云て錦木へは何の沙汰をもせずして歸りける然るに錦木は此事を聞て大きに當惑し歎の上の悲しみとは係る事をや云ふならん我賤敷身とは生れしかど如何様成る縁ににや大三郎様に逢初めしより外に夫は持まじと心にちかひを立て女の操を世上に顯し貞女共呼れん事を而已願ひしにいま大三郎様世を早ふ仕給ひしかば我も供にと思へ共此骸は親方へ賣切置し事なればやがて此勤を終りなば直に尼と成て亡き夫の菩提を吊んと思ひ極めし所に今更請出されては慾に迷ひしと世の譏りも恥しく是は亡き夫に誓ひ置し言葉もほぐと成る所詮親方へ不忠たり共貞女の名は下すまじと心一つに取つ置つ覺悟を極め細々と書置の一通を認めける然る處へ彼兄弟分の瀧田が來りて小太郎へ身請の事を祝して越方行く末の物語り杯致しけるに錦木は少しも心浮ず書掛けし文を隠して何とやらん様子有りげに濟めやらぬ顔色故瀧田も不思議に思ひ錦木が底意を尋ると雖も實を明さず瀧田大に恨みて云けるは是まで實の兄弟よりもしたしく互に親にも隠す事までもつゝまず語り合し我なれば如何様の事有り共今更隠し給ふ事はあらじ但し又此瀧田が魂の程心元なきや白地に明し給へと責ければ錦木も此詞に納得し心解て委敷子細を語れば瀧田は是を聞て感心し必短慮を出したまふ事なけれ若し其上にて不叶時はいか様共又了簡も有べしと實を盡して止めければ錦木は悦びて誠に是れまで心易く致せしよしみをわすれ給わず眞實に心を添て給

わる事返すも忝しと云て一先づ此了簡に任せて自害の事を止りぬとかや依之瀧田は親方次郎右衛門へ錦木が底
 意を具に語りて利害をときければ治郎右衛門も了簡よき文才の男にて此事を早速吞込み保る貞心のものを失わん事は
 是無道の至りなり殊に我等は大い成る損亡なりと則貳百兩の手付を天王寺や方へ持参して伴頭金助に對面致し右の
 次第を語り錦木が事は身請なされ候ても御爲にならざる者なり御無用になさるべくと願ひければ金助聞て夫は心得
 め事なり定て外に宜敷き根引の口有る故此方を異變せん謀成べし此事曾て不叶事なり夫故先達て金貳百兩の手付を
 遣し置は此時の爲なりと云て合點せず治郎右衛門色々云譯致し若此儀に於て偽と思召候は錦木が心底を直
 直に御聞なさるべし毛頭相違なしと云是に依て金助此事を五郎兵衛へ申ければ五郎兵衛聞て彌々感心致し尤斯社有る
 べき事なり是は手前が誤りなり扱を世に類ひなき女かな个様の者は如來の變化とや云わん中々千金も替難し然る上は
 手前の縁にも致す間敷請出して心任せにして得させよと云付けければ金助は扱を馬鹿々々敷事哉とつぶやきながらも主
 命なれば畏り候迎則錦木方へ参り直々に委細を談じければ錦木申けるは御志しは海山有がたれ共我身に保る
 大金を申請る謂れなし唯此儘に捨置給るべし賣切し年を勤めて後尼となり申べき覺悟に候其折からは御禮に參上
 申べし旦那様へも能々御禮をと云て得心せず依て金助思案を廻らし是にては如何様に申共中々此金は請まじと思ひて
 則治郎右衛門を呼出して申けるは我等主人の云付けにて此金をほどこしに來りし處此施を請る人なし依て此所に
 捨置なり其元是を拾ひ得て施を宜敷く斗らひ給われと云て既に歸らんと仕ければ次郎右衛門暫くと止め成程拾ひ申
 べし併ながら五百兩は餘り大金なり貳百兩を拾ひ得て宜敷事を斗ひ思召に叶相候様に仕べしと云時に金助夫斗り
 にては如何なりと云治郎右衛門聞て申けるは何の所縁もなき天五様を錦木が身の上を今様に成し下され亦拙者事は是
 まで錦木が働を以て多くの金銀を儲けしなり其上天五様を錦木が身請の爲に貳百兩の手付金は錦木空敷成物ならば天五
 様にも御損の金子なりされば是にて一命を御救ひなされ候と思召し下さるべしと云て三百兩は返しけるとなり實に

捕もそろひし者共なり扱夫が次郎右衛門は金助が前にて錦木が年季手形を出し遣し此上は如何様共心任せに致すべし
 と云渡しければ錦木は歡て誠に是までの御厚恩此上もなふ有りがたし連金助にも禮を述て則剃刀を以て嬋娟たる
 縁の黒髪を切拂ひ當年廿歳にして墨染の尼とは成りぬ是に依て金助も感心致して歸りければ其後錦木は親方を始め家
 内の侍輩中入魂の茶屋々々へも相應に音物代配分して念比に暇乞致して其後長町の伯母の元へ下り夫が天王寺屋へ來
 り細々と禮をのべければ五郎兵衛も出て對面致し心底を稱美致して以來共いか様の事にも世話致すべし用事有らば
 遠慮なく何時にても云越れよと云て念比に挨拶しければ錦木は重々御心添のほど有難くぞんじ候旨細々と御禮
 申てぞ歸りける是を直に難波の鐵玄へ参り桂花悟道の墓に詣て其後和尚に對面致して右の事共を悉く語り約束の通
 り御弟子となされ下さるべしと云和尚も奇特なる事にをわれ則手自ら髪を下ろさせて自正尼と法名を付給ひける
 然るに自正申けるは私事一つの御願ひ有り何卒此御寺内に庵室を御免し下さるべしと願ひければ和尚聞給ひ夫は最
 と安き事ながら其方杯が様成る美く敷き艶女殊に年若かなる尼を寺中に差置ん事世間の聞へと云且又若き坊主共も數
 多有る事なれば此儀はなる間敷と有りければ自正も此利に伏して是非共云われず暇申て又長町の伯母方へ行て暫く
 暮す内或時家内のみな出て留守に成りければ自正は籠の下に炭火を發し側なる十能を赤く成るまで焼て其十能を
 以て己が顔へ差付けければ忽氣を失ひて倒れ伏す暫く有て表方が伯母歸り來り此體を見て大に膽を潰しこは氣が違
 ひしかと様々に介抱致しければ漸本性に成り是を療治を致して痛も少しに成りしかば又鐵玄へ参りて右の次第を語
 りて御寺内に庵を願ひければ和尚も感心有て係る心底を見る上は不苦と早速に免るし給ひける依而則寺内に少さ
 き庵りをむすんで其庵の額に

昨日迄有遊里一艶紅白
 今日面破入禪林得レ悟

と一句を題して亡き人々の菩提を弔ひ行ひ澄して一生を終りしとかや誠にさとり切たる大道心と云共有るべからず不思議なる女なりと其比難波津に専評判有りしとなり

松本新藏敵を討弁先知安堵の事

去程に年月押移りて延寶四年十二月十七日今日淺草寺の市なれば松屋新藏は先觀世音に參詣致し正月の支度杯も相應に調へ歸りける然るに母申けるはもはや今年も今少しなり餅の用意をも致して佛神をも祭り亡き人々をも供養致したしと有りければ新藏聞て成程その心掛をも致置候なり少も御苦勞なざる間敷と口には云へ共實は何の當も非らざれば如何せんと思へ共左有らぬ躰にて親子漸しの其中へ借馬の彌助來りて申けるは我等主人刀を拂ひ度由に候何卒宜敷口も候はゞ御拂ひ下さるべしと相頼んで則刀の捲へ鉢杯も委く咄して直段拾五兩程に拂ひ度旨申ける新藏母と目を見合せ聞ば聞くほど覺の刀なり是は敵の手掛りと心に悦び此間も左様の刀を尋られし御方有り承り合せ申べしと請合ければ彌助聞て然ば一兩日中に持參致すべしと云て歸りける扱跡にて母の云けるは今の刀の漸は正敷敵清水が拜領の刀なり持人は何人やらんと有りければ新藏聞て某も左様ぞんじ候故賣口有りと云遣し候なり先々其刀を見分の上詮義の致方有べしと云て夫々五七日過れ共其沙汰なければ新藏は心元なく思ひ黒鍛谷へ參り尋べし迎終に行ざる所なれ共借馬の彌助々々と尋行き漸とたずね當り右の刀望み人是有由申ければ彌助聞て私此間中は持病の瘧氣を惱み歩行不叶故延引仕候由にて則親方に引合せければ彌助が主人脇差斗りにて出對面致して申けるは某是まではた身を放さぬ重寶なれ共此度無據義に付金子拾五兩入用なり何卒十五兩に拂ひ給わるべしと則刀を取出しける間其刀を見るに相違なき兼而聞覺し拵へにて殊に其人躰年恰好同る處確に清水權左衛門成りと様々に工夫を廻らして申けるは是を求められ候ふ先様の御方は殊の外なる念者にて今様の品を調へ給ふ砌りは其出所持主等までた

し勿論印鑑を取給わずしては調へ申されず候然れ共御印鑑の處は私印形にて何分にも請合申べし乍去貴公様には何れの御浪人にて御姓名は何と申候や具に仰聞られ下さるべしと云ければ是を聞て彼侍申けるは某事唯今にては岡野多仲と名乗り候得共以前は奥州白川の城主松平下總守殿に仕へて清水權左衛門とて所知四百石の士なりまた此刀は其砌り白川にて拜領の刀なれば只今までは大切に所持せし處也と云新藏聞て仕濟したりと心に點頭き左様なれば確成る品なり大方ねだん等も出來申べし先様へ證據の爲なり右の出所御姓名を御記し下さるべしと云清水聞て安き事なりと則清水權左衛門松平下總守殿を拜領の刀なりと書記し書判を居へて渡しける實も古しへ白川にて尊敬せられし士なれば手跡も宜敷く認め書判も艶敷居へたりけり是が新藏は外の咄しにして様々の物語仕ける中に色々と思案を廻らし何卒只今此所に於て討んとは思へ共丸腰にて來りしかば討べき手立もなく兎や角やと工夫を廻らす中に清水申けるは我等牡丹を好みて雪根を分け居たる由語る新藏聞て私事も雪根分け様の傳を久敷懇望に候へ共未其便りを得ず是幸ひの御事成れば近比御無心ながら此傳を御免し下され候らへかしと願ひける清水辭退に及ぶと云へども新藏達而望故是非なく傳授申さんとて庭へ伴ひ行雪根分け様の傳を免しける此時新藏は袋を彼刀を出し誠の下繪は何んか祐乗が細工有て此彫は左ながら生の根笹に雪を持し風情なりと此細工を譽ながらすらりと抜いて申けるいかに清水權左衛門殿某社藤戸大右衛門が養子新藏と云ものなり主親の敵なり覺有るべしと云様切り付しかば清水も曲者心得たりと脇差を抜き請つ流しつ火花を散らして切結ぶ清水は戸田流の達者新藏は淺山一傳流の達人にてそのはや業人に越へたる上一心に思ひ込みし君父の仇に觸み有れば忠孝の切先失く終に清水を討取たり然る處へ彌助は此音に驚ひて縁先へいざり出て此有様を見て殘念がると云へとも腰立す齒嚙をなして申けるは武運に盡きたる我をも供に殺し吳よと足摺して泣けるとかや此騒動に邊り近所の者共掛付けてやれ人殺しよと新藏を追取巻き縛ばれくれと闘きける新藏わ少しも騒がず各方さのみ騒ぎ給ふ事に非ず某が義は松平下總守浪人にて親の敵なれば只今此者を討

留めたり此所に於て切腹せん事わいと安けれ共壹人の母を介抱致すものなし是依て御奉行所に参り母ぞん命の中の命乞を願ふべし早々御奉行所へ訴へ給わるべしと落付たる振舞なれば所の者共則御奉行所へ訴へける依て町御奉行水谷淡路守殿と與力同心の面々來り様子を尋早速に新藏を召連れ行て御奉行所に於て段々御吟味の上一部始終殘所なく訴へけるゆへ御評定有り 則 御月番の御老中衆を松平下總守殿へ仰遣されけるは此者に先知の通り遣はさるべき旨なり依て下總守殿御返答には此方の家來に松本新藏と申ものは御座なく候 併ながら藤戸大右衛門後家瀧と申者存命にて是有りし由 則 右新藏を養子として藤戸大右衛門と改名申付け先知遣し申べくとなり 則 お瀧新藏諸共に延寶四年十二月廿五日御屋敷へ召返され新藏を藤戸大右衛門と號し先知を其儘にて三百石下され相勤め今に子孫彼家中には有りとなり誠此者共親子共に揃ひも揃ふたる深志の士なり是依て後におもひ合すれば彼新藏が夢は觀世音の御告と思ひしが 則 借馬の彌助が落馬なり是かして念比に成り其便りを以て斗らずも其年の暮に敵討の事は偏に淺草の觀世音の御引合成るべし眞實に心を起しあがめ尊みなばなどか納受なからんや其利生如レ斯と云々去程に此大右衛門は其後觀世音を奉レ誓子孫に至るまで尊敬すとなり其後下總守殿勢州桑名へ御國替の節も道中定御供をして恙がなく桑名へ供奉致し追々立身致しけるとかや返々も孝心深き敵討世にまれ成る事共偏に觀世音の御導きにて本望成就せし社難有けれ

根 笹 の 雪 終

昭和四年九月十八日印 刷
昭和四年九月廿五日發行

特
第十七回配本
追加募集
第十三回配本

【非賣品】

帝 國 文 庫
(篇七十第)
仇 討 小 說 集

編輯者兼
發行者
右代表者
取締役社長

株式會社 博文館
大橋勇吉
印刷者 君島潔

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行所 株式會社 博文館

振替口座東京二四〇番

製版所 共同印刷株式會社
印刷所 共同印刷株式會社
製紙所 王子製紙株式會社
製本所 井上製本所
製函所 香取製函所

帝國文庫 第廿五卷 書目一覽表

第一回 人情本傑作集 (第十九篇)

當世虎の巻・寒紅丑日待（深情）婦女今川（郎）花街壽（女）・川の月春秋二季種・孝女二葉錦・仇競今様櫛（小）・金五郎假名文章娘節用・清談若緑（榮）・娘太平記操之早引・閑情末摘花（文）・所縁の藤浪

第二回 近世説美少年録 (第六篇)

近世説美少年録（年）・新局玉石童子訓・美少年録と其の人物・絲櫻春蝶奇縁

第三回 近松世話浄瑠璃集 (第九篇)

曾根崎心中（五）・薩摩歌（心）・心中二枚繪草紙（興）・りめん卯月紅葉・堀川波鼓（あ）・あしおひ心中卯月の潤色・心中重井筒（高）・心中萬年草・丹波與作待夜の小室節

淀鯉出世浦徳（お）・五十年忌歌念佛・心中刃は氷の朔日（二）

今宮の心中（梅）・川冥途の飛脚・夕霧阿波鳴渡・長町女腹切・大経師昔曆（喜）・生玉心中（お）・鐘の權三重帷子山崎與次兵衛壽の門松・博多小女郎波枕（紙）・中天網島（文）・女殺油地獄・心中宵庚申（文）・難波土産・今昔操年代記・竹豊故事（豊）・浄瑠璃譜（環）・外代年鑑

第四回 柳澤越後・黒田騷動實記 (第十五篇)

加賀・伊達・秋田騷動實記 (第十五篇)

第五回 梅告（こ）・鳥（よ） (第廿四篇)

春色惠の花・春色梅兒譽美（梅）・春色辰巳園（春）・英對駿語・春色梅美婦（春）・春告鳥・春の若草

583
15

